

書き下ろし&読み切り文芸マガジン

# signal

vol2. 紅葉

「きみの花飾り」  
入江棗

「王子と私とご主人様」  
広野未沙

「人形姫と泥棒悪魔」  
貴水玲

「くるくる」  
水島朱音

「世話焼き魔—メイド」  
番柵葵

「審判部な面々」  
諸星崇

企画・監修 榎本秋

株式会社榎本事務所

## はじめに

---

書き下ろし&読みきり文芸マガジン「s i g n a l」の第二号をここにお届けする。今回のテーマは今の季節に合わせて「紅葉」である。

本マガジンは、私、榎本秋と関係ある若手作家・番棚葵、榎本事務所所属作家の諸星崇の両名の賛同のもと、両名の作品に加えて榎本秋門下の四名の作家の卵たちの作品の、合計六作品を収録している。基本的に毎号テーマに沿って各人が自分の世界観、キャラクターで緩やかなつながりのもとに執筆する読み切り作品であり、各号ごとにどこから読んでもいいように、またテーマアンソロジーとしても楽しめるように留意して企画した（ただし、一部は作品としての面白さを優先してシリーズものの色の強い作品も掲載しているため、第一号とも合わせて読んでいただければ幸いである）。

さらに、普段から榎本事務所制作の本でお世話になっているアミューズメントメディア総合学院大阪校キャラクターデザイン学科の全面協力を得て、毎月イラストコンペを開催していただき、その上位作品を収録するという試みもさせていただいている。

本誌をひとつの踏み切り板としてに各参加作家、イラストレーターが新たな展開を手にすることを願ってやまない。

なお、昨今の電子書籍の隆盛なども鑑み、本マガジンは、榎本事務所HPで配布しているPDFファイルを改変しないことを条件に配布、複製は自由とする。ただし、有償での配布は印刷も含めて不許可とする。それでは、楽しんでいただけると幸いである。

また、感想やご意見など、特設ページのメールフォームなどご利用の上でいただけると大変うれしい。

榎本秋

# 目次

---

はじめに.....2

扉絵 .....3

イラスト提供      ヒトエ  
                            S n o w  
                            伊藤由希  
                            神内みさと  
                            雛咲瑠遮  
                            (掲載順)

きみの花飾り      入江棗.....8  
人形姫と泥棒悪魔      貴水玲.....18  
世話焼き魔ーメイド      番棚葵.....27  
王子と私とご主人様      広野未沙.....34  
くるくる                      水島朱音.....43  
審判部の面々      諸星崇.....53

解説 .....61











きみの花飾り

入江棗

## あらすじ・登場人物

---

### ○あらすじ

中学二年生の高瀬咲はあるトラウマにより人間不信となり、他人に仮面を被って接している。推薦によって生徒会長になってしまった咲は副会長に本性を暴かれたが、トラウマによって発生したピンチを救ってもらった。

今回は咲の姉、双葉のおはなし。

### ○登場人物

#### 高瀬香穂

長女。大学一年。両親が不在の高瀬家をまとめる。

#### 高瀬双葉

次女。高校二年。和菓子屋でアルバイトをしている。

#### 高瀬 咲

三女。中学二年。猫かぶりの生徒会長。

## 2、命令ではありません

「双葉ちゃん、これ新商品の試作品なんだけど」

店が閉店時間を迎え、入り口の扉を閉めると調理場から香苗さんが顔を出してきた。

「新商品！ なんですか、おまんじゅうとか？」

「秋だから紅葉型のもなかなんてどうかと思って。おまんじゅうだと広島の名物の真似になっちゃうからね」

頭に巻いていた三角巾をはずし、香苗さんの居るショーケースの方に向かった。調理場の奥ではきつと店長がこっそりあたしの反応を待っている。社交的な香苗さんに対して、店長は人前に出たがらないし寡黙。全く正反対の夫婦だ。

ショーウインドウの上に置かれた小皿に乗っている紅葉型のもなかに手を伸ばした。

「見た目可愛いですね。あ、あんこがいつものと違う」

一口食べると、食べ慣れているあんとは少し違う風味がした。さっぱりした感じ。

「さすが双葉ちゃんね。実験も兼ねて変えてみたんだけど、どう？」

「美味しいです。いい意味であとに残らないからいくつでもいけそう」

「良かった。まだいくつかあるからお姉さんたちの意見も聞いてもらっていい？」

「もちろん！」

うちの三姉妹は今時珍しく洋菓子より和菓子の方が好きだったりする。

あたしがこのバイトを始めた時、姉と妹はとてつもなく嬉しそうだった。現金な奴ら、と言いたいところだけど、自分も同じ狙いだったりする。

お土産に紅葉もなかと売れ残り的大福を貰って店を出た。

和菓子屋だから閉店時間は早いけど、後片付けも手伝うので退勤は八時くらいになる。

普通のバイトを比べれば短い勤務時間になるけれど、和菓子は好きだし、学校から遠い場にあるのでバレることもない。

高校はバイト厳禁という校則があるからバレたら一巻の終わり。

自給のよさに惹かれて学校の近くや駅前でバイトしていた生徒が、先生に見つかって停学をくらったという話をちらほらと聞く。

そんなことになったら内申が一気に不利になる。絶対に避けなければいけない。

なのに。

「いらっしゃいませー」

「あ、高瀬さん」

三日後、あっさりクラスメイトにバレた。

\*\*\*

学校は好きはなはずだった。

けど、今日ほど校門をくぐりたくないと思った日はない。

バイトがバレる要因に、生徒からの告げ口がある。

真面目な奴が律儀に先生に「誰々さんがどこどこでバイトをしていました」とご報告なさるのだ。

勿論、見なかったことにしてくれる奴も大勢居る。あたしの運は良かったのか悪かったのかまだ分からない。

見つかったクラスメイトは、クラスの中でも「まあ真面目なんじゃねえの？」と評される微妙な人物だったから。

「おはよー」

先生とすれ違う度にびくびくしながら教室に入ると、自分の席の前に仲良くしている真希が座っていた。元々そこは彼女の席で、いつもあたしより来るのが早い。

「おはよ……」

「何でそんなにテンション低いのよ。あとまた寝癖」

辛気臭い顔をしていたのか、真希は眉を少し歪ませた。

そんな真希の顔を見ながら鞆を机に置き木の椅子に座る。同時に真希は立ち上がってあたしの背後に回った。手にはワックス。

「バイトがバレた。停学食らうかも」

「うわ、それ確定？」

話しながら髪をいじられる。寝癖が残っている時、真希が直してくれるのだ。

その度に「あんた見てくれいいんだから、整えることを覚えなさい」と怒られるんだけど、今日はお説教も吹っ飛ぶほどの話題が目の前に転がっている。

「誰にバレたの？」

「浦くん」

名前を口にすると、真希は先ほどよりも眉を歪ませた。

「また微妙な人に……口止めできるか確率計算もできないよ」

まさに言う通り。これが真面目を着て歩くような人物だったら諦めもついた。

「あ、来た」

真希と揃って背後に目をやった。視線の先は廊下側の後ろの席。

さっきまで空いていた席に浦くんが鞆を置いていた。

周囲は浦くんの登校に誰一人として反応しない。関心がない。

彼と進んで話す人物など、このクラスには一人も居ない。

「説得はするんでしょ？」

直し終わったのか、真希はワックスの蓋を閉めながら席に戻る。

「するけどさ……何考えてるかさっぱり分かんないし。どう話したらいいんだろ」

クラスメイトが誰も彼を相手にしない理由。

ほとんど喋らないし口を開いてもよく分からないことしか言わないから。でも頭はいい。

グループ活動を重んじる日本の高校生にとって、浦くんは扱いにくいことこの上ない人種だった。

「見つかった時もさ、人の名前呼んでビビらせたかと思えばその後淡々と注文して会計して品物受け取って帰って行っちゃったんだよな」

「それ、浦くんっぼい」

本人が同じ教室に居るから会話は自然と小声になっていた。

真希と話している間にだんだんと気が抜けてきて、どうにかなるような気がしてくる。

懇願でも拝み倒してでも黙っていてもらえばいいんだ。

バイトが原因で進路が危うくなるなんて本末転倒だ。

「うし、あっちが何も言ってこなかったら放課後にでも話してくる」

「昼休みにしたら？ 早い方がいいと思うけど」

「香穂姉ちゃんの弁当をかきこむような真似はしたくないからやだ」

「あんた、けっこう余裕じゃない……」

\*\*\*

既に告げ口されてしまっているという可能性もあったけど、ホームルームに現われた担任は私のことなど全く気にかけていなかった。何事もなくホームルームは終わり、一時間目が始まる。

ほっとしていたら真希が首だけこちらを向いて笑いかけてきた。あたしもつられてにやける。お互い学校に来なくなったら寂しい仲だから。

あっという間に午前中の授業が終わって昼休みになった。

今日の弁当には確かちくわの磯辺揚げが入っていたはず。お腹が鳴るのを我慢しながら真希と机をくっ付けさせようとした時、

「高瀬さん」

普段はなかなか聞かない、でもついこの前聞いた声で名前を呼ばれた。

「ちょっと、いい？」

真希がご愁傷様という顔をした。

ここで「ごめん、ご飯食べてからで」なんて言ったらどうなるだろう。

泣く泣く弁当を教室に置いて席を立つ。

浦くんと一緒に教室を出ようとする、周囲が少しざわついた。

あたしのせいじゃない。

彼が誰かと一緒に居るということに注目しているからだ。

教室を出て階段を降りて渡り廊下を歩いて、随分と移動したけど浦くんはまだ足を止めそうになかった。

「どこまで行くの？」

移動の最中、一度も振り返らなかった浦くんがようやくこちらを見た。

無表情で何を考えているのかさっぱり分からない。

「他人に聞かれていいなら、別に俺はどこでもいい」

「すみませんでした。人気のない場所でぜひ」

抑揚のない声でとんでも発言をされ、嫌な汗が背中に流れた気がした。秋真っ盛りなんだから暑いわけないのに。

「まあいいか。ここで」

急に面倒になったのか、浦くんは端に寄ってこちらを見据えた。今居る場所は渡り廊下の終わり付近。人気はないけれど、いつでも人が来そうな場所ではある。

「え、ここじゃちょっと」

「先生に言うつもりはない」

「ほんとに！？」

人の話を聞く気がないらしい。けど黙っててくれる！

あやし運よかった！

「お願いを聞いてくれたら」

「お願い？」

え、何お願いって。よくあるパシリとか？

すっごい嫌だけどやるしかない。課題なり購買のお遣いなり何でもしてやる。

「付き合って」

浦くんから出た言葉はパシリじゃなかった。

予想外の発言に混乱したのか逆に思考が停止してしまったのか、頭の中には「どこに？」という今時マンガにさえ出てこないような単語が浮いている。

どうにかほんの少しだけ思考を巡らせることに成功し、別の文句が出てきた。

「どういう意味で？」

聞かなくても答えは分かるような気がしていた。そこまで馬鹿でも天然でもない。

だから聞かなきゃ良かった。

「最終的に性的な行為に及ぶ関係」

馬鹿でも天然でもないけど、さすがにここまでストレートな答えが返ってくるとは予想できなかった。

\*\*\*

「なにそのありがちな展開！」

デザート羊羹を食べながら事の次第を妹の咲に話すと、咲は目を輝かせながら机を乗り出した。顔に「面白い」と書いてある。なんて妹だ。

「お前、他人事だと思ってるだろ」

「バイトが続けられるなら私には一切デメリットないもの。この栗羊羹も美味しい。今度こないだ持って帰って来た紅葉もなか買ってきてよ。ちゃんとお金払うから」

そう言っている間も羊羹に手が伸びる。洗い物をしている香穂姉ちゃんの分まで食べてしまうんじゃないかというくらい、食べるペースが早い。

「でも言うこと聞かないと先生にバラされちゃうんでしょ？ 停学になっちゃ駄目なんだから付き合うしかないじゃん」

「そうだけどさ。付き合うって命令でできるもんじゃないだろ。想像つかないよ、あいつと手繋いだりデートしたり最終的にはセ……って無理、絶対無理」

ちらっと想像してみたけど羞恥心で頭の中がいっぱいになった。恥ずかしさが原因で死ぬるかもしれない。

「まあ確かに、他人と触れ合うなんてどういう神経してたらできるのか分かんないや」

「そこまで思うのはお前だけだ。いい加減その人間不信直せよ。相馬とは仲良くやってんじゃん。この間だって一緒にテスト勉強したんだろ？」

「仲良くないわよあんな奴と！ 双葉姉の貰うからね！」

咲はあたしの分の羊羹の一切れを一口でほおぼった。

「お前しばくぞ！」

「双葉姉が変なこと言うからいけないんだよ！」

机上で羊羹奪取の攻防戦を繰り広げていたら電話が鳴った。

「電話出て、お父さんたちだろうから」

キッチンから香穂姉ちゃんの声が聞こえた。

「あ、そうだ今日木曜日」

咲は羊羹のことなど忘れたかのように机から離れ、テレビ台に置いてある子機を取った。

「もしもし、お母さん？」

咲の嬉しそうな声が響いた。顔もいつも以上にほころんでいる。

「咲は反抗期ないわね。双葉とは大違い」

キッチンから香穂姉ちゃんがエプロンをはずしながら出てきた。あたしの隣の席に座る。

「香穂姉ちゃんだって淡々と反抗期してたじゃん。お父さん相手に半径一メートル以内に近付かないで、みたいな感じで。あたしは二人目だし分かりやすい反抗だったからマシだったらしいけど、香穂姉ちゃんの時はお父さん影で相当しょぼくってたみたいだよ」

「あの頃は世界で一番お父さんが嫌いだったわね。今となっては不思議な話だけど」

嬉しそうに話している咲を香穂姉ちゃんと眺めながら少し昔のことを思い出した。

お父さんの顔を見たのは中学一年が最後。当時小学生だった咲は寂しかったに違いない。

「いつ頃帰ってこれるんだろ」

「順調に返済できてるみたいだからその内帰ってくれるだろうけど、金額がね。でも私達がここで平和に暮らせるのは二人のおかげだから」

「お母さんがお父さんのところに行くって言い出した時はどうなることかと思ったけどな」

あたしもお母さんと話したかったけど、咲は当分電話を渡してくれる気がないようだ。ソファに座って長電話モードに入っている。

「告白されたんだって？」

香穂姉ちゃんは羊羹を丁寧に半分に割って口の中に入れた。洗い物をしながらあたしと咲の会話をばっちり聞いていたようだ。

「告白じゃない。付き合うように脅された」

「でも好きじゃないならそんなこと言うわけないじゃない。告白と一緒に」

そう言われても、あれが告白だなんてどうしても思えない。

話をしている最中、一切テンションが変わらなかった。

“付き合っ”てもまるで“手伝っ”とか、どうでもいいようなことを言うような適当さだったし。

それに、どんな目をしていたらあたしなんかを好意的に見れるのだろうか。

「ああもう、考えるのめんどい！ 明日のことは明日考える！ 咲、いい加減電話変われっ  
ての！」

「明日何かあるの？」

咲から子機を奪い取ろうと立ち上がる。香穂姉ちゃんが羊羹を持ったままこっちを見た。

「学校終わったらどこか寄ろうだって」

考えただけで憂鬱だった。

\*\*\*

「どこに行くの？」と聞いたら「こういう時ってどこに行くべきなんだろ」と聞き返された。誘っておいてこの言い草。脅されてなかったら拳の一つでも頬に叩き込んでやりたいところだ

。

「浦くんは行きたいところないの？」

「考えてなかった」

やっぱ殴っちゃ駄目？ イライラする！

とりあえずここから移動したい。学校からは出たけどまだそんなに離れていない。誰かに見られたら面倒なことになる気がする。

体を動かしたくてしょうがなくなった。そっちが決めてないならこっちで決めてやる。

「浦くん、バスケできる？」

「体育で邪魔にならない程度には」

「じゃあ決まり」

徒歩通学の浦くんを置いていかないように自転車を押して歩く。

方向はあたしの家。その途中に目的の場所がある。

思った通り、目的地には何人か顔見知り居た。

フリーのバスケットコートで出会って仲良くなった中学生達。

彼らはあたしの存在に気付くと、プレイを止めてこちらに向かって手を振った。

「先輩、久し振りですね」

「中間テストあったからな。てかお前この前より背伸びてない？」

この間まであたしの方が確実に大きかったのに、今は同じかすれすれで抜かされている。

「成長期ですよ。で、後ろの人は？」

中学生の一人があたしの後ろに居る浦くんを見た。その浦くんはバスケットゴールをまじまじと眺めている。

「もしかして彼氏とか？」

腹が立ちそうなにやけ顔をされた。

「違、うような違わないような……」

否定はできない。だって付き合うってことは彼氏ってことだし。

でも気持ち的には全くそのつもりはない。それで彼氏彼女って絶対おかしい。

考え出したら混乱してきた。

「なんすかそれ」

「なんでもいいよ、とにかくバスケしよ。ちょうど六人だから3 on 3で」

中学生は四人、あたしと浦くんを入れて六人。グーとチョキでチームを分けたら、あたしと浦くんは同じチームになった。

「こんな場所があったんだ」

試合開始前、浦くんはボールをじっと見ながら呟いた。

「ライトがないから日の入りまでしかできないけど。金のない中学生にはちょうどいい遊び場だよ。あいつらよりあたしの方が先住人」

「高瀬さん運動好きだよな。体育とか楽しそうだし」

何で、と言おうとした瞬間中学生たちに呼ばれた。試合を始める合図。

浦くんはボールをあたしに渡してコートの中に入って行った。

何で、知ってるの？

体育は男女別で。そりゃやる場所は同じ校庭か体育館だけど、校庭では距離があったり体育館ではネットが張られたりする。

男子が何をしているかなんて特別意識して見てないと分からない。男子も同じはず。

特別意識して見てたわけ？

試合には殆ど集中できなかった。シュートはずしたり、パス回しミスったり。

同じチームになった中学生に散々怒られた。浦くんがフォローしてくれなかったら負けてたって。

身長が一番高いというのもあるけど、浦くんは普通に上手かった。頭がいいのか、いい場所に居てパスを貰ったり、パスのタイミングが絶妙だったり。

見た感じ、運動できなさそうなのに。

見ないと分からない。

知ろうとしないと、本質なんて見抜けない。

ここに来た時には既に四時半を回ったところだったから辺りはすぐに暗くなった。中学生たちは帰って行って、コートにはあたしと浦くんだけになる。

まだ六時にもなっていないかった。高校生が大人しく家に帰る時間ではない。

「咽渴かない？」

これからどうするか考えあぐねていたら、浦くんがそう聞いてきた。

確かに運動したから渴いている。

「んじゃマックでも行く？　すぐ近くの駅前にあるよ」

「や、カフェとか、騒がしくないところがいい」

カフェなんてリッチなところ……！　高校生ならマックかミスドが定番でしょうが！

そんなところ遊びに行つて『ちょっと贅沢』って時くらいにしか行かないっての。

「駅前にある？」

マックのすぐそばに落ち着いた雰囲気のカフェがある。そう答えると「じゃあそこで」で決めてしまった。

バスケットをあたしが勝手に決めてしまっているからおあいこなんだけど。

頭の中で財布の中身を確認した。給料日前で英世さんが一枚入ってるかいらないか。

この一枚であと五日ほど過ごさなきゃいけない。明日のバイトで買おうと思ってた豆大福は給

料日までおあずけになりそうだ。

カフェになかなか行かない理由はなにもお金だけじゃない。単純にコーヒーが飲めないから。だから行っても無難にアイ스티ーしか頼めない。いろんな種類があって気になるものも多いのに。

自転車を入り口の前に置いて店内に入った。私服姿のカップルや友達同士、スーツの男性が多い。制服を着ているのはあたし達くらいではないだろうか。確かにマックとかに比べると静かだけど。

半分くらい空席だったので席取りをする必要がなかった。二人でそのままレジへ向かう。

「アメリカンでいい？」

「なにそれ」

「コーヒーだけど」

種類でも言われてもさっぱり分からない。

「コーヒー飲めない。苦くて」

「カフェオレは？」

「飲める」

「じゃあラテならいけると思う」

あたしので了承を取らずに浦くんはラテとエスプレッソなるものを注文してしまった。そのままお会計もしてしまう。

「浦くんお金」

「いらない。先座ってて」

奢ってもらってしまった。その場に居続けるのもなんだかおかしかったので、言われた通り空いていた奥の席に座る。

背後にある壁時計を見てふと香穂姉ちゃんの顔が思い浮かんだ。遅くなることは知ってるけど、何時に帰るとまでは言っていない。まだ帰らないとメールを入れておくべきか。

夕飯を食べないものと勘違いされて咲にあたしの分まで食べられたら事だ。咲は調子を悪くすると食欲がガタ落ちするけれど、元気になれば姉妹の中で一番食べる。

浦くんが来る前に手早くメールを送信した。携帯を閉じて鞆に仕舞うとやる事がなくなったので、なんとなくレジに居る浦くんの後ろ姿を眺める。

少し癖っ毛。雨降ったら髪爆発してそう。生徒手帳に載っていきそうな制服の着方。バスケする時でさえ第一ボタンをはずさなかった。猫背だ。身長はそこそこあるし、運動できるし、悪い顔じゃないし、しゃんとしてもっとハキハキ喋れば結構かっこいいんじゃないか……。

って、何考えてるのあたし。

香穂姉ちゃんが告白とか変なこと言うからだ！ 帰ったら文句言ってやる！

頭を振って再び正面を見たら目の前に浦くんの顔があった。

視線が今までで一番強く合う。

「おわっ」

びっくりして勢いよく後ずさってしまった。

「首振ってどうしたの？」

あまりに無表情だから鉄火面じゃないのかと思ってた顔に、微かな「訝しい」という感情が浮かんでいた。

なんだ、顔の筋肉固まってないじゃない。

「何でもないから気にしないで。ありがとう」

話題を無理やりコーヒーに逸らせる。ラテがどっちか分からなかったので適当に色がまるやかな方を選んだ。何も言われなかったのが当たったようだ。

運動した直後は熱かったけど、ここまで来る間に体は少し冷えていた。ラテを一口飲む。熱すぎない温度でちょうどいい。

「これ飲める」

苦くない。かと言って甘くもないから砂糖が欲しいけど。

「多分そのままじゃおいしくないだろうから、砂糖入れた方がいい」

言われた通りに角砂糖を一つ入れた。もう一口飲む。

「おいしい」

「よかった」

ラテの湯気に遮られてよく見えなかったけど、一瞬だけ笑ったように見えた。

見間違い、じゃないと思う。

「高瀬さんって何でバイトしてるの？」

急に話を振られた。一瞬だけの笑顔が頭の中で散ってしまう。

「何でって、お金が欲しいから」

「他の人達と同じ意味で？」

見破られてる。他の奴らはただ「服買う金が欲しい」とか「遊ぶ金が要る」とかそんな理由なんだろうけど(偏見かもしれない)、あたしはそうじゃない。

何で分かるんだろう。『特別意識して見てた』から？

とにかく、付け焼刃な理由が通じる相手ではないということは分かった。

あまりペラペラ話したい話題じゃない。身内以外で知っているのは真希くらいだ。

でも何故か、浦くんならいいかと思ってしまった。

「うち、借金あるんだよね。それなりの額の」

流石に予想してなかったのか、浦くんは目を少し見開いた。

他人と比べたら変化とはいえないけど、彼にとって恐らく大きな反応。

「ベタな話だけど、借りてた人が逃げちゃって保証人のお父さんに負債が被せられた。お父さんはお母さんやあたし達に迷惑かけないようにって離婚して今九州に居る」

ラテを冷めない内に飲んでしまいたい。一息入れる意味も兼ねて飲んだ。浦くんは何も言わない。続ける、という意味か。

「うち一軒家なんだけど、保証人のこともあって土地と家の名義をお母さんにしてたのね。それであたし達は家を閉め出されなくて済んだ。けどお母さんが耐えられなくなっちゃって。嫌いで離婚したわけじゃないから。それでお父さんを追って九州に行っちゃった」

「じゃあ今、両親と別居」

「そう。でもうち三姉妹だからそこまで言うほど寂しくないし、仕送りもちゃんと貰ってるから生活できるし、高校にも行ける」

ここまでじゃ質問の答えにはなっていない。証拠に浦くんは納得しきっていない様子。

「高校には行けるけど、こんな状況で大学にまで行かせて貰うわけにはいかないよね。妹はこれから高校だし。だから三人で相談して、大学の学費は自分達で出そうって決めたんだ。これがバイトしてる理由。学費貯めてるってわけ。まだどこの大学行くとか決めてるわけじゃないけど、後々困らないように。あと小遣い。仕送りも甘ったれて全部使うわけにはいかないから、あたしの小遣い分と思われる額は返してる。微々たる額だけど、早く借金返して帰って来て欲しいしね」

そんなあたし達に、お父さんたちは電話の度に申し訳ないと嘆く。無理をしているわけじゃないのに。大学の学費を自分で出す子どもなんてたくさん居る。お母さんがお父さんの元に行ったのは確かにわがままだと思うし、周囲からすれば批判されることかもしれないけど、あたし達が許してるんだから問題ない。借金は順調に減っている。二人が帰ってくる日は決して遠くないんだ。

浦くんの顔を見て、喋りすぎたかと後悔した。眉間に少しだけ皺が寄っている。

「ごめん、ヘビーな話しちゃった。自分達じゃ全然気にしてないからさ、あんまり深刻に思わないで大丈夫だから」

無駄に両手を振って平気だということをアピールした。けれど浦くんは皺をなくすどころか顔の前で手を組んでなにやら考えこんでしまう。

「俺もそれくらいすべきかな」

何て返したらいいか分からないほどの真剣な声だった。ただ見ていることしかできない。

ふと浦くんはあたしの後ろにある壁を見上げた。その後すぐに立ち上がった。

「ごめん、ちょっと」

それだけ言って浦くんは鞆を持って席を離れてしまった。向かった先はトイレ。

店から出て行くのかと思ってびっくりした。安心はしたけど、トイレって雰囲気でもなかった

。

後ろを向いて浦くんが見た時計を見る。ちょうど六時半を過ぎたところだった。この時間に何かあるのだろうか。

浦くんは五分ほどで戻ってきた。座ってすぐコーヒーを飲み干す。急いでいるみたいに。

「ごめん、帰らないといけなくなった」

実際急いでいるようだった。あっけにと取られてしまい、「あ、うん」と短い返事しかできなかった。店を出ると浦くんは「じゃあまた」とだけ言って足早に去って行った。

何なんだ一体。理由くらい教えてくれてもいいのに。

おいしいと思えたラテが、胃の中でくすぶっているように感じた。

\*\*\*

浦くんにバレたことでバイトの時に少なからず警戒するようになってしまった。外を見ていて似たような制服を見つけると自分の高校ではないか疑ってしまう。今のところ十割思い過ごしだけど。

今日はあたしがバイトに入ってからあまりお客さんが来なかった。元々昼前やおやつ時がピークだから夕方に混むことはそうないのだけど。

そういえば、珍しくあたしがバイトをしている時間によく来るおばあちゃんを最近見ない。あたしが入る前からの常連さんみたいで、香苗さんと仲がいいからその流れであたしもよく話す仲だった。

物腰の柔らかいおばあちゃん、他人のあたしにも優しくしてくれた。なんでもあたしと同年の孫が居るらしい。

一旦考え出したら気になって仕方がなくなってしまった。お客さんが居ないのをいいことに、棚に置いている商品の整理をしていた香苗さんに聞いてみることにする。

「香苗さん、最近この時間くらいによく来るおばあちゃんって来ました？」

「ああ、坂崎さん？ そういえば来てないわね。最低一週間に一回は来てくれるのに、ここ三週間くらい来てないかも」

やっぱり。あたしがバイトに入っていない日に来ているのかもと思ったけど違った。

どうしたんだろ。

「もしかしたら足悪くしちゃったのかも。言ってたじゃない、足が痛むって」

それならそれで余計に心配になる。生活を助けてくれる家族は居るのだろうか。旦那さんは随分前に亡くなったって聞いたことがある。

「余計なお世話かもしれないけど、どの辺りに住んでるのか聞いておけば良かったかもね。どうにもできないわ」

香苗さんに同意しながら違うことを考えていた。

あのおばあちゃん、誰かに雰囲気似ている気がする。

しばらく考えてみたけど、どうしても誰か分からなかった。

\*\*\*

「双葉、あれから浦くんとはどうなの？」

真希がお弁当の卵焼きを食べながら聞いてきた。

「別に。なーんもない。たまにメールするくらい」

つまらない質問をされたな、とってしまった。真希のせいじゃない、浦くんのせいだ。

一緒に出かけた日から一週間、学校では全く話しかけてこないし、そもそも半分くらい学校に来ていない。体調が悪そうというわけもないようだ。頻繁に欠席する人だったのだろうか。

連絡先は交換してあったから、様子を窺うメールを何度か送った。返信はそっけないものばかりでやり取りはすぐに終わってしまう。

何を考えているのかさっぱり分からない。この間急に帰った理由を知りたいのに、何だか聞きづらいし。

「付き合えて言ったわりには扱いが適当ね」

「都合いいよ。バイトのことバラされなければいいんだし。変なことに振り回されなくて助かる」

今日も休みかと思っていたが、つい数十分前の四時間目の途中にやって来た。クラスメイトたちの注目を一手に受けても全く動じない。あたしは見なかった。視線なんか送ってやらなかった。

そして昼休みの今、そそくさと教室を出て行ってここには居ない。

「助かる、とか言ってる割には機嫌悪そうだけど」

空になったお弁当箱を仕舞う真希にぼそっと指摘された。

「そ、んなことないよ」

おかずのから揚げを一口で放り込んだ。味がよく分からない。最後の一個だったのに。

「嘘つくの下手ね」

「嘘じゃないって」

今は悪くない。毒気を抜かれたように脱力してしまったから。最後に残っていたブロッコリーを食べてお弁当箱の蓋を閉める。今日も香穂姉ちゃんのお弁当は美味しかった。夕飯は当番制だけど朝食とお弁当は香穂姉ちゃんが毎日作ってくれている。

鞆にお弁当箱を戻した時、内ポケットに入れている携帯が光っているのに気が付いた。メールの着信があったことを知らせる点灯。

開いてみると、浦くんからだった。受信時間はお弁当を食べている時間。学校ではサイレントモードにしているから気付くわけもない。

内容は「今日の放課後、時間ある？」の一言だけ。それでも今までとは違う。あっちから「？」マークがつくことなんてなかった。

今日はバイトも委員会もない。夕食当番ではあるけど、事情を話したらきっと代わってくれる。

でも素直に「ある」と返事ができない自分が居た。

「メール？ もしかして浦くんから？」

「そう。今日時間あるかって」

「あるの？」

「あるにはあるけど」

そう答えたままメールの本文を見続けていたら、いきなり携帯を奪われた。

「ちょ、真希！？」

「うわ、業務連絡みたいなメール」

真希はそう言いながらあたしの携帯を勝手に操作した。突然のことに取り返す気力も湧かない

。

「はい、双葉がいつまで経っても返そうとしなかったから代わりに返しておいたよ」

満面の笑みを浮かべながら携帯を返してきた。一体どんな内容で返したんだ。

おっかなびっくり送信済みメールを見ると、業務連絡と同じテンションで「空いてる」とだけ書いてあるだけだった。全身の力が抜けてしまう。

「びびらせんなよ」

「さっさと返さないのがいけないのよ」

とにかく、これで放課後一緒に居ることになってしまった。聞きたいこと、聞いてもいいのだろうか。

「あっちから誘ってきたんだよ。扱いが適当ってのは撤回しないとね」

「分かんないよ。これじゃ都合がいい奴じゃん」

「そうやって卑屈にならないの。この際ちゃんと話してきなよ」

真希は鞆からいつも使っているワックスを取り出す。

「体育でちょっとぐしゃぐしゃになっちゃったから、直してあげる」

真希が背後に回るのをあたしは黙って待つしかできなかった。

\*\*\*

待ち合わせはこの間と同じ、学校から少し離れたところにある小さな公園。クラスメイトに見つかりたくなくて、あたしが指定した。

教室を出るタイミングをずらして、公園に向かう。浦くんの方が先に教室を出ているからもう着いているはずだ。

思った通り、浦くんは公園の中のベンチに座っていた。何をすることもなくぼーっとしている。乗ってきた自転車を入り口近くに置いて中に入った。

「お待たせ」

声をかけるとこちらを見上げた。真ん中辺りに座っていたのを端に寄る。隣に座れということだろう。

素直に言うことを聞くのも癪だったけど、こんなところで意地を張ってもしようがないので浦くんから少し距離を置いて隣に座った。

「メールありがとう。ろくに返事できなくてごめん」

いきなり気にしていたことその一について謝罪される。そう言われてしまうと嫌味の一つも言えない。

「いいよ別に。結構休んでたし、携帯に構ってられなかったんでしょ？」

言えないと思いつつ口から出たのは皮肉のような言葉だった。自分でも可愛くないと思ってしまう。

「ちょっと、忙しくて」

「ふうん」

「ごめん」

「謝らなくていいって。浦くんさ、自分が優位に立ってるって自覚ある？ もっと好きにしなよ」

何でかイライラしてきた。けど何にイラついているのかが分からない。

浦くんにか、本心でもないことを言う自分にか。

「そうだけど、そういう風に考えたくない」

「あたしはそういう風にしか考えられない」

脅されて、強制的に結ばれた関係。

何もかもが命令みたいなものだ。この間はあたしが主体になってしまったりもしたけど、本来は浦くんが決めることで。あたしには「はい」「いいえ」を言う権利もない。

重い空気に耐えられなくなり、大きく息を吐いた。見上げると黄色に色を変えた葉が数枚舞っているのが見える。そばにイチョウの木が生えていた。

何も言い返されないので横を向いてみると、浦くんは真っ直ぐこちらを見ていた。

相変わらずの無表情だけど、瞳には力がこもっていて。

逸らせない。

「じゃあ、あの身の上話も嫌々話した？」

返答がすぐには浮かばなかった。

あの時あたしは何を思ったか。

あんまり話したい話題ではない。でも、浦くんなら、って。

突然自分の考えに自信が持てなくなった。

足が底なし沼にはまった気分。とっさに真希が直してくれた髪を掴んだ。

「高瀬さん？」

浦くんの手がこちらに伸びようとした時、どこかからバイブ音が聞こえた。すぐ近く。

浦くんの携帯だったようで、伸びてきていた手は鞆の方へ方向転換する。

取り出した携帯のサブ画面を見るなり、浦くんは血相を変えた。

「もしもし、何かあった？」

電話だったようで、ベンチから立ち上がって話を始める。声に焦りが混じっている。

「痛い？ どこが？ 足？ なあ、返事してばあちゃん！」

混じるどころの騒ぎではなかった。焦りを乗り越えて狼狽している。

「どうしたの？」

「ばあちゃんが」

顔から血の気が引いていた。携帯を持つ手が微かに震えている。

「おばあちゃん？ 何かあったんだよね。どこに居るの？」

「家……」

「誰か居ないの？」

返事は小さくうなずいただけだった。

もしかして、カフェで急に帰ったのもおばあちゃん絡み？

今はそんなことを考えている暇はない。

「しっかりして！ とにかく家行かなきゃ。ここから近いの？ バス？」

バス、と小声で聞こえる。学校の近くにバス乗り場があるけど、そこなんだろうか。

いちいち聞くのも面倒だった。

「行くよ、走って！」

手を引いて公園を出た。自転車を置いていたけど無視。二人乗りできないんじゃ邪魔なだけ。

「バスってそこのでいいの？」

「いいけど、この時間当分来ない」

「ああもう！」

バス停のある大きな道路に出た。左右を見渡す。幸運なことにちょうどタクシーが通り過ぎようとしたところだった。勢いよく手を上げて止める。

タクシーが止まってたじろいだ浦くんを押し込み、続いてあたしも乗り込んだ。運転手のおじさんは怪訝な顔をしている。制服姿の高校生を乗せる機会なんてそうないのだろう。

大丈夫、給料は出たばかりで財布の中は潤っている。

「どこ行けばいいか言って。お金の心配はしないでいいから」

背中を押して促した。まだ顔色が戻らない浦くんは聞き取りにくいぼそぼそ声で行き先を運転手に伝えた。ここから自転車なら三十分くらいの距離。車ならすぐだろう。

「急いでください」

あたしからはそれだけ言うと、タクシーはゆっくり発進した。

押した背中が震えている。

「こっちからも電話してみなよ。出るかもしれない」

浦くんは言われた通りに電話したみたいだけど、電源が切れているようだった。ますます顔を青ざめさせる。

あたしは背中をさすることしかできなかった。

「大丈夫、大丈夫だから」

突然の停電でパニックになった咲のことを思い出す。

すぐに明るくなっても落ち着くのには時間がかかった。

それでも、家ではあたしと香穂姉ちゃんが、学校では性格は悪いけど人間は悪くなさそうな男が傍に居てあげられる。

浦くんには誰か居るんだろうか。

居ないんなら、あたしが居てあげたい。

浦くんの家は建って何十年も経っていきそうな古い一軒家だった。

タクシーから飛び降りた浦くんは乱雑にドアの鍵を開け、中に入った。あたしも入っていいものかたじろいでしまったけど、緊急事態だからと言い聞かせて後に続く。

浦くんは真っ先に廊下の奥へ進んでいった。左奥にあるふすまを開け放つ。

「ばあちゃん！」

ワンテンポ遅れてあたしも部屋の中を確認した。

おばあちゃんが足を押さえて唸っている。浦くんは混乱しているのかおばあちゃんのことを呼ぶばかり。鞆から携帯を取り出して救急車を呼ぼうとした。が、改めておばあちゃんを見てその手を止める。

「坂崎のおばあちゃん!？」

バイト先によく来ていたけど最近見なかったおばあちゃんだった。

誰かに雰囲気似ていると思っていたけど、浦くんの親戚だったのか。

近くに携帯電話が転がっていた。見ると充電が切れたのか、電源が落ちている。浦くんとの電話が途切れた理由はこれか。

とにかく救急車を呼ばないと。一瞬番号が一一九か一一〇か分からなくなる。普段かけることなんてないから混乱してしまう。

一一九にかけて状況を説明したあと、ここの住所を話してもらうために浦くんに携帯を渡す。まだぐらついていたので、しっかりして欲しい意味をこめて両肩を叩いた。それで目が覚めてくれたのか、冷静に住所を伝えている。その間おばあちゃんの傍に寄った。

「おばあちゃん分かる!? 和菓子屋のバイトの双葉だよ！ 今救急車呼んだから」

「ふたばちゃん……？」

「そう！　すぐ病院行こう。もう少しだけ我慢して」

浦くんと二人でおばあちゃんを励ましていたら救急車のサイレンが聞こえた。家の外に出てこちだと誘導する。

担架を持った救急車の人達がせわしなく家の中へ入って行った。とりあえず、これで一安心だ。浦くんは同乗するだろうからあたしは退散した方がいいかもしれない。

そう考えている内に担架に乗せられたおばあちゃんと浦くんが出てきた。

「浦くん、あたし帰るから。落ち着いたらメールして」

「どこの病院に行ったか分かったら連絡する。遠くなかったら来て」

見当違いの返答だった。

「来てって、あたし家族でもなんでも」

「頼むから、一緒に居て」

一瞬だけ手を握られた。救急車の人に呼ばれた時には既に離れていて。

それでも、高い温度はしっかりと伝わっていた。

「あの日店に行く前から知ってた。高瀬さんがあそこでバイトしていること」

おばあちゃんが連れて行かれた病院は浦くんの家からそう遠くない大学病院だった。今は鎮静剤を打たれて眠っている。あたし達は病院の歓談スペースに来ていた。ここならゆっくり話ができる。

「おばあちゃんから話聞いてたの？」

「そう。俺と同年だってよく話してた。世間話に付き合ってくれる、おばあちゃんって呼んでくれる。外で会ったら荷物を持ってくれた。もう一人孫ができたみたいだって。名前を聞いたらびっくりした。クラスメイトだったから」

浦くんがこんなに話すのを初めて聞いた。あたしが質問にも不満足なく答えてくれる。

何でおばあちゃんと苗字が違うのか——母方の祖母だから。

両親は——別居中。どちらにも付いていきたくなかったからばあちゃんの家に移り込んだ。

この間急に帰ったのは——ばあちゃんの調子が悪くなったから。学校を休みがちだったのは心配ではしかなかった。

何であの日店に来たのか——ばあちゃんが食べたいと言ったから。あと、話をするきっかけが欲しかった。

「浦くんは、あたしの何がいいの？」

握られた手の温度はまだ忘れていない。

「始めは印象が良かったとか、その程度のものだったんだと思う。けどこの前バイトをしている理由を聞いて、はっきりした」

その温度が再びあたしの手を包んだ。

「命令じゃなくてただの頼みでも、応えてくれる？」

\*\*\*

「はい、直ったよ」

真希が背後で手を叩いた。寝癖を直せた合図。

「ありがと。鏡持ってきてたっけな」

「確認するの？」

「？ しちゃ駄目？」

真希の腕を信用していないわけではない。自分が今どんな髪型をしているのか気になるだけだ。ここ最近では自分でちゃんと直していたのに、今日は寝坊してしまってそれどころではなかった。

そういえば髪が伸びた気がする。もうすぐ冬だしこのまま伸ばしてしまおうか。

ふと、どんな髪型が好きなんだろうと気になった。

「双葉さ、変わったよね」

自分の席に戻った真希がワックスを鞆の中に仕舞いながら呟いた。

「そう？」

「そう。いつごろからだったかな。二週間くらい前？」

二週間前、浦くんのおばあちゃんが病院に運ばれたころ。

おばあちゃんはいくらもすぐ退院できた。入院中にバイト先の新作のもみじ最中を持って行ったらすごく喜んでくれた。

浦くんとはあれからまともに話していない。嫌なんじゃなくて、あんなことを言われたのかと思うと何を話したらいいのか分からなくなってしまった。

あの返事はまだしていない。自分でもよく分からなかったから。

この二週間の思考回路は彼のことばかりで埋め尽くされた。

今もまた頭に浮かんで来てしまう。

「変わったって、どこが？」

気を紛らわせるために聞いてみた。すると真希は頬杖をつきながら

「髪を気にするようになった。鏡を学校に持ってくるようになった。椅子座ってる時に行儀悪く足開かなくなった。あれだけ注意しても直らなかったのに。男っぽい仕草が抜けてきた。ぼーっとすることが多くなった。今までほとんど聞かなかったため息が増えた。

浦くんのことを話す時、わざとつまらさそうに話してる。何かを隠すみたいに」

ほぼ息継ぎなしで答えた。あっけに取られてしまう。

一つ一つ確認する。髪、気にする。鏡、最近持ってきてる。足、確かに開かなくなった。恥ずかしいし。

恥ずかしいって何だよ。今までちっとも気にしなかったのに。

誰に見られたら恥ずかしいわけ？

全てを確認し終えた時、熱湯を被せられたみたいに体全体が熱くなった。

何これ。

あたしは何を隠してるっていうの。

それとも気付いていない振りをしているだけなの。

「あたし、気づいちゃったって瞬間初めて見たわ。貴重な体験をありがとう」

真希の含みを込めた笑顔を見ることができなかった。

背後で教室の引き戸が開かれる音が聞こえる。真希が「あ」と漏らした。

振り向いた先に居る人物が誰か分かった瞬間、この場から逃げ出したくなった。

人形姫と泥棒悪魔 貴水玲

## あらすじ・登場人物

---

### ○あらすじ

「感情」を知らないダイヤの心臓を持つクラリッサ姫。『人形姫』と呼ばれる彼女は森の塔で孤独に暮らしていたが、ある日人の大切な物を盗んで空腹を満たす悪魔・ゼルと出会い外の世界に興味を持つ。お人好しのゼルを巻き込み、クラリッサはさまざまな「心」に出会う旅に出る。

### ○登場人物

#### クラリッサ

『人形姫』と呼ばれる喜怒哀楽が極端に少ない姫君。ダイヤの心臓と古い物に宿る思いが見えるサファイアの瞳を持つ。

#### ゼルナーガ（ゼル）

人間から大切なものを「盗む」ことで空腹を満たす悪魔。クラリッサの心臓を狙っている。

## 第二話 ふたつの願い

ユヴェール王国という小さな美しい国に、心優しい王様とお妃様がいました。

二人の間には長い間子供ができませんでした。ようやくかわいいお姫様を授かりました。しかしクラリッサと名付けられたお姫様は、生まれて一日で死んでしまったのです。

すぐれた魔女であったお妃様は自分の命を国宝の大きなダイヤモンドに、魔力を二つのサファイアに吹き込んで娘に与えました。でもお妃様は「心」を王様に渡して逝ってしまったため...  
...甦ったクラリッサにはほとんど感情というものがなく——いつしか『人形姫』と呼ばれるようになったのです.....。

「——はて、“喜ぶ”とはどういうものだろう？」

マシュマロやプリンやクリームパイ、甘いお菓子の香りついたパンケーキ型のメッセージカードから、クラリッサは人形のように愛らしいつくりの顔を上げた。

ここはユヴェール王国の南の果て。深い森の中にひっそりと建つ石の塔にある書庫。

大きな天窓から差し込む柔らかな朝の光が、ぎっしりと知識の詰まった書架に、床に積み上がった本のタワーに降り注ぐ。

書物で埋め尽くされた部屋の真ん中には小さな猫足のテーブルがある。塔の主人であるクラリッサはそこに座り、ちょこんと小首を傾げていた。

——その仕草はかわいらしいのだが、その顔は凍りついた沼のように無表情だ。しばらく壊れた人形のように首を曲げたまま考え、クラリッサはそのまま書架に顔を向けた。

「コルネリウス殿」

サファイアの瞳をきらりと光らせそう呼べば、クラリッサの見つめる本棚の一角から古めかしい哲学書がばさりと落ちページが開かれた。

『ほっほっほ。おはようございます、姫君。本日の疑問はなんですか？』

ページの上に、茶色いローブをまとった白髪白髭の老人の姿が幻灯のように浮かび上がった。古い書物に宿る“知識の欠片”である老人・コルネリウスは、白眉に埋もれた目を細めクラリッサに会釈した。

クラリッサの瞳には、何百年と時を超えた古き物に宿る“心”を見る力がある。それは魔女であったお妃様が彼女に遺した特別な力だった。

「うむ。またお父様からまたカードが届いてな。今日のは香りつきだ」

コルネリウスの問いかけにコクリと頷き、クラリッサは手元のパンケーキ型カードを広げて見せた。そこにはこう書かれている。

『クラりんへ』 元気にしてるかい？ ごめんね、会いに行けなくて.....お城から遠く離れた場所で一人で暮らすのはさみしくないかい？ これも悪い魔法使いや魔物からクラりんをダイヤを守るためだって大臣は言うんだけど.....。でも十五歳のお誕生日には会えるね！ もうすぐだね！

パパはうれしくて毎日ニヤけっぱなしです。クラりんもパパに会えるの喜んでくれてるよね？

じゃあまた書くね。今日もよい一日を！　　パパより』

「……このところずっと同じような内容の手紙をもらっているのだが、“喜ぶ”とはどう表現するのかわからず返事が書けない。どの本にも載っていないくてな」

天井まで伸びる、壁一面の書架をクラリッサは見回した。

この部屋にある本はすべて、王様がクラリッサのために世界中から集めさせたものだ。

国宝ダイヤを心臓に持つクラリッサが悪者に見付からず安全に暮らせるように、この森の塔は建てられた。ここにいるのはクラリッサと『人形姫』を恐れる世話係の侍女とコックだけ。誰も訪れないし外にも出られない。そんな閉鎖的な暮らしの中で彼女が頼れるのは何千もの書物と、唯一の話し相手であり彼女の家庭教師でもある本の住人なのであった。

『そうですね、“喜ぶ”というのは何かを成し遂げた時や願いが叶った時の感情表現ですな。お父上のようにこれから起こる未来への期待に胸を躍らせるのもその一つです』

「胸が躍る……？　勝手に動くのか？　なんと奇怪な」

自分のドレスの胸元を見下ろし、クラリッサはわからないくらいかすかに眉を寄せた。

『いえいえ、そのような気分になるということですよ。気持ちが高ぶり体が舞いあがるような——わしも若い頃は仲間たちと様々な対象を研究し壮大な議論を繰り広げ……答えを得る喜びを分かち合ったものじゃ。他に何もいらなと思える幸福な時でした』

しわがれた両手を胸に当て、コルネリウスが豊かな白鬚の合間から恍惚としたため息をもらす。つややかな長い黒髪を揺らし、クラリッサは手の中のカードを見た。

「……お父様はなぜ私の誕生日に、胸が飛び跳ね体が浮くような思いをしているのだ？」

『それは姫君がお生まれになった日だからですよ。そして無事にご成長なされたからです』

「……それはよいことなのか？」

父が手紙に書いているクラリッサの誕生日とは、生まれた日ではなく一度死んで甦った日(……)のことである。

『姫君——』

クラリッサの疑問の意味に気付いてコルネリウスが声をかけようとした時、

『はははは——っ！』

豪快な笑い声とともに天井近くから大きな装飾本が落ちてきた。

『喜びを知りたいのなら、この騎士ジルドレイにお任せを！　はっ！』

“騎士道物語”と書かれた美しい表紙が開かれ、白馬に乗った青年が飛び出す。

前足を振り上げいなく白馬の手綱を引き、白銀の甲冑を着た美しい青年——ジルドレイはひらりとその背から降り立った。

「おお、ジルドレイ。久しぶりだな」

しばらくの間訳あって姿を見せなかったもう一人の“古き知識”の姿に、クラリッサはサファイアの瞳をほんのかすかに見開いた。

『ご無沙汰しております、我が主。まずお詫びを。私の不在の間、お寂しい思いをさせてしまったことでしょう……ですが苦悶の日々と数々の苦難を乗り越え、愛しき姫君の元へようやく戻って参りました。私が来たからにはもう安心でございます！』

『何が苦難じゃ、ヒルデガルドに失恋しただけのくせに。お前さんは大げさんじゃよ』

クラリッサに向かって跪いたジルドレイをコルネリウスが白い目で見る。

ヒルデガルドは詩集に宿る“古き知識”で、クラリッサのマナー教師である淑女だ。

ジルドレイは化粧とおしゃれが命であるその貴婦人に懸想していて、こっぴどく振られた日から今日までずっと傷心を理由に引きこもっていた。

『何をおっしゃいます、老師！ 愛に破れた胸の痛みとは戦場で受けたどんな傷にも勝る苦しみなのです！ それに打ち勝つことこそ苦難と言わずとして何と言うのです！』

きりっと表情を引き締め、ジルドレイが反駁する。

『ですが私は乗り越えました。そして気付いたのです、やはり私には愛が必要なのだと。どんなに虐げられようと諦めてはならぬと！ 再びこの胸に赤い花を咲かせるため！』

『……やれやれ、暑苦しいやつじゃ』情熱家の美丈夫の熱弁に、コルネリウスは重いため息をついた。

『それでお前さんは姫君にどう“喜び”を教えるんじゃ？ まさか勢いだけで出てきたわけではあるまいな』

『ははは、まさか！ 姫君、喜びとはすなわち、愛より生まれるものです。つまり、姫君が恋をすればよろしいのです！ この私に！！』

「……恋？」

石室の書庫に、ジルドレイの声が派手に反響した。両腕を広げ受け入れ体勢万全の自称・騎士を、クラリッサは何の興味も持たずに見つめた。コルネリウスががっくりと項垂れた。

『お主に聞いたわしが馬鹿じゃった……。恋じゃと？ 姫君にはまだそんなこと教える必要はない！ しかも相手がお前じゃと？ 断じてなら一—んっ！！ くだらんことを申すならさっさと書架に戻れ、この大馬鹿者がっ』

『おっと、怖いすなあ！ ふざけてなどいませんよ。だって、この塔から出られない姫君に他にふさわしい相手がありますか？ 老師も男だが、少々お年を召されているゆえ……』

『わ、わしはそんなことを言っておるのではないっ！ 教えるのならばもっと理論的に確実に姫君が理解出来るようにだな……』

『ノン、ノン』

輝く金色の髪を掻き上げ、ジルドレイはその指先を口元で左右に振った。

『姫君のダイヤの心を揺り動かすには、頭で考えるのではなく直接感じていただくのが一番だと私は思います。感情というものは体験から得るものですからね。本当はこんな塔に閉じこもらず、外に行くべきだ。——そうだ、その手があるではないか。書を捨て、世界へ出よ——！ おお、我ながらいい考えだ。どうですか、主よ。ご自分で“喜び”を探しに行かれては？ お望みならば私の風駆馬(ヒューマ)をお貸ししよう』

豪快に首を叩かれて、ジルドレイの背後にいる白馬が迷惑そうに首を振った。

「……世界に出る……」

さくらんぼのような唇の奥で、クラリッサはその言葉をぽつりと繰り返した。

『何をいっとる！』コルネリウスの怒声が飛ぶ。

『姫君はこの塔から出られぬのだ。誰かにさらわれでもせぬ限りそんなことは無理じゃ』

「……そうか、その手があったか」

青く澄んだ二つの宝石を大きく瞬き、クラリッサは猫足の椅子から立ち上がった。

「コルネリウス、ジルドレイ。私は旅に出るぞ」

突然の姫君の宣言に、古き書物の住人達は思わず顔を見合わせた。相変わらずクラリッサの顔には『人形姫』にふさわしく何の変化も見られなかった。だが不思議な力を秘めたサファイアの瞳だけは——何かを思い描いて星のようにきらめいていた。

「ヒルデガルド夫人を呼んでくれ。荷造りをしなければ」

その日の夜。

マシュマロのような淡い白銀の月が星たちと密談する真夜中。

塔の最上階にあるクラリッサの部屋の窓がそっと開かれ、奇妙な形をした黒い影が忍び込んできた。

「今日こそ……今日こそ絶対、絶対——」

何やらぼそぼそと呟きながら、影は音を立てないように窓を閉めた。背中にある黒いコウモリのような翼をたたみ、お尻からひょろりと伸びる先の尖った尻尾をしまう。そして振り返ると、片手を腰にもう片手の人差し指を暗闇の室内に突き出し、大きく息を吸った。

「今日こそずえったいに、この悪魔怪盗ゼルナーガ様がお前のダイヤの心臓を食って満腹になってやる！ 覚悟しやがれ、クラリッサ！ って……あれ？」

だが人差し指の先にある天蓋つきの寝台には——誰もいなかった。夜目のきくアーモンド型の目を瞬き、悪魔ゼルはぼかんとしていたが、

「そなたは、ばかか？」

すぐそばから聞こえた声に「ふぎゃっ！」と飛び上がり窓辺から転げ落ちた。

「私の心臓を盗む気なら、こっそり入ってくればいいだろう。わざわざ大声を出して獲物を起こしてどうする。また今夜も失敗だな、せっかく鍵もカーテンも開けておいたのに」

顔から見事に落ちたゼルに、クラリッサは燭台の灯りをかざした。ダイヤを狙ってゼルが部屋に忍び込んでくるのはもう五度目のこと。人間の大切な物を盗んで食らうことで空腹を満たすらしいが、この悪魔はどうにも間抜けで毎回失敗している。

「てててててめえっ！ なんでこんな夜中に起きてやがるんだっ！ 子供は寝てる時間だろうがっ！ ……んん？」

勢いよく起き上がってクラリッサを睨みつけ、次の瞬間ゼルは鼻頭にしわを寄せた。

「……おい、なんで服を着てるんだ？ それになんだよ、その大きな荷物」

コサージュつきのミニハットを斜めにかぶり、クラリッサはフリルのシャツにペティコートを重ねたバルーンスカートという、これからピクニックにでも行くような出で立ちだ。手にはハートの柄のステッキを持ち、足元には大きな白い革のトランクがある。

「そなたを待っていたのだ、泥棒悪魔ゼル」

「な、名前を呼ぶなっ！ 一回や二回オレ様に勝ったからってナマイキだっ。それに怪盗だっってんだろ！」

「五回だ。私は“取引”で勝ってそなたの名前を聞いたのだ。呼ぶ権利がある。それよりも、今夜もまた勝負をしないか、ゼル」

「……勝負？ それは——“取引”か？」

ゼルの尖った耳の先がぴくっと動いた。悪魔は“取引”が好きだ。それを利用して人間をだまし大切な物を奪ったり絶望させるのが大好物なのだ。

「そうだ。これから私がひとつ謎々を出す。その答えを言い当てたら、私の心臓(ダイヤ)をやろう」

ダイヤをエサにすれば絶対にゼルが食いつくことをクラリッサは知っていた。だから毎回その単純さを利用して自分に有利な取引を持ちかける。気付かぬゼルは結局大負けして「覚えてろ！」と捨てゼリフを吐いて去って行くのだが……今夜はある目的があった。

「だがもし間違ったら……私の下僕になるのだ」

「は、下僕だとお？ ケッ、くだらねえ」

つんと顎をそらし、ゼルが毒づく。月明かりが照らすその横顔は十五、六歳の少年のように見えるが、本人いわくクラリッサの倍は生きているのだという。

「でもいいぜ、やってやるよ。今日はぜってーオレ様が勝つしな！ 取引の破棄はなしだからな。負けたらお前の体を引き裂いてでもダイヤはもらうぞ！」

「いいだろう。ではいくぞ」

クラリッサのサファイアの瞳の中に、ほんのささやかな笑みが生まれた。この瞬間が——最近のクラリッサの“楽しみ”であった。それは十四年間狭い塔の中で孤独に暮らしてきた少女が覚えた初めての感情だった。

「どんなものにも必ずあるものとはなんだ？」

「はあ？ そんなん決まってる、『名前』だ。わはははっ、引っかけようたってムダだぞ」

「残念、違うな」

ステッキの先でクラリッサはバカ笑いをするゼルのおでこを突いた。

「いて——っ！！ てめえっ！ オレ様ご自慢のおデコが陥没したらどうすんだっ」

「くだらんことを言っていないで荷物を持て。出発するぞ、下僕」

「はっ？」

少し涙目になっているゼルにトランクとステッキを預け、クラリッサは窓辺によじ上って窓を開けた。そしてフリルの襟の中から銀色の細いホイッスルを出し思い切り吹いた。

すると星屑の輝く天から、いななき声とともに一頭の白馬が駆け降りてきた。手を伸ばして手綱を掴み、クラリッサはゼルを振り返る。

「何をしている、早く来い。私の魔力で風駆馬(ヒューマ)を操れるのは月が出ている間だけだ」

「……は！？ ちょっと待てよ、どういうことだよ。しゅ、出発してどこにっ！？」

律儀にトランクを抱えたままゼルが忙しく表情を取り替えている。

「探しに行くのだ、“喜び”を。この塔の中には答えがないようだからな。だが私は一人では馬に乗ったことがない。だからそなたが前に乗り手綱を握れ」

涼しい夜風が窓辺に吹き込んだ。月影の映るクラリッサの黒髪をさらい、夜空へと導く。

「私をさらうのだ、怪盗ゼル。私の知らない広い世界の中へ——」

風駆馬は二人を乗せてその名のごとく風のように夜空を駆け抜けた。

クラリッサの小さな世界を包んでいた広い森がぐんぐん遠ざかる。あっという間に石の塔は見えなくなった。

「おいっ、この馬どこへ向かってるんだ！？」

馬首にしがみつくのには必死でゼルは手綱を握るところではない様子だ。その後ろでクラリッ

サは、風の抵抗をものともせず涼しい顔でゼルの服の裾に掴まっていた。

「さあ、私にもわからない。導かれるままに、だ」

——そうしていくつもの山を越え、川や野原を越えて夜が明ける頃、風駆馬はゆっくりと山間に降りて行った。

夜明けと同時に風駆馬は大気に溶けるように消えていった。

そこは広葉樹の森に囲まれた小さな村の入口だった。

朝靄にかすむ森の空気は透き通っているが、少し肌寒い。はらはらと時折舞い落ちてくる葉は、ほんのりと赤や黄色に色づいている。

「ここは西にある森なのだな」

疲れ切って地面にへばりつくように倒れているゼルの横で、クラリッサは一糸乱れぬお姫様スタイルのまま頭上の木々を見上げていた。

以前読んだユヴェールの風土史を思い出す。

ユヴェール王国には東西南北四つの地方がある。四つの土地はそれぞれ四季の回り方が違う。現在、クラリッサの塔のある南は夏、お城のある東は春、北は冬で西は秋である。

「……ううう、酔った……って、やいクラリッサ！ てめえ突然何のつもりだっ！ あああ、こんなことが仲間知れたらまたバカにされる……ちくしょーどこだココはっ!？」

落ち葉をまき散らしゼルがわめきだす。それを温度のない眼差しで眺め、

「騒がしいやつだな。これは私の見聞を広める旅なのだ。この世には塔の中では知りえないことが多くある。だからつきあえ、下僕よ。さあ、村に入るぞ。荷物はまかせたからな」

クラリッサはステッキを手にトコトコと歩き出した。

村の入り口の門には“シュネー村”と書かれた木のプレートが下がっていた。赤レンガ造りの家が並ぶ小さな村だった。門の先の広場には同じ赤レンガの井戸があり、その向こうには大きな木が立っている。

『ほう、客人とは珍しいな』

門をくぐったと同時に聞こえた声にクラリッサは辺りを見た。まだ夜が明けたばかりのため外に人気はない。

『……もしやお嬢さんはわしの声が聞こえるのかな？ 驚いたのお』

弱々しい、しわがれた老人の声。正面から聞こえてくる。そのまま広場を横切り、クラリッサは巨木の前で編み上げブーツのつま先を止めた。

「……呼びかけたのはあなたか？」

古ぼけてはいるが、力強く枝を張る立派な大木だった。だが奇妙なことに、紅葉を始めた周囲の木々とは違い、この木だけはまだ緑の葉のままだった。

クラリッサのサファイアの瞳が光を反射したようにきらめく。すると皺だらけの幹に老人の顔が浮かび上がった。

『いかにも。わしの名はグスタフじゃ。村の者には長老と呼ばれておる』

「私はクラリッサだ。シトロンの森からきた。あなたはこの大樹の“古き知識”なのだな」

『クラリッサ？ 聞いたことがあるぞ。……そうか、お主がダイヤの心臓とサファイアの瞳を持つ「人形姫か」。風の噂に聞いておる』

幹の上の老人がしゃがれた声で笑った。クラリッサはコクリと頷いた。

「いかにも。私は“喜び”という気持ちを探しに来た。あなたは知っているか？」

『——なるほど。そのダイヤの心を潤すきらめきを探しているのじゃな。もちろん知っている。わしは何百年もここで多くの人間と過ごしてきたからのう——そうじゃ、一つわしの願いを聞いてはくれんか？ 聞いてくれたらその礼にお主の望むきらめきを与えよう』

「……願い？」

クラリッサが小さな顔を傾げた時、背後で「ぎゃ！」という叫び声と物音がした。

振り向けば、驚きのあまりトランクを取り落とし口をぱくぱくさせるゼルがいた。

「ああ、長老。私の下僕の悪魔ゼルだ。そなたにも長老殿が見えるのだな」

「あ、あったり前だろ！ オレ様は泣く子も黙る悪魔様なんだからなっ！ おいクラリッサ、その不気味な人面樹の頼みとやらをきくのか？ そいつ、全然うまくなさそーだぞ」

ぐるると不満をもらす腹を押さえゼルが舌打ちする。老木がおほんと咳払いをした。

『わしもだいぶ長いことここにおるが……お主のように話が出来る者と出会えることはめったにない。だからどうしても聞いてほしいのじゃ、この葉の色が変わってしまう前に』

緑の枝葉をどこか遠い目で眺め、グスタフは話し始めた。

『わしはこの村の人々の憩いの場として彼らとともに生きてきた。わしは彼らの笑顔を見るのが好きでのう……じゃが、村長の双子の娘ルージュとジョーヌのことが最近気掛かりなんじゃ。二人は幼い頃から病気がちで、村長夫妻は良い医者を探しておった。そんなある時村に一人のまじない師が立ち寄ってな。彼は二人には死相がでていて、村の大木が赤く色づけばルージュが、黄色に色づけばジョーヌが死ぬなどと宣告したのだ！』

「……その大木とはもしや、あなたのことか？」

クラリッサの指摘にグスタフは目を伏せ細いため息をついた。

『そうじゃ。皆動揺したがその男は自分なら病気を治せると言いおった。しかし大金がかかるとな……。村長夫妻は私財をなげうって二人を救おうとした。じゃがその金を持ってまじない師は消えてしまったのじゃ。あやつはペテン師だったのじゃ！ しかし、どういうわけかその頃から二人の具合は悪くなつてのう……二人は怯えて、次第にその怖れからどちらに色づくか、どちらが死ぬか言い争うようになった。誰もがうらやむほど仲のよい姉妹じゃったというのに、今では口もきかない。わしは毎年、村人が望むように葉の色を変えてきた。じゃが今年はどうしていいのかわからなくてのう』

「……それでまだ緑色のままなのだな」

くすんだ緑の樹冠をクラリッサは見上げる。自然の流れに必死で逆らい、今の状態を保ち続けているのだろう。そのせいか老木はだいぶ生気を失っているようだった

「その男は悪魔だな」その時、クラリッサの後ろでゼルが言った。

「そいつは人の不幸を好物にする悪魔だ。二人は獲物として目をつけられたんだよ。悪魔のコトバには人の心を惑わす力がある。それを真に受けて信じれば本当になっちまう」

「では、このままでは葉が色づいたら本当にどちらかが死んでしまうということか？」

「ま、そういうことだ」

「助けることは出来ぬのか？ お前も同じ悪魔だろう」

「その悪魔のコトバが覆されない限りはムリだな。ていうかなんでオレ様が助けなんてしなきゃ

なんねーんだ」

『そ、そんなことあってはならん！』長老が叫んだ。

『どうか二人を救ってくれ！ まじないなど信じるなど伝えてくれ。あの二人のことは幼い頃からよく知っておる。わしにとって孫のようなものじゃ。わしは以前のような絆を二人に取り戻し、元気になってほしいのじゃ。どうか頼む』

やがて陽が昇り人々の生活が始まった頃、老木の言葉を伝えるためクラリッサはルージュとジョーヌを訪ねることにした。

腹が減ったとうるさいので、持ってきた金貨を一枚渡しゼルは村のパン屋に置いてきた。まさかそれが店のパンを全部買占められるほどの価値をもっているとは知らず——クラリッサは一人で目的の場所へ向かった。

二人の家は村の一番奥にあった。マナー教師のヒルデガルドに教えられた通りに扉をノックすると、やつれて今にも倒れそうな中年の女性が顔を出した。

母親だと言うその女性に、クラリッサは二人の友達から話を聞いてよその街から見舞いに来たと言った。手土産におやつ用に持ってきたマカロンの箱も渡した。人の家を訪問する時には手ぶらではいけないと、ヒルデガルドが以前言っていたからだ。

母親は涙ぐんで弱々しく「ありがとう」と言った。そして初めにルージュの部屋に案内してくれた。

彼女はスグリの実のような赤い髪をした少女だった。クラリッサが中に入ると、窓際のベッドの上からルージュは勝気そうなこげ茶の瞳でこちらを見た。

「あなた、誰？ 見かけない顔ね」

病人とは思えないしっかりとした口調だった。でもまだ幼いその顔は青白い。

「私はクラリッサという。そなたをよく知る者から頼まれて会いに来た。『まじないは嘘だ。死んだりはしない』と伝えてくれと言われた。よし、言ったぞ」

言われた通りに出来たとクラリッサは満足した。そしてルージュが“喜ぶ”のを待った。だがそう簡単にはいかなかった。

「はあ？ 何言ってるの？」ルージュがギロリと睨んできた。

「かわいそうだからってあたしをからかいにきたの？ その手には乗らないわよ！」

「からかう？ それはなんだ？ どうしてそんな威嚇するような顔で見るのだ？」

「ご覧の通りあたしは病気なのよ！ あのまじない師に死の宣告をされてから……。こんな状態で嘘だと言われて信じるわけないでしょ！ 無神経なこと言わないで！」

ルージュの目に涙が浮き上がった。

「あの木が赤くなったらあたしは死ぬのよ！ 信じたくないけど、本当に具合が悪くなっちゃったんだもの……！ だから本当に違いないなのよ！」

窓の外に見える大木を指し、わっと泣き出す。その様子にクラリッサは少し驚きのようなものを感じていた。だが眉一つ動かない表情からその変化を読み取るのは難しい。

こういう時にどうすればいいのか、生まれてこの方ほとんど人と接点のなかったクラリッサにはわからなかった。だが目的は果たさねばと思った。

「私はそなたに“喜んで”もらいたいのだ。どうすればいい？」

「そんなの決まってるわ！」泣きはらした目でルージュが叫んだ。

「あの木が黄色になってジョーヌが死ねばいい！ あたしはまだ生きたいの！」

一方ジョーヌは麦穂のような金色の髪をした少女だった。

クラリッサが挨拶すると怯えたような空色の目でこちらを見、椅子をすすめてきた。

「どうして見ず知らずのあたしのお見舞いにきたの？」

消え入りそうな声はまさに病人のようだ。ルージュとそっくり同じ顔はやはり青白い。

クラリッサはルージュにしたのと同じ話を彼女にも伝えた。それを聞いてジョーヌは戸惑う様子を見せたが、すぐに顔色を暗くし首を振った。

「いいえ、本当よ。だって秋が近付くごとにどんどん調子が悪くなったんだもの。広場の木の葉が黄色になったら私は死ぬの……わかるのよ」

そう言ってシクシクと泣き始める。

クラリッサは少し困ったような気持ちだった。だが戸棚に飾られた人形のように微動だにせずただ座っていた。

「ではどうしたら救われる？ 私はそなたを助けねばならないのだ」

「助ける？ そんなの決まってるわ」

泣き濡らした目をきっと上げジョーヌが叫んだ。

「あの葉が赤くなればいいのよ。いじわるなルージュがいなくなればいいのよ！」

二人の家を出た後、クラリッサは広場の隅にあるベンチに座りお菓子を頬張っていた。

サファイアの瞳で空を見つめ無言でビスケットを口に運ぶ奇妙な少女を、村人たちは通りがかるたびに不思議そうに眺めていた。足元にあるトランクは少し開いていて、その隙間からたくさんのお菓子が入っているのが見える。

「おう、クラリッサ。なにシケた顔してんだ？」

そこへ上機嫌なゼルがやってきた。クラリッサがゆっくりと顔を向けると、目の前に大量のブリオッシュが飛び込んできた。

「……こんなに買ったのか？」

「おうよ。なんかオマケしてくれたぜ。ちょっと“うまい”って言ってやったら店のオバチャンご機嫌だよ。へへ、人間なんて単純なモンだぜ」

クラリッサの隣にどかりと座りゼルは膝の上にパンをおろした。

「……悪魔もパンを食べるのだな。人間の魂が好物ではないのか」

「他のヤツらは食わねえよ。人間の食いモンなんてたいした栄養がないからな。でもオレ様は嫌いじゃねえ。人間の作ったモンには“思い”があるからな。それを食うんだ。まあそんなカケラより本物の心の方がうまいけど、空腹しのぎには悪くねえ」

バカにしたように言いながらゼルはパンに食らいつく。……とてもうれしそうに。

「……ゼルは人の思いがわかるのだな」

半分だけかじったビスケットをクラリッサは見つめた。

「私は人間なのによくわからない。そなたは“喜び”とは何か知っているか？」

「喜びい？ そうだな、うまいモンを腹いっぱい食うことだな！」

「私は長老に言われた通りルージュとジョーヌにまじないは嘘だと伝えた。だが二人は信じなかった。二人とも自分が助かりたいと言い、ルージュは葉が黄色になることを、ジョーヌは赤くなることを望んでいると言った。それが喜びだと」

足元に散らばるビスケットの欠片を小鳥たちがつえばみにくる。食べかけのビスケットを砕き、クラリッサはそれも撒いてやった。

「自分のかわりに相手が死ぬばいってんだな。人間の考えそうなことだぜ」

ケケケッとゼルが笑った。黒髪をさらりと揺らし、クラリッサは空を仰いだ。

「なあ、ゼル。死ぬというのはいれしいことなのか？」

「はあ？ そんなわけねえだろ。人間にとって死ぬのはこの世で一番恐ろしいことさ。消えてなくなるんだからな。だから必死で命乞いをしたり、自分が助かるために人を犠牲にしようとする。まあ、自分が助かるんならうれしいんじゃないか？」

「……そうなのか」クラリッサはふむふむと納得する。

「ではやはり望みを叶えるのがよいのだな。だがどうすれば同時に赤と黄色に葉を染められるのだ？ そうしなければ二人とも助からない」

「はん、そんなのムりに決まってんだろ。葉はどちらかにしか染まらない。ていうかお前は“喜び”を知りたいんだろ？ ならどっちの色になるのか教えりゃいい。片方は助かるんだから喜ぶだろ

。そうすりゃきらめきは手に入る。簡単なことじゃねーか」

最後のブリオッシュにゼルがかぶりつく。その提案にクラリッサは一瞬動きを止めた。

「……なるほど。でも長老殿の願いとは少し違うのではないか」

「いいじゃねーか、そんな細かいことは。どうせ助かったって人間の命はいつか尽きるんだ。それが早まるだけだろ。悪魔に目を付けられたのが運のツキってことだ」

ふむ、とクラリッサは頷く。つまり自分の望みを叶えることを優先しろとゼルは言うのだ。確かにそれなら目的は果たせる。クラリッサには何の問題もない。

「やあ、君たちも旅の人かい？」

その時、村の入り口の方から大きな荷物を背負った若い男がやってきた。

「僕はさっき着いたところなんだ。ああ、よかった。間に合った」

そう言って荷物を地面に下し、男は広場の中心に立つグスタフを見上げた。クラリッサは首を傾げた。

「間に合うとはなんのことだ？」

「あれ、君たちも見に来たんじゃないのかい？ あの木が紅葉するのを。珍しい木で、毎年村人が願う通りに色が変わるんだって。去年は赤。今年は黄色が有力だって。他の街で噂を聞いてね、来てみたんだよ」

じっと耐えるように緑の葉を広げる老木をクラリッサは二つのサファイアに映した。

「黄色……そうか、黄色か」

それならば、とクラリッサはベンチから立ち上がった。

さっそくクラリッサは双子の家に向かい、再びルージュに会った。

「大木の葉は黄色になるそうだ。そなたは助かるぞ」

ゼルの提案通りそう告げると、ルージュは柔らかな樹皮のような茶色の瞳を見開いた。

「……それは本当なの？」

ベッドから飛び起き口を覆う。クラリッサは頷いて見せた。

「ああ、さっき聞いたのだ。去年は赤だったから今年は黄色だと」

ルージュは驚き呆然としていた。だがみるみるうちに青ざめ——震えだした。

「じゃあ……じゃあ……ジョーヌが死ぬの？」

そう呟いた途端、ルージュは火がついたように顔を覆って泣きだした。

それは意外な反応であった。

「どうして泣くのだ？　うれしいのではないのか？」

葉が黄色になればルージュは死ぬことはない。それは彼女が望んだことではなかったのか。クラリッサにはその涙の意味がわからなかった。

激しい泣き声を聞いて母親が駆けこんできた。追い出されるようにクラリッサは部屋の外に出た。その時向かいの部屋の扉が小さく開き、ジョーヌが顔をのぞかせた。

「どうしたの？　何かあったの？　——あら、またあなたなのね」

ルージュの部屋を気にするジョーヌにクラリッサは言った。

「よくわからないが、葉が黄色になると言ったら泣きだしてしまったのだ」

「黄色に？」

それを聞いたジョーヌはショックを受けてよろめいた。もちろんクラリッサに悪気などあるわけはなかった。ただありのままを話した、それだけだったのだ。

「——そう」

だがジョーヌは取り乱すことはなかった。どういうわけかすぐさま冷静さを取り戻してベッドに戻り、両手を胸に当てた。

「……よかった」

深い息とともに吐き出した声は——ひどく穏やかだった。そしてジョーヌは心から安堵したように微笑んだ。クラリッサは自分が言った言葉を思い返し、そして尋ねた。

「……どうして笑っているのだ？」

「どうして？　うれしいからよ」

「うれしい？　それは……“喜ぶ”ということか？」

そうよ、と言ってジョーヌは横になった。そして静かに目を閉じたのだった。

その晩、クラリッサは村に一軒だけある小さな宿屋に泊った。

ゼルは「人間の世話になんかなるか！」と言って飛んで行ってしまった。だからクラリッサは一人、狭く質素な部屋の窓辺に座っていた。

きらきらと星の輝く夜空は塔の最上階から眺めるよりも果てしなく遠く見えた。

初めて外の世界で過ごす夜。でもどういうわけかクラリッサは考えごとばかりしていた。

「なんだよ、暗いな」

そこへ屋根の上から逆さまにゼルがにゅっと顔をのぞかせた。だがクラリッサを見た途端「うわっ！」と声を上げて落ちてきた。

「ななななんだお前その顔っ！？ バケモンかっ」

「なんだ、レディーの顔を見るなり失礼なやつだな。化粧をしていたのだ。ヒルデガルド夫人におしゃれはレディーの必須だと教えられたからな」

部屋の中に落ちてきたゼルをクラリッサは——口紅がはみ出し、頬紅をこれでもかというくらい塗りたくった顔で見下ろした。窓辺には化粧道具が散らばっている。

「それにしても限度があるんじゃないか……？　なんだよインキな顔してんな。“喜び”がどんなものかわかったってのに、うれしくねーのか」

頭をさすりながらゼルが起き上がる。うむ、と頷きクラリッサは左胸をそっと押さえた。

ジョーヌが「うれしい」と言った時、クラリッサは“喜び”を学んだはずだった。だが左胸のダイヤは静まり返ったまま——何も教えてくれない。

「……そうなのだ。わかったはずなのに……空っぽなのだ。それに葉は黄色になると言ったのにルージュは喜ばなかった。ジョーヌはうれしいと言った。自分が死ぬのがうれしいと。それはなぜなのだ？」

クラリッサはずっと考えていた。ルージュが泣いた理由。ジョーネが微笑んだ理由。でも頭の中のどんな文献をひっくり返しても、ぴったりくる答えに行きあたらなかった。

「生きられるからだろ、ルージュが」

小さなベッドの上でくつろふ始めたゼルをクラリッサは振り返った。

「……？　じゃあなぜルージュは泣いたのだ？」

「それはジョーヌが死ぬからだろ。最初から二人は逆のことを言っていたんだ」

「どうしてそんなことを言ったのだ？」

「さあな。ショックで気が触れたんじゃないのか。人間はたまに簡単なことを複雑にするからな。スナオに考えりゃいいのによ」

「じゃあ……」クラリッサは一つの答えに行きついた。

「本当は自分ではなく相手に生きてほしかったのか？　私は間違ったのか？」

その時、暗闇の中を広場に向かって誰かが走って行くのが見えた。

「あれは……」

それが誰かクラリッサにはすぐにわかった。

夜風にざわざわと葉を揺らす大木の前でルージュは立ち止った。

はあはあと乱れた息もそのままに大木を見上げ、かすれた呟きをもらした。

「お願い……」

地面手をつき座り込む。細く頼りない肩が大きく震えた。

「お願い、黄色にならないで……！　なんでも、なんでもするから！」

悲痛な叫びが夜空に響いた。くしゃりと歪んだ顔を大粒の涙が濡らしていく。やがてその場にひれ伏すようにしてルージュは泣きだした。

「死んでほしいなんて嘘なの。ジョーヌを連れていかないで！ まだ一緒に生きたいの！」

やがて追いかけてきた母親と父親がルージュを抱えるようにして連れ帰った。

泣き叫ぶ声が遠ざかる。やがて冷たい夜風がすべての音を拭い去った。

「——フン、あれじゃ悪魔の思うツボだな。恐れも不安もぜーんぶ食われちまうぜ」

グスタフの枝の上で、幹にもたれながらゼルが呆れたように呟いた。

同じ枝に腰かけてクラリッサは一部始終を見守っていた。長い黒髪が風にさらわれて後ろになびく。サファイアの瞳には深い闇の色がくっきりと映りこんでいた。

「……やはり、私は間違ったのか？」

そうぽつりと言った時、グスタフの姿がぼんやりと浮かび上がった。

『……お前さんは真実を口にした。それは間違いではない。わしは確かに明日、黄色に染まる。もう……このままでいるのは限界なのじゃ。そしてジョーヌは……』

枝という枝を震わせグスタフが嘆く。夜の闇の中で葉ずれの音が呻き声のように響いた。

「私はありのままを伝えた。それが正しいことだと思ったからだ。でも……なんだか間違った気分なのだ」

クラリッサはそっと左胸を押さえた。

塔の中にいた時はこんな疑問を持つことはなかった。あの小さな世界は変化に疎く、平和だった。ほんの小さな一言で何かが壊れたり失われたりするということなど、クラリッサは知らなかった。

「ゼル、本当に二人は救えないか？」

隣でのんきにあくびをする悪魔をクラリッサは見上げた。

「ああ、ムリだな。いいじゃねーかよ、クラリッサ。お前は目的を果たしたんだ。さっさと森に帰ってオレ様を解放しろ！ ていうか言っただろ、人間なんてもんは」

「……いつかは命が尽きる。そう、すべてのものには寿命や……限りがある」

それはあの謎々の答え。疑問など浮かぶはずのない、当たり前の実事。

「でもそれでも……『生きたい』と願うのだな」

今左胸の中にあるもの。それはクラリッサが欲しがっているものとは違う気がした。フンとゼルが鼻を鳴らす。

「……一つだけ方法があるとすれば、悪魔のコトバを裏切ることだ。自分の言ったコトバが真実にならないと、悪魔は奪えない。ありえねえけど、葉が二色に染まるとかな」

「……色……？」

ふっくらとした小さな唇をクラリッサは指先で拭った。部屋を出る前にゼルに顔をごしごと拭かれたのでもう口紅は落ちていたが、はっと顔を上げた。

「ゼル、宿屋の私の部屋から持ってきてほしいものがある」

やがて夜が明け、朝がやってきた。

夜のカーテンがはがれ、薔薇色のベールが空に広がっていく。

朝陽が小さな村を照らす頃、広場の中心に建つ大木の葉は見事な黄金色になっていた。

それを部屋の窓から見た赤毛の少女は、いてもたってもいられず家を飛び出した。裸足のまままだ誰もいな広場の老木のもとへ走り、そして見上げて呆然とする。

「ああ……」

少女の顔がくしゃりと歪む。大きな涙が茶色い瞳から溢れた。

だが嗚咽をもらしそうになった時、少女は奇妙なことに気がついた。そしてそれが確かに存在することがわかると——泣き顔を大輪の花のような鮮やかな笑顔に変えた。

「ジョーヌ、ジョーヌ！」

ルージュは急いで家に戻ると、ベッドでぐったりと横たわる自分の片割れを揺すり起こした。ベッドに乗り上げ、窓を開ける。そして彼女を支えて起こし、外を指さした。

「見て、あれを！ 木が二色に紅葉したの！」

ぼんやりとかすむ空色の目をこすり、言われるままジョーヌは広場の方を見た。

そこには幼い頃から彼女たちが大好きな大木が、眩しい黄色に着替えた姿があった。だがその中にたった三枚だけ、赤く色づいた葉があるのだ。

二人は顔を見合わせ、手を取り合った。そして歓声を上げ、互いの体を抱きしめた。欠けていた自分の一部が戻ってきたような、満ち足りた気持ちで——

「——フン、考えたな」

それを大木の木陰から見ていたゼルは、幹に寄りかかったまま赤い葉を見上げた。

そのすぐ横で、根にもたれて眠っていたクラリッサがむくっと起き上がった。青い大きな目をこすり、ぱちぱちと開閉を繰り返す。その手には、ふたのない口紅を握っている。

「……あれしか出来なかったのだな」

裏も表もきれいに赤く塗られた三枚の葉を見上げ、クラリッサはほんのすこっしだけ不満そうな呟きをもらした。

昨夜クラリッサが思いついたのは口紅で葉を赤く塗るという方法だった。

予定では半分は染色するつもりだった。でもどうやらその途中で眠ってしまったらしい。

「まったく急に動きが止まったと思ったら落ちてきやがるし。死んだかと思ったぜ」

口紅を取りに行かされた後、ゼルは腹が減ったのでパンでも盗みにいこうと考えていた。でもグラグラ揺れながら懸命に作業をするクラリッサを放っておかず、結局ずっと下でぶつぶつ文句を言いながら見守っていたのだ。

「……二人は気付いたのだな」

家の外に出てルージュとジョーヌが両手を繋いでしゃいんでいる。今までに見たことのない笑顔で。その後ろで母親と村長である父親がうれしそうに二人を見つめている。

「元気になるといいな」

本物の奇跡ではない。でも二人には十分だったようだ。

楽しげな笑い声が高く澄んだ青空に響く。クラリッサの左胸を小さな風がかすめた。

その時広場を、昨日会った旅の若い男が横切って行くのが見えた。

紅葉を見に来たと言っていたのに逃げるように足早に村の入り口へ向かって行く。背中には大きな荷物、そして——お尻から長く黒い尻尾がひょろりと伸びていた。

「……あれが悪魔だったのか」

「ああ、魂を食らいに来たんだろ。あれを本物だと思って諦めたみたいだな」

ゼルが頭上を指さした。不自然なほど真っ赤な三枚の葉。自分がしたことながらクラリッサは首を傾げた。

「……やはり単純なのだな、悪魔というものは」

「うるせいっ！ スナオと言え！ 潔く生きてんだオレ様たちはっ」

『あああ、よかったのう』

逃げ去る男の後ろ姿を見送っていると、グスタフの声がした。

老人の姿は昨日までとは違い、髪や髭、ローブまでもが葉と同じ金色に輝いていた。その声も生気に満ちあふれ力強い響きをもっている。

『お前さんのおかげで、二人は互いを思いやる気持ちを思い出したようじゃ。ありがとう、お嬢さん。心から礼を言うよ。さあ、約束していたものを渡そう』

ローブの袖から差し出したしわだらけの指先を、グスタフはひゅっと振った。

小さな星のような金色のきらめきが、クラリッサの前に降りてきた。やがてそれは彼女の左胸に吸い込まれるようにして消えて行った。

『ありがとう……』

もう一度言ってグスタフの姿は消えた。

体の奥が、じんわりと温かくなっていくのをクラリッサは感じた。やがて湧き上がる、不思議な衝動。それはビックリ箱を開けた時のようにたちまち全身にあふれていった。

「体に羽が生えたみたいだ」

今すぐここから飛び立っていけそうな、すがすがしい気分。どんなことも、どんなものにでもなれそうな気がする。思わず両手を上げ、クラリッサはぴょんと飛び跳ねた。

「……お父様も同じなのだろうか」その時ふと、遠く離れた父のことを思い出した。

「お父様もこんな風に私の誕生日を喜んでいるのだろうか。でも……なぜなのだろう」

「は？ 親が子供の誕生日を祝うのなんて当たり前だろ。オレの死んだかーちゃんだっていつもでっかいケーキを焼いてくれたぞ」

手を取り合ってくるくと回っているルージュとジョーヌを見つめながら、クラリッサは小さく首を横に振った。

「でも私の誕生日は、お母様が亡くなった日なのだ。私がここにいるのはお母様がなくなったからなのだ。ルージュはジョーヌがいなくなると知って泣いていた。死が恐ろしいものなら、お父様もルージュと同じであったのではないか？ もっと一緒にいたいと願ったのではないか？ でも私の誕生日をうれしいという。それは間違ったことでは？」

「……はあ？ お前なに言ってんだ？」

「時々、よくわからないが考えるのだ。私はどうして存在しているのかと」

なぜ甦ったのかと。それはコルネリウスにも投げかけたことのないひそかな疑問だった。

「そんなん、『理由』があるからにきまってんだろ」ゼルが呆れた声を上げた。

「この世のどんなもんにも存在する理由ってのがあんだ。それがなきゃすぐに消えちまう。誰かが望んで必要だと思うからあんだよ。とーちゃんとかーちゃんが望んだからお前は生きてる。だから誕生日を喜ぶ。それに、お前のかーちゃんはそこにいるんだろうが。だったら悲しがることなんかねーじゃんか」

長い爪のついた指先が指したのは、クラリッサの左胸だった。

その奥にはきらきらと輝くダイヤがある。お妃様がクラリッサのために自分の命を吹き込んだ世界にたった一つのダイヤが。

「そうか……私はいつも一緒にいたのだな」

いなくなったのではなく、すぐそばに。クラリッサを包み込む未知の衝動がさらに大きくなっていく。そんなクラリッサを見下ろしてゼルは口をへの字に曲げた。

「ていうかお前本当に感情がねえのか？ それってただ、鈍いだけなんじゃねーの？」

その時、盛大にゼルの腹の虫が鳴った。二人の間にしばらく沈黙が流れた。

「……空腹なのか」

「う……」ゼルの顔が紅葉のように真っ赤になる。

「うるせー！ 当たり前だろっ！ ずっとてめえの心臓を食い損ねてるんだっ！ 昨夜は結局てめえのお守だしよっ！ だーっ、いらつく！！」

「そなたはいつもわめいているな。——そうか、短気なのは栄養が足りないからなのだな。よし、パンを買おう。私も朝食をとりたい。行くぞ、下僕」

「げ、下僕って言うな！ オレは認めてねえ！」

「何を言う。簡単な謎々も解けなかつたくせに。さあ、行くぞ」

「うるせえ！ 今度こそ答えてやる！ っておい、待ちやがれクラリッサ！ ブリオッシュは全部オレ様のだからなっっ」

「はは、やっぱりお前といると“楽しい”な」

必死になって追いかけてくるゼルをクラリッサは振り返った。

——それに、悪くない。

どんなものにも存在する理由がある——あの謎々の本当の答えは、その方がふさわしいのかもしれないとクラリッサは思った。

冬の気配を含んだ風が、大木の金色の葉の間を吹き抜けた。

赤い葉が一枚、枝を離れひらりと舞い落ちた。

世話焼き魔一メイド

番棚葵

## あらすじ・登場人物

---

### ○あらすじ

入学前の記憶がない鎌井裕太の家に、転入生の海野紗理奈が押しかけて世話を焼くようになる。彼女の正体は人魚姫にして魔界の王子の世話役サリナで、裕太こそが魔界の王子・ユタだったのだ。そのことを断片的に思い出した裕太は、自分を狙う「竜人族」をユタの力で撃破。改めて記憶を取り戻すことを決意した。

### ○登場人物

#### 鎌井裕太（ユタ）

入学前の記憶がない少年。その正体は魔界の王子・ユタ……らしい。

#### 海野紗理奈（サリナ）

魔界から来た人魚姫。幼い頃からユタを慕っていて、何かと過剰に世話を焼く。

## 2話 季節外れのクリムゾン

僕の目の前には、赤く葉を色づかせた木々が茂っていて。  
隣では一人の少女がうっとり、その景色を見つめていた。

「綺麗ですね」

「ああ、うん」

とりあえず、同意しておく。実はそんなに興味はないのだけれど。  
と、彼女がこちらを見て、悪戯っぽく笑った。

「でも気をつけてください、ユタ様」

「何を？」

「あれは……」

彼女は人差し指を立てて、得意そうに説明をした。

○

「明日が楽しみですなー」

そんなのんきな声が、僕の住まう小さな一軒家に流れた。  
声の主は、鼻歌を歌いながら大きなリュックサックに、何やら色々と詰めていた。

メイド服を着た、僕と同じ歳頃の娘さん。というか、ぶっちゃけ僕の同級生だ。

彼女の名前は海野紗理奈という。表向きは。真の名前は別にあって、僕は少し気の毒そうにその名を呼んだ。

「サリナ、あの。ちょっと聞いて欲しいんだけど」

「私、この世界の遠足って楽しみだったんですよ。しかも、山登りだそうじゃないですか。明日は早起きして、美味しいお弁当作りますからね、ユタ様」

にっこり笑って振り返り、彼女は僕の名前を呼んだ。この世界では通用しない、もう一つの名前を。

僕は、ユタこと鎌井裕太はこっそりため息を吐くと、もう一度声をかけた。

「だから、サリナ。聞いてってば」

「え？」

「明日は確かに山を歩くけど……そこまで重装備を整えなくてもいいから。というか、目立つからやめて」

僕が指さした方向、そこには彼女があらん限りの装備——虫除けスプレー、常備薬はもちろん、非常食、ステッキ、ピッケル、ザイル、果てはテントまで——を詰め込んでいる、ばんぱんのリュックサックがあった。

サリナが僕の指と、リュックサックを二度三度と見比べ、不思議そうに首を傾げる。

「え、でも山登りなんでしょう？」

「別に頂上目指して上るわけじゃないんだ。ちょっとしたハイキング程度なんだよ」

「魔界ではハイキングにもこれくらいは必要ですよ？」

どんなところなんだ、魔界って。

「とにかく、そんな重装備は必要ありません。大体、持って行くのがしんどいでしょ」

「大丈夫です、ユタ様力持ちですから！」

「……僕が持って行くの前提なのか」

サリナの方が世話役なのに。まあ、こんな重いものを持たせるつもりはないんだけど。

「いいから、サリナ。普通のハイキング用の装備にしてくれないかな……『この世界』の基準で」

「はい」

僕の声に、サリナは若干不服そうに返事をしたが、すぐに明るい笑顔をこちらに向けた。

「あ、でも」

「うん？」

「お弁当は本当に腕によりをかけますから、期待しててくださいね、ユタ様」

「う、うん」

その屈託のない笑みに、僕は顔を赤くして目をそらした。

記憶喪失であった僕が、実は家出中の魔界の王子「ユタ」であった、というショッキングな記憶を「断片的に」取り戻してから、一週間が経とうとしていた。

とりあえず最初は、僕も魔界に一度戻ろうと思っていた。僕が家出したせいで、迷惑をかけた人(?)達が少なからずいると思ったからである。

その決意にブレーキがかかったのは、僕の奥底に眠る意識が囁いたからであった。

すなわち、「魔界の王たる自分の父親に、今の状態がバレたら殺される」、と。

(確か、僕の親父はものすごく厳格というか、理不尽なまでに怒りやすい性格だった)

そんな父親に、自分は記憶を失っており、しかも完全に取り戻していないと知れたら、あまりの不甲斐なさに腹を立てられ、本気で殺される——気がする。

これも断片的な記憶がもたらした情報なので、断言はできなかったのだが、確証はすぐにとれた。サリナに相談したら、すぐにうなずいたのである。

「何しろ旦那様は、ユタ様が家出してから二年間も機嫌を損ねたままでしたからねえ。やっとそれが戻ったというのに、ユタ様がそんな事態に陥っていると知ったら、まあ命までは取りませんが、腕の二本か三本は覚悟するべきでしょうか」

腕は二本しかないって。それとも、治ったところにまた壊されるのだろうか。

どのみち、そんなことを聞かされて、素直に魔界に帰られるはずがない。そういうわけで僕は、記憶を完全に取り戻すまでこの世界——人間の住む世界にとどまることにした。

無論、幼い頃から僕の世話役である人魚姫のサリナも、一緒である。相変わらず同じ屋根の下に何の疑問も抱かず住まい、僕の世話を甲斐甲斐しく焼いてくれている。

そんな僕らが、明日は学校の課外授業、つまり遠足に行くことになるのだが——この時、僕は

気づくべきだったかもしれない。

自分の立場が、思ったよりも特殊であるということに。

遠足当日。

「うわ、すげえっ！」

クラスメートの男子が、そんな声を上げるのが聞こえた。僕も同じ気持ちで前方を見つめていた。

隣のサリナが、目を輝かせて僕の肩を叩く。

「綺麗！ 綺麗ですね、ユタ様！」

「うん。綺麗は綺麗だけどね」

僕は複雑な気持ちでつぶやいた。感動よりも、当惑の気持ちが多い。たぶん、さっきの男子生徒も、いや、ここにいる全員がほぼ同じ感想を抱いていると確信している。例外はサリナくらいだ。

僕達は今、登山口にある広場にいる。砂地は向きだしのままで、近くに寂しげに自動販売機が置かれた程度の、人工の広場だ。

生徒は僕とサリナも含めて、全員ジャージ姿だった。当然だが、制服で山歩きは無理があるからだ。そしてそんな僕らの目の前には、今、目的地である山がそびえている。電車とバスを乗り継ぎ、一時間ほどかけて来た結果だが、その山を見つめて僕達は感嘆の声を上げたのだ。

とは言っても、この山そのものには問題はない。問題は、山道へと続くこの広場の周辺、そして山に所々生えている樹木にある。それらはなんと赤く染まっている、つまり紅葉しているのだ。まだ初夏にもなっていないのに。

もっとも、僕も周りの生徒達も、実はこの紅葉については事前に知っていた。最近のニュースや新聞で取り上げられていたからだ。専門家でもその原因はわからないらしいが、今のところ周囲に実害はないらしい。

とまれ、実際に目の前にするとやはりその異様な光景には驚くもので、僕達はしきりに首を傾げながら、山を見上げていた。

のんきにしているのは、この世界の四季にうといサリナくらいなものである。彼女は楽しそうな顔をしながら僕の耳元に、こう囁いてみせた。

「魔界の山にも、こんなに赤々しい光景がありましたよ。向こうの世界にも、紅葉の概念はありますから」

「へえ、そうなんだ」

そうつぶやくと、彼女はまじまじと僕の顔を見つめてきた。距離が息がかかりそうなくらい近いので、少し気恥ずかしくなる。

「な、なに？」

「.....まだ思い出せませんか？」

「え？」

「その、魔界のこと」

「あ、ごめん.....残念ながら」

「そうですか。何か思い出すきっかけになればいいと思ったんですけど」

そう言って、彼女は苦笑する。

(ああ、またか)

正直、僕はそんな感想を抱いた。

最近のサリナは時間を見つけては、僕に魔界についてあれこれと語ってくれる。僕の記憶を少しでも取り戻したい一心らしい。

しかし、炎に包まれた野原があったりと、怪鳥が飛び回る岩山があったりと、毒や障気で覆われた沼があったりと、楽しそうに語られるたびに、僕の魔界に帰る気力はどんどん減っていくのだけど。

でも、その時のサリナは必死で、かつ楽しそうで。僕が反応をあまり示さないと、少し沈んだ顔をしてから、今みたいに苦笑を浮かべるのであった。

「大丈夫です。徐々に思い出せばいいですから」

いつも言っている言葉を、サリナはこの広場でも言った。そして僕から素早く身体を離すと、生徒達の集団へと向かっていく。クラスごとに整列をしなければならないからだ。

僕がぼんやりとその後ろ姿を見送っていると、彼女をクラスメートの女子が迎え、楽しそうに話しているのが見えた。

「紗理奈、遅いよ。ちゃんと並ばないと」

「なに、また鎌井と話してたの？ 本当、骨抜きよねえ。あんなぼけっとした、何の取り柄もなさそうな奴の何がいいのよ？」

何だと。

「あはは、すみません。今度から遅れないようにします」

サリナは笑顔を浮かべて、その言葉を流しつつ、すでにできあがっている女子の列に加わった。最初は僕を捜しに来るために、今は僕の世話を焼くために、便宜上このクラスに所属したサリナだが、すっかり皆とはうち解け合っているらしい。とても楽しそうだ。

だけど。ふと僕はその笑顔の裏側にあるものを考えていた。僕以上に、彼女はこの世界になじめていない。僕は魔界の住人としての記憶を失い、人間としての自覚がまだ残っているけど、サリナは自分のことを純粹に異邦人と感じているはずだ。

そして、僕の記憶を取り戻そうと、何かと話しかけてきている。これって僕のためということもあるだろうけど、それ以上に自分のためでもあるんじゃないだろうか。

「サリナ、本当は魔界に帰りたいんじゃないかな」

だとすれば、帰れない原因は僕にあるのだから、これは本当に不甲斐ないと自分でも認めざるを得ない。

彼女のためにも、一刻も早く記憶を取り戻さないと。僕は改めて決意を固めると、自分も徐々にできあがっている男子の列に並ぶため、歩き出した。

○

「ユタ様、汗が出ていますよ。はい、拭けました」

「ユタ様、ほら。このお茶美味しいですよ。水分はしっかり補給しないと」

「ユタ様、この辺足下ぬかるんです。気をつけてくださいね。危なくないように、手を握りますから」

「ユタ様、あれ見てください！ あそこに小鳥がいますよ！ 可愛い！」

「……いや、あの、サリナ。周りからの視線が痛いんだけど」

山道にて。僕は隣でべったりと世話を焼いてくる（最後のは世話でも何でも無いけど）サリナに、半ばうんざりつつぶやいた——残りの半分は、照れと嬉しさと周囲に対する得意げな気持ちがミックスされてできているが。

何しろ、サリナはクラスでも一番といってもいいほどの美少女だ。それが僕に何かとつきまとっているのを、他のクラスメイトが面白いと感じるはずがない。特に男子は、殺してやろうかという目つきで僕を見ってくるのだった。

「鎌井、いつか闇討ちしてやる」

「コンクリ詰めにして、海に沈めてやろうか」

「一度、屋上から全裸にしてバンジージャンプをさせる必要があるな」

こんな、物騒なことを言い出す始末だ。聞いていて心臓が悪い。

問題はサリナがそういう人間関係の機微に疎く、自分は純粋に僕の世話を焼いていると本人が思っていることだ。いや、実際にそのつもりなんだろうけど、客観的に見られたら誤解を受けるほど過保護だということを、少し自覚していただきたい。

「それにしても」

ふと、僕は目を瞬かせた。サリナが指さした方、小鳥の止まっている枝を見つめて。

正確には、その枝に張り付いている赤い葉を見て、だ。いくつか力尽きたように、はらはらと落ちている。季節を考えると、やっぱり異常としか思えなかった。

「どうして、こんなことになってるんだろう」

「うーん、私は綺麗だと思うんですけどね」

「季節が春じゃなかったら、僕だってそう思うよ。でも」

周囲の生徒達、それに教師を見回す。純粋に山歩きを楽しんでいる者も、黙々と歩き続けている者も、先ほど僕とサリナの間をやかんだ者も。全員がどこか、居心地が悪そうにしていた

○  
春は秋と気候はさほど変わらない。だから夏に雪が降っている、というほど違和感もないのだが、しかしこの光景には季節感を狂わされるというか、今日が何月だったのかわからなくなってしまう。葉が緑の木も多く残っているので、なおさらだ。

それでも山登りを決行してしまうのは、温暖化に代表される近年の異常気象に、誰もが自然に対する感覚を麻痺させられてしまったからだと思うけど。

「何か、遠足の風情がないよなあ。自然を味わう楽しみに欠けるといふか」

「そうですか？ 私はユタ様と一緒にならどこでも楽しいですが」

「……ありがとう」

純真な笑みを浮かべるサリナに、僕の声がか細くなったのは、決して呆れたからではなかった。ああ、春なのに顔が熱い。

二時間も歩くと、折り返し地点に着いた。スタート地点とはまた違った広場である。

そこかしこに木製のベンチが置いてあり、ツタの絡まった東屋、さびて朽ち果てる寸前のくずかごなども用意されている。いわば休憩所だ。スケジュールでは、ここで昼食を食べることになっている。

昼食は、各々が用意した弁当だ。僕の方はもちろん、サリナが作ってくれた。重箱に入れて持ってきている——背負ったのは僕だけだ。

ともあれ、レジャーシートを広げ、その上で風呂敷包みを解くと、サリナは箱を並べておきながら蓋を取って、笑顔と共に差し出した。

「さあ、召し上がれ」

「うわあ」

食べ物を前に、本気で感動の息を漏らしたのは初めてじゃなからうか。まあ、記憶を失っている間にそういう場面に遭遇したこともあるかもしれないが。

サリナが腕によりをかけると言っただけあって、弁当は豪勢なものだった。いや、料理だけでいえば握り飯やら卵焼きやら野菜の煮付けやら——サリナは和食派らしい——ありふれたものではあるが、それら一つ一つが丹念に作り上げられているのがわかる。

何よりも、サリナの満足そうな笑顔が、この弁当の出来を物語っていた。笑顔も弁当もまぶしすぎて直視が難しい。

と、周りの生徒もその弁当のオーラに引きつけられたか、わらわらと近づいてきた。

「お、なんだなんだ。美味そうじゃないか」

「俺にも、俺にもこれわけてくれ！」

「私も欲しい。このおかずわかるから！」

箸と弁当箱の蓋などを手に、にじり寄ってくる。くそ、これは僕の弁当だぞ。

しかしサリナは笑顔と共に、「どうぞ」と弁当の中身を少しずつ振る舞っている。代わりに重箱の蓋に、違うおかずが山と盛られていく光景は盛観ではあった。

僕はため息を吐くと、とりあえずサリナの弁当に手をつけ始めた。自主的に箸を動かさないと、皆の前でサリナに「あーん」と食べさせられる羞恥プレイが待っている。

料理の味？ 言うまでもないだろう。

ともあれ、あっという間に賑やかな食事は終わり、しばらくの間休憩時間となる。休憩とは言っても、三十分程度の短いものだ。周囲の生徒達が、適当におしゃべりして時間を過ごしている間、僕も東屋の下でベンチに腰掛け、サリナと二人で話していた。

「サリナ、大人気だったね」

「え？」

「弁当、皆から好評だったじゃないか」

「そんな……そうでした？ ユタ様も、お弁当美味しかったですか？」

おずおずと、隣からサリナが上目遣いでこちらを見てくる。僕が「うん」とうなずくと、ぱあっ、と顔を輝かせた。

破壊的に可愛い。これが世話役だと言うのだから、記憶喪失以前の僕、万歳だ。

ただ……僕には最近、思い悩んでいることがあった。それはユタと自分についての悩みであり、記憶が少し戻ってから、ずっと考えていることでもあった。

「あのさ、サリナ」

ふと、気づけば僕はその悩みを口に出していた。

「何でしょう」

「僕って、本当にユタなのかな」

「えっ……？」

親しみのある笑顔を一転、困惑した表情のサリナに、なおも語りかける。

「時々思うんだ。ユタは僕という存在を作り出して、それで記憶喪失になった。じゃあ、今の僕はユタそのものとは違うのかな、って」

「それは……」

「前に竜人族と戦った時、少しだけユタとしての人格が蘇ったけど、あれは僕の性格とは違った。僕のように大人しくなく、もっと荒々しい気性を持っていた……だったら、今の僕はユタじゃなくて、記憶を取り戻した時に僕という人格もなくなるのかなって」

僕のつぶやきに、サリナは押し黙って何も答えない。それはそうだろう、こんな質問されたら誰だって困る。でも、僕はサリナのためにも、この問題は解決しておきたいと思ったのだ。

サリナはユタである僕を慕ってくれているが、僕にはその記憶があやふやにしかない。仮にも魔界の王子とかいう大層なものなら、その力で記憶なんか完全に取り戻していてもおかしくないのに。つまり、今の僕にはユタとしての風格がないことになる。

ユタとしての記憶を取り戻す方法、それは僕という人格を完全に消去することにあるんじゃないだろうか。そしてそれが、僕にとっても、サリナにとっても一番いいことじゃないだろうか。

だから、僕はサリナに尋ねた。

「ユタって、僕みたいな性格だったの？」

「それは、違いますけど」

「そうか……じゃあ、僕はやっぱりユタじゃないんだな」

僕はつぶやいて、空を見上げた。少し曇っているが、日の光は柔らかく注いできている。

隣のサリナは俯いていた。すっかり先ほどまでの明るい空気は吹き飛んでいる。ちょっと、余計なことを言い過ぎたかな。

「大丈夫だよ、サリナ。絶対にユタの人格は取り戻してみせるから」

「え？ あ、はい……」

「それに、最近ちょっとずつは過去のことを思い出しているんだ。サリナとの思い出も、少し思い出した」

「本当ですか！ それはどんな？」

期待の眼差しを向けてくる彼女に、僕は笑顔を向けると、

「うん。ほら、まだ小さい頃に、荒野で巨犬に追いかけて回されたことがあったよね。その後、泣きべそをかいて、ついでに恐怖からおもしろくはっ？」

「そ、そんなことは思い出さなくていいんです！ ユタ様のバカあああっ！」

顔を真っ赤にした彼女のパンチが頬に当たり、僕はベンチから崩れ落ちた。

昼食も終わり、僕達は下山のコースをたどっていた。

食後ということもあって、疲れが出てきたのか、皆一様にだらけきった表情をしている。もちろん僕も気だるさは感じていたが、腐っても魔界の王子のせいだからか、体調が優れないということはなかった。

それよりも、心的に気にかかることがあり、そっちの方が重要だと思われる。

ふと。僕の肩を比較的元気なクラスメートが叩いた。振り返ると、にやにやした表情を浮かべて僕を見ている。

「よう、鎌井」

「なに？」

「休憩時間、海野さんと何かへまやかしたか？ 行きとはえらく違う待遇じゃないか」

「ほっといてよ」

僕はふてくされると、ちらり、と数メートル前方を歩くサリナの姿を見た。クラスメートの女子と一緒に、何やら談笑している。

そう、彼女はあれから僕にべったりと世話を焼くことがなくなった。さりげなく近づいても、すぐに距離を取ってしまう。

その時、ちらりと僕の方を向いた彼女の顔は、どこか申し訳なさそうだった。やっぱり、僕が余計なことを言ったから、気持ちの整理が必要になったのだろうか。そのために、僕が側にいると気が散るとか。

.....もしくは、小さい頃の失態を持ち出したのを、恨んでるんじゃないだろうな。ああ、あんなこと話すんじゃなかったかも。

さっきはべたべたされて閉口していたのに、いざ離れられると寂しいものだ。我ながら勝手な性分だと思いつつ、僕は極力サリナの方を見ないようにして歩いた。彼女の気を散らしたくないからである。

代わりに、行きしなにも気にかけていた、不自然な紅葉を持つ木々をじっと観察していた。その手の専門家ではないから、この異変の原因はわからないけど、それでも気になるものは気になる。

それと——この紅葉を見ていると、なぜかサリナの顔が脳裏にちらつくのだ。

「うーん、どうしてサリナと紅葉が.....」

つぶやき、山道を歩くクラスの列からはみ出して、林の方へと歩み寄ってみた。植物特有の濃

い臭いが鼻をついてくる。

その時である。

「ユタ……」

「え？」

誰かが僕を呼ぶ声がした。

「鎌井」ではない。「裕太」でもない。はっきりと「ユタ」と言っていた。

一体誰が？

「来い、ユタよ……魔界の王子よ。お前に話がある……」

「あ、ああ？」

声は、僕の斜め前方、木々の奥へと延びている小道から流れていた。

僕はふらふらとそこに足を踏み入れ、そして進んでいった。不思議と声に導かれることに、何の疑問も抱くことはなかった。

落ち葉の降り積もっている小道を、歩いていく。

もしも僕がこの時、もう少ししっかりとしていれば、背後からこんな話し声が流れてくることに気づいていただろう。

クラスメート達の、会話である。

「うん？」

「どうしたんだ？」

「いや、今そこで木が動いたような」

「何言ってるんだよ、お前。そんなわけないだろ」

「ああ、それもそうだな」

しかしその声は僕の耳に届くことはなく、僕はさらに林の奥へと歩いていった。

背後で木々がうごめき、道が閉じることに気づかずに。

○

僕は林の中をなおも歩いていた。紅葉の重なりが陰を作り、どんどんと周囲が暗くなっていく。

頭の片隅では、自分はまずいことをしているのではないかという自覚はあった。が、僕を誘う声が、冷静な判断を下させてくれない。

「そうだ、こっちだ。こっちに來い……」

「一体、どこまで……」

「もう少しだ……そら着いたぞ」

唐突に視界が開け。僕は気がつけば木の生い茂っていない、ちょっとした広場に立っていた。ここだけ日が差し込んでいる。

「えっと、ここは」

僕がつぶやいた瞬間、目の前に生えている木が揺らぎ始めた。

いや、正確には動き始めた。まるで意志を持った動物のように。枝を振り、根を交互に動かすようにして、それはこちらへとやってきた。

「ようこそ、ユタ王子よ。ここが終着地点だ」

恭しい声が聞こえてきたので、僕は息を飲み込む。もっとも、先ほどの声と同じく脳内に響いているのだが、どう考えてもその声は目の前の木が発しているとはしか思えないのだ。

「な、何だ、お前はっ！」

「我は『怪樹』。魔界の住人、と言えは納得してもらえるかな」

「何っ？」

魔界の住人だってっ？ こっちの世界に来ているのは、僕とサリナやこの間倒した竜人族だけじゃなかったのか？

僕は身構えて、慎重に尋ねた。

「その魔界の住人が、どうしてこんな山奥にいるんだ？」

「君がこの世界に来ていると聞き及んでね。色々調査した結果、この山へ来るという情報も入手した。だから、君をおびき寄せたのだよ。一人になったところを見計らい、催眠作用のある芳香を流してね」

ああ、だから僕は茫然自失とここまで来てしまったのか。

「で、僕をおびき寄せたって言ったな？ 何のためにだよ」

「決まっている……君を拐かさせてもらうためさ」

またかよ！僕は思わず心の中で叫んだ。

前回襲ってきた竜人族も、そんなことを言っていた。僕を人質にして、魔界を制覇している魔人族、つまり僕の種族に取って代わるためだとか。どうやらこの目の前にそびえたつ怪樹も、そのために僕をさらおうとしているらしい。

「無駄だぞ。僕の親父は、そんな脅迫に屈するような人間じゃない」

そもそも人間じゃないけど、僕はそんなことを言ってみた。記憶の断片とサリナの証言が確かなら、これが正しい回答のはずで。

だが、怪樹は「ふふふ」と笑うと、

「それなら心配はいらない。我々の目的は君を人質に取ることではない。君の身体そのものが必要なのだ」

「え」

その言葉に、少し嫌な予感を覚えて、僕は尻を押さえて後ろに下がった。いや、植物がそんなことするとは思えないけど。しかも男相手に。でも樹液とか言うし。

怪樹は咳払いをすると、

「違う、そういう意味ではない。君の身体を乗っ取らせてもらうために必要なのだ」

ああ、何だ。それなら安心——でもないか。

「ど、どういうことだ、乗っ取るって！」

「我々は他者の身体を支配し、操ることができる。その力を使って君を操り、魔人族を内側から攻め滅ぼす。そういうことだよ」

何てえげつない奴らだ！

「そんなことさせるか！ その前にお前を焼き払ってやる！」

僕は叫ぶと、全身に力を込めた。肌が赤銅色に、髪が白に変色していくのがわかる。

本来の僕の姿——ユタの姿だ。竜人族相手の時は、土壇場になってやっとこの姿に戻れたが、あれからある程度記憶を取り戻したおかげで、少しは力を自由に操れる。

「白炎っ！」

僕は叫ぶと、手のひらから光を投げつけた。白い光は炎と化し、怪樹の全身を包み込む。

「ぐおおおっ？」

悲鳴を上げて、怪樹はその場で燃え尽きた。

何だ、意外とあっけない。僕が胸中であつばやいた、次の瞬間。

「無駄だ」

「えっ？」

声と共に、背後から何かが伸びてきたかと思うと、僕の両腕を縛り上げた。見れば、それは木の蔓だ。

振り返ると、先ほど燃やした木とは別の木が、こちらへ近づいている。敵は一体じゃなかったのか！

「こ、このっ、離せ！」

僕は必死にもがいたが、こう腕を縛り上げられては術もまともに使えない。他にモーションを必要としない術もあるかもしれないが、あったとしても思い出せていない。

そうこうしているうちに、さらに違う蔓が巻き付き、僕の首を締め上げた。う、このままだと、意識を落とされてしまう。

「くっ、まずい……」

その時だった。サリナの声が響いたのは。

「ユタ様あっ！」

林の中から彼女が飛び出し、天高く跳躍した。彼女の跳躍力は、人間のそれを遙かに凌駕する。空中で彼女の足は変化し、銀の鱗に包まれた魚の尾びれへと姿を変えた。

人魚姫のサリナ。その能力は、本来の姿である人魚の形態に戻った時、一番に発揮される。そして彼女は水を操る術を得意としていた。

サリナは両腕を振り上げると、そこから大量の水をわき出させる。水は勢いよく噴射され、カッターのように僕の腕を縛り上げた蔓を切り裂き、ついでにその後ろにいる怪樹をずたずたに引き裂いた。

断末魔の悲鳴を上げる怪樹を後目に、サリナは僕の側に駆け寄り——足が尾びれになってるから、ぴょんぴょんと跳ね寄り、か。ともかく蔓を外してくれる。

「ユタ様、捜しましたよ！ 驚きました、急に姿を消すんですもの！」

「ごめん、助かったよ。でも、どうしてここがわかったの？」

僕が笑みを向けると、サリナは「これのおかげです」と得意そうに手のひらサイズの正方形の板のようなものを、制服のポケットから取り出した。

「……何これ？」

「魔界から持ってきた、魔人族特製のトレーサーです。ユタ様がつけているマーカーから特殊な波長をキャッチし、いつでも居場所を特定することができるのです」

「え。僕、そんなマーカーなんてつけてたっけ？」

「毎日こっそり、着ている衣服に縫いつけてますよ。ユタ様の居場所はちゃんと把握しておかないと、お世話できませんから……………うふふ」

最後の笑い声は、少し低く悦に入っているような気がする。はっきり言って怖い。そもそもその行為は「お世話」じゃなくて、「ストーキング」というんじゃないだろうか。

「ま、まあいいや。ともかく、早くここから出て……」

僕が提案しようとしたその時。

「逃がさん」

「え？」

「ユタ様、危ない！」

刹那、サリナが僕を突き飛ばし、さらに違う方角から飛んできた蔦に絡め取られた。

怪樹はまだいたのか！ 一体、この世界に何体来ているんだ！

と、まるで僕の疑問に答えるかのように、周囲の木々が一斉に動き始めた。その数はざっと数十を超えている。

「まさか、こんなに大勢……」

僕が呆然とつぶやく間にも、サリナは蔦につるし上げられ、宙で苦しそうな表情を浮かべた。

「ううっ」と苦悶の声流れ出る。

「お、おい！ サリナを離せ！」

「そうはいかん。君には一緒に来てもらう必要がある。この従者にどれほどの価値があるかは知らないが、人質として試してみるとするか」

「逃げて、ユタ様……っ！」

サリナは叫んだが、すぐに蔦にしめつけられて再び苦鳴の声を上げた。

まずい、蔦を焼き払おうにもサリナに飛び火しそうで術が使えない。

かと言ってこのままじゃサリナが……くそ、怪樹め。大勢で寄ってたかって、さらに人質を取るなんて、どこまでも卑劣な奴なんだ。

(……いや、待てよ。あいつら、何で人質を取ったんだ?)

僕の頭に、疑問が浮かぶ。そうだ、多勢で戦力的にも優位なこいつらが、人質を取る必要はない。力づくで僕をさらってあげばいいだけのはずだ。それができないということは、まだ僕に状況を打破される可能性があるということだろうか。

そもそも。こんなに大勢の怪樹が、あらかじめこの世界に入り込んでいたとは思にくい。サリナも竜人族も、単独でこの世界に来ていた。魔界のルールはよく覚えていないけど、魔界の住人があまり人目についてはいけないということはわかる。

(じゃあ、なんだこいつらは。普通の魔界の住人じゃない?)

そこまで僕が思考を推し進めた時。ふと、何かがはらりと降ってきた。

近づいてきた怪樹の一本がつけていた紅葉だった。何かの拍子にこぼれ落ちたのだろう。

それが頬に触れた時、僕の脳裏にかすかな記憶が浮かび上がった。

「でも気をつけてください、ユタ様」

「何を？」

「あれは……ひょっとしたら、『菌糸族』の手下かもしれないですから」

(……思い出した！)

僕とサリナが、まだ小さかった頃。サリナは色々な知識をすでに身につけていて、そのいくつかを僕に教えてくれたことがあった。

そのうちの一つがこれだった。菌糸族——ああ、そうか。そういうことだったのか。

「サリナ」

僕はサリナに呼びかける。サリナは必死の形相でこちらを見ると、

「ユタ様、私に構わないでください。こいつらを焼き払って……」

「いや、その必要はなくなったよ。それから、ありがとう」

「え？」

「おかげで黒幕がわかったんだ……出てこいよ！」

僕は叫ぶと、両腕を振り上げた。ほとんど、無意識のモーション。大地をえぐり出すその力が欲しいと、願った結果だ。

両腕の先に、空気の渦ができあがった。それを地面にたたきつける。暴風が土を掘り起こし、僕を中心に直径十メートル程度の大穴をうがっていく。

「きゃっ？」

舞い上がった土煙にサリナが悲鳴を上げたが、今はその身を気遣うのは後だ。それよりもやらなければならないことがあって、僕はそれを実行に移した。

右腕を伸ばし、それをむんずと捕まえる。

僕の手には、うどんの生地を薄く無造作にのばしたようなものが握られていた。細い糸がそこから四方八方にのびて、地面に潜り込んでいる。

生地の中には、人間のものと目が一だけついていて、こちらを見ていた。

「き、貴様……」

「菌糸族。地面に潜む本体と、他者に寄生するための菌糸から構成される、魔界でも珍しい生物。あまりにもマイナーな存在なんで、誰も知らないような種族だったよな。もっとも、僕は記憶を失っているから元からでんでわからなかったんだけど。でも残念ながら、小さい時のサリナは知っていたんだ」

僕は手のひらの上の菌糸族を一瞥してから、言葉を続けた。

「お前は動物や植物に寄生し、自由に操る。その時、寄生先の生命エネルギーを吸い取ってしまうんだ。だから樹木などに寄生すると、その木は枯れて紅葉する」

本来、葉が紅葉するにはアントシアンという成分が必要だが、菌糸族が寄生した場合は、彼らの魔力が作用して赤くなるらしい——と記憶の中のサリナは言っていた。

まあ、結局のところ、『怪樹』などという魔界の住人は存在しなくて、菌糸族に操られた普通の植物だったのである。わざわざありもしない名を名乗ったのは、菌糸族が自分の存在を隠すためのカムフラージュだったのだろう。

と、その菌糸族の目から、声が聞こえた。

「くそっ、かくなる上は！」

周囲の木々が一斉に動き始めた。蔦がのびて、僕とサリナに襲いかかろうとする。奴の菌糸は未だ、植物にとりついていてるのだ。

だが。その蔦はすべて途中で動きを止めた。

僕が、菌糸族に白炎を放ったからである。

「ぐあっ……」

「往生際の悪い奴だな。消えろよ」

そして僕は燃えさかる菌糸族を地面に落とすと、燃え尽きるのを見届けてから、周囲に飛び火しないように靴でもみ消した。

白き魔族は白き灰と化し、風に乗って流れていった。

○

結局、山の紅葉の正体は、菌糸族が操り人形（そしてエネルギー源）としたために、寄生した木々を枯らしてしまったことにあった。紅葉がまばらだったのは、さすがに山の木すべてに寄生する必要はなかったからであろう。

しかし竜人族もそうだが、魔界の住人に僕がこの世界にいるという情報が流れているのが気に掛かる。どうにかして調べておいた方がいいのかな。

ともあれ、僕とサリナはすっかり離れてしまったクラスの間を追いかけるため、急ぎ下山した。

「おい、鎌井、海野さん！ どこに行ってたんだよ！」

「急に姿を消すから心配したわよ！」

「二人とも、エロいことしてたんじゃないでしょうね？」

「してないよ！」

スタート地点に戻った時、クラスメートにもみくちゃんに迎えられて、僕達は閉口した。

まさか本当のことを言うわけにもいかないから、道に迷った、と適当にごまかしてみる。大半の生徒が信じていなかったようだけど。

「くそ、二人で秘密の逢瀬とか羨ましい……」

「やっぱり鎌井の奴、屋上からバンジーさせるか……」

「自動車二台に上半身と下半身をくくりつけ、それぞれ逆方向に走らせるとかどうだ？」

それは死ぬ！

まったく、サリナとそういう関係だと誤解するのはいいけど、やっかむのはやめて欲しい。僕はともかく、サリナにまで迷惑がかかるし。

ふと、そのサリナが、こっそりと僕の肩を叩いた。広場の隅の方へと誘ってくる。

「なに？」

つられて行くと、彼女はいきなり深々と僕に向かって頭を下げた。

「あの、申し訳ありませんでした！」

「は？」

「私がユタ様をお助けしなければならなかったのに、逆に助けられるなんて……世話役として失格です」

しょんぼり、とうなだれるサリナに、僕は思わず苦笑した。

「いいよ。そもそも、僕が迂闊に行動したのが悪かったんだし。もうちょっと、自分が魔界の王子であることを、意識するべきだったね」

そう、菌糸族も竜人族も、僕を利用しようとちょっかいを出してきたのだ。ちょっと考えればわかるが、僕＝ユタは魔界において要人に当たるのである。敵に狙われる可能性だって高い。そのことを考慮できていなかった自分が、正直情けないと思う。

ふと、昼間に自分で言った言葉を思い出し、僕はサリナから視線をそらして地面に目を向けた

。「やっぱり僕は、ユタとは違うんだ。その辺の自覚が全然足りないから。だからサリナも、そんなに責任を感じることは……」

「そんなこと、ありません！」

「うわあっ？」

いきなり強い口調でサリナが言ったので、僕は驚いて彼女の方を見た。

サリナは両の拳を胸元でぎゅっと握ると、真剣な目で僕の顔をのぞき込んできた。その距離およそ十五センチ。息が頬にかかってくるほど、近い。

「な、ななな、なにっ？」

僕は一瞬パニックを起こしそうになったが、サリナは構わず再度口を開くと、

「いいですか、ユタ様は自分を卑下しすぎです！ いいじゃないですか、前と違ってユタ様はユタ様なんですから！」

「え……」

「私、お昼ご飯が終わってからずっと考えていました。今のユタ様と昔のユタ様は確かに違います。でも、やっぱりどこか似てるんです。性格は違うのに」

そして彼女は顔を真っ赤にすると、少し恥ずかしそうにもじもじし始めた。

「あの、私がその、巨犬に追われて……おもらししたの、覚えてるんですよ」

「あ、うん。その時のパンツの柄もなんとなく」

「それは忘れてください！ そ、それです、今の私はおもらしとか絶対しませんけど……それでも私は、サリナなんです。あなたの記憶の中にいた女の子と一緒になんですよ」

そして彼女は僕の手を両手で包むと、優しくこう言ってくれた。

「人は変わっていくんですよ、ユタ様。昔のまま、なんてことは絶対にありません。今の『鎌井裕太』様も、きっと以前のユタ様が少し変わっただけにすぎないですよ」

「サリナ……」

「だから、記憶を取り戻した時、どちらの自分を取るのかはユタ様が決めてください。大丈夫、私はどちらのユタ様でもついていきます。だって……私はどちらのユタ様も好きなのでから」

「……………」

え、何？

今、サリナは何て言ったんだ？

「あ、あの、それ本当、サリナ？」

「はい、何がです？」

「いや、僕のこと、その……『好き』って」

「え。あ」

サリナの表情が固まる。顔が赤くなったかと思うと、彼女は慌てて両腕を振った。

「い、いや、あの、違います！ そんな特別な意味じゃなくて、もう少し広義的な意味で！ だ、だだって、私みたいな世話役が、ユタ様のことを好きになっても、しょうがないじゃないで

すか！ だから違うんです！ 忘れてください！」

「あ、うん。わかった。わかったからそこまで言わなくても……そんな力一杯否定されると、僕としても悲しいものがあるから」

結局、サリナは世話役として純粋に僕のことを慕ってくれているということだ。ああもう、一瞬喜んだ自分が悲しい。

そんな僕を、サリナは「うー」と複雑そうな声を上げて、同じく複雑そうな表情でこちらを見ていたが。やがて、気を取り直すように咳払いしてから、微笑を浮かべると、

「ともかく、ユタ様。まずは色々と思い出してください。自分のこと、魔界のこと、それから…  
…できれば私のことも」

「うん」

彼女の言葉に、僕は大きくうなずいた。実は、自分のことより、魔界のことより、何よりサリナのことを思い出したいんだけど。

脳裏をかすめた記憶の中のサリナ。少し幼い彼女は、今のようにとても優しい笑みを僕に浮かべていて……少なくともその時の僕は、彼女にある種の感情を抱いていたに違いないのであった。

つまり、今僕がサリナに抱いている感情である。

「そうでなきゃ、積極的に記憶を取り戻したいなんて思うものか」

「何か言いましたか、ユタ様」

「ううん、何でも」

僕は、しれっ、と答えると、整列し始めている生徒達の方に向かって歩き出すことにした。いつまでもサリナと二人きりでいたら、またクラスメートから嫉まれるか、からかわれるだろうし。

途中、献身的なメイドを振り返る。何となく、笑みがこぼれた。

「行こうか、サリナ。奇怪な遠足は、これで終わりだ」

「あ、はい」

サリナも屈託のない笑顔を返してくれ、そして数十分後には、僕らはその山を後にするのであった。

記憶を蘇らせてくれた紅が、未だそこかしこに残る山を。

王子と私とご主人様

広野未沙

## あらすじ・登場人物

---

### ○あらすじ

ある夜、裏庭でレーアが魔法の練習をしていると一人の少年が空から落ちてくる。少年の名はルネ。自称魔界の王子。レーアは、部屋に居座ろうとするルネを何とかして追い出そうとするが、逆に追い詰められてしまう。窮地を救ってくれたのは、ご主人様のイスト。ルネに居候先を紹介してくれたのだった。

### ○登場人物

#### レーア・ブランデル

一七歳。フォルセル家の使用人。魔法の素質を信じて訓練の日々。

#### ルネフォールト＝ベルテルデ・アンテロイネン

通称ルネ。空から降ってきた少年。自称魔界の王子。現在は隣のキプルソフ家に居候中。

#### イスト・フォルセル

レーアが仕えるフォルセル家の長男。穏やかで誰にでも優しい。

## 第二話 森には魔物が棲んでいる

しんと辺りが寝静まる時間。ほとんどの部屋の明かりが消えているフォルセル家の屋敷から出てくる一人の少女がいた。まっすぐなくせのない金髪を一つにまとめた少女は、フォルセル家の使用人の制服である紺色のワンピースを着ている。

少女の名前は、レーア・ブランデル。これから、日課である魔法の練習を行うのだ。

裏庭のすみっこ。近くにはオークの木。いつもの場所についたレーアは、きょろきょろと辺りの様子をうかがう。

気になるのは、隣のキプルソフ夫人の家の明かりだが、高い塀が隔てていて、はっきりとは見えない。けれど、人の気配は……しない。

どうやら、今のところ大丈夫なようだ。ふう、とレーアは安堵の息をつく。

(昨日も一昨日も練習にならなかったしね)

ここ数日、まともに訓練が出来なかったのだ。最初の呪文を唱えた時点で、決まって邪魔者がやってきたから。

遠くで聞こえる虫の声。小さく息を吸い込み、レーアは気持ちを落ち着かせる。

(今日こそは、しっかり練習するんだから)

人間界と隣り合わせに存在する魔界には、強大な力を持つ生物が住んでいるという。その魔界の住人に向かって語りかけ力を借りることで発動するのが魔法だ。呪文さえ唱えれば誰だって使える、というものではなく、呪文を唱えた人間の声を聞いてくれる相性のいい魔物がいなければならない。それは生まれ持った一種の素質のようなもので、努力でどうにかできるものではない、というのが定説だ。

レーアは、昔、魔法使いのおばあさんに魔法使いの素質がある、と言われたことがある。しかし、レーアが生きていた十七年間で、魔法が発動したことは、一度もない。それでも、レーアはめげずに魔法の練習を続けている。いつかきっと、魔法が使えることを信じて。

レーアの住むトルメントウム王国では、魔法使いの地位が高い。けれど、レーアが魔法を使いたいのは、魔法使いになりたいからではない。ただ、なんというか、ロマン、みたいなもの。特に今の使用人の境遇に不満があるわけではない。

(よし)

レーアはぎゅっと拳を握る。魔法には集中力が大切だ。目を閉じて、すっかり暗記してしまった呪文を唱え始める。成功すれば、手のひらに小さな明かりの球が浮かぶという他愛もないものだ。

「魔の向こうに……」

人の気配を感じた。

(……無視よ。無視)

レーアはそう自分に言い聞かせる。いつもより現れるタイミングが早い。だいたい呪文を唱え終わった直後に奴は現れる。だから、きっと気のせいだ。うん。

「すみし者よ」

「レーア」

後ろから飛んできた声に、レーアは冗談ではなく心臓が止まるかと思うくらいに驚いた。  
振り返って思わず叫ぶ。

「イスト様！」

「静かに」

にっこりと微笑んだまま、イストはぴんとたてた人差し指を唇に当てる。レーアは慌てて小さくなった。

「す、すみません」

「使用人が起きてくると困るからね」

レーアに声をかけたのは、フォルセル家の長男——イストだったのだ。紡績会社社長でほとんど家にいない父親に代わり、フォルセル家を守っているイストは、レーアにとって、「ご主人様」といってもいい存在だ。

イストが持っているランプが、ぼんやりと彼の明るい金色の髪と優しげな顔立ちを照らしている。同じ金色の髪でも、レーアの月光のような淡い金色に比べて、イストの金色は太陽の光のような明るいそれだ。非常にうらやましい。

「もしかして、邪魔しちゃったかな？」

「と、とんでもありません！」

また思わず力が入ってしまって、レーアは慌てて口元をおさえた。イストは仕方ないな、とでも言いたげに苦笑している。

「そ、それで、イスト様は、どうしてこんな時間にこんなところに？」

自分で言うのもなんだけれど、普通の人間は、夜遅く家の裏庭になんてこないと思う。

「レーアに用事があったんだ」

「私に、ですか？」

「うん。レーアを捕まえるには、この時間が一番いいからね」

レーアが毎日魔法の練習をしていることは、イストも知っている。

「本当は待っているつもりだったんだけど、今日は、いつもより時間が早いみたいだね」

「えっと……」

立派な理由があるのだが、なんとなくイストに言うのもはばかりで、レーアは言葉を濁した。幸いなことに、イストはあまり気にしなかったらしい。

「で、用事なんだけど、いいかな？ 確か、レーアは明後日お休みだよな？」

「はい。そうですけど」

フォルセル家の使用人は、月に四日ほどお休みがもらえる。それはレーアのような下っ端でも例外はない。使用人の休みは、二週間に一度というところも多く、中には主人の都合で休みが取り上げられるさえある。それを考えれば、破格の待遇といってもいいだろう。

「もし、予定がなかったら、の話でいいんだけど、一緒に出かけない？」

「えっ？」

思いがけないイストの申し出に、レーアは一瞬、頭が真っ白になった。

一使用人であるレーアが、イストから誘われるなんて。

「わ、私とですか？」

ドキドキドキドキ。心臓の鼓動をレーアは意識する。

「うん。どうかな？」

もちろん、残された答えは一つしかない。レーアは即答した。

「行きます！」

(まさか、イスト様とおでかけできるなんて)

イストが去っていった後も、レーアの心は弾んでいた。主人という立場にありながら、物腰も柔らかく、容姿も麗しく、誰にでもわけへだてなく接するイストは、レーアたち使用人の憧れの的である。

(早く明後日にならないかなあ)

一体、どこへ出かけるというのだろう。使用人としてのお供でもかまわないのだ。イストと一緒にいられるのなら。

「今日は練習しないのか？」

一番聞きたくなかった声に、ときめきに浸っていたレーアは我に返った。

「ルネ！」

隣家と隔てる塀の上から、器用にもレーアを偉そうに見下ろしているのは、隣のキプルソフ家の居候ルネフォールト＝ベルテルデ・アンテロイネン——通称ルネだった。

やや長めの髪も、瞳の色も、そして着ている服も、すべて黒。半分闇に溶け込んでいるようにさえ見える。やや幼さが残る整った顔立ちに、不敵な笑みを浮かべていた。その無駄に偉そうな態度は、本人が自称する魔界の王子っぽいと言えなくもない。

はっきりいって、あまり近づかない方がよい。そうレーアは確信していた。第一、魔界の王子を自称するなんて怪しすぎる。現れた当初こそいろいろ巻き込まれていたが、キプルソフ夫人の家に居候が決まり、縁が切れると思っていたのだが……。

どうやら、レーアは、変な意味でこの自称魔界の王子に気に入られてしまったらしい。容姿だって平凡だし、特にずば抜けた特技があるわけでもない。それなのに。

「また来たんですか？」

思わず高くなってしまいそうな声を、レーアは必死で抑える。

そう。ここ数日、魔法の練習をしていると、必ずルネがやってきて邪魔をするのだ。深夜に近い時間なのに、わざわざ屋敷を抜け出して。

「お前の練習を見るのは面白いからな。で、練習しないのか？ どうせ使えない魔法を」

ルネは、塀の上から軽々と飛び降りる。着地に音すら立てない。

「どうして言い切れるんですか」

「実際、使えた試しがないんだろう？」

「それはそうですけど……」

レーアは言葉に詰まった。

「でも、私の勝手じゃないですか！ 誰にも迷惑をかけていません！」

レーアの言葉に、ルネは一瞬目を丸くした。しかしすぐにはやりと笑う。

「なら、見ているのだって、俺の勝手だろう」

せっかくの綺麗な顔立ちも、性格の悪さがにじみ出る表情で台無しだ。

「で、見てどうするんですか」

「お前がめげない様子を見て楽しむ」

ルネはきっぱりと真顔で言い切った。

「……」

どうやら、ルネは、てこでもそこを動くつもりがないらしい。

ルネは、強力な魔法が使える。レーアはそれを身を持って体験している。だからといって、ルネが有益なアドバイスをくれるわけではない。本当に面白がっているだけなのだ。

馬鹿にされてもなお、受け入れるほど、レーアはお人好しではない。

「そういえば、お前、今日あたり……」

「気分が変わりました。今日はこれで終わりにします」

レーアは言った。きっとルネをにらみつける。

「おやすみなさい！」

足下のランプを掴み、すたすたと屋敷へ向かう。

「つまらんな」

ルネの呟きが聞こえたが、もちろん無視。

せっかくイスト様とお話できたのに、気分は最悪だ。

——部屋に戻って、今日は、本当に一度も呪文を唱えていないことにレーアは気づいた。

(やっぱり最低！)

思い切りよく、毛布をかぶった。

忘れよう。せっかくイスト様に誘ってもらえたのだから。そのことだけを考えて。

楽しい時間は、あっという間にやってくる。イストとのお出かけの日。

指定された玄関先で待っていると、約束の時間ぴったりにイストは現れた。

「今日はよろしくね。レーア」

にっこりと微笑むイストに、思わずレーアは見とれてしまいそうになる。

昨日も結局ルネに邪魔されて、まともに魔法の練習ができなかった。そんな鬱屈した思いも、イストの笑顔の前にすっかり晴れてしまう。

「こ、こちらこそよろしくお願ひします」

レーアはぺこりと頭を下げた。

レーアは、表向き「イストの外出の付き添い」ということになっている。着ている服も、紺色の使用人服だ。休日をつぶしての「付き添い」に、他の使用人からの反応は、うらやましい気もするけれど同情するというものが大半だった。いくら憧れのイスト様のご命令でも、自分の休日はつぶしたくない、というのが本音らしい。

(どこへ行くんだろう)

出かける、としか聞いていない。だから、てっきり、どこか街中に買い物にでも出かけるのだろうかと思っていた。

しかし、予想に反して、イストは狩りに行くような服装をしている。普段のきっちりした服装を見慣れている身としては、かなり新鮮だ。

(どんな格好も似合うなあ)

見とれている場合ではない。使用人として同行するのだ、とレーアは自分に言い聞かせている。自分の役割は、きちんと果たさなくては。

玄関先には、すでに御者が馬車を用意している。

しかし、イストは動こうとはしない。

「イスト様。出発されないのですか？」

「待ち人がいるからね」

さらりとイストが答えた。初耳だった。

「待ち人？ 他にも誰か、一緒に行くんですか？」

誰だろう？ レーアには想像も付かない。イストが去年まで通っていたパブリックスクールの友人とかだろうか。

「うん。聞いていない？」

「初耳です」

戸惑いが顔に出ているのだろうか。イストが優しく微笑んだ。

「そんなに不安にならなくても大丈夫だよ。レーアもよく知っている人だから」

(私がよく知っている人？)

イストの交友関係を、レーアはあまり知らない。たまに遊びにくるパブリックスクール時代の同級生とか、顔はわかるけれど、よく知っている、と表現するには違う気がした。

「来たみたいだね」

誰だろう。レーアはイストの声につられて、顔を上げる。

「おう。待たせたな」

飛んできた声に、レーアは絶句した。

「ル、ルネ……」

そう。レーアの大敵ルネが、こちらに向かって歩いてきている。いつもの黒づくめの服装。待たせたことを、悪いとは思っていないらしい。少くく走りなさいよ、と突っ込みたくなる。

「イスト様！ どうしてルネがここにいるんですか！」

「本当に知らなかったんだね。じゃあ、これも知らない？」

「何が、ですか？」

なんとなく嫌な予感がする。

「もともと、僕とルネの二人で出かける予定だったんだよ。でもね」

なんか、その先は聞きたくない。耳をふさぎたいが、ご主人様の手前、そうもいかない。

「ルネが、どうしても、レーアも一緒がいいというから」

ある意味予想通りの言葉が、イストから紡がれる。だが、理解は全く出来ない。

(何故?)

「別に、俺はどうしてもとは言っていないぞ」

割り込んできたのは、当のルネだ。不服そうにそう述べると、びしっとイストを指さす。

「それに、レーアがいた方が面白いと乗ったのはお前だ」

「そうだったね」

(肯定するんですか！)

面白い、というのは何となく女の子としては微妙な言葉だ。

「どうしたんだ。レーア」

「別になんでもありません。私のことはお気になさらず」

がっかりしたことを悟られたら、きっとルネにからかわれまくる。そんな予感がしたので、レーアは慌てて手を振った。

「そうか。てっきり、イストと二人きりじゃなくてがっかりしているのかと思ったぞ」

にやり、と笑うルネのその表情は、自分が言っていることを凶星だと確信していた。確かにそれは当たっているけれど、絶対認めてなんかやらない。

二人の間に流れる緊迫した雰囲気。それをあっさり破ったのは、イストだった。

「じゃあ、行こうか？ 二人とも」

柔和なイストの声に、レーアとルネはこくりとうなずいた。

きっと、この先レーアがこの馬車に乗ることは、たぶんないだろう。イストが出かけるときに使う箱形馬車は、ゆったりとした四人乗りだった。御者の青年は、レーアと視線が合うと、同情的な視線をくれた。きっとレーアが今日、本来ならば休日であることを知っているのだろう。

イストとルネが向かい合うようにして座り、そして何故かレーアはルネの隣に座ることになる。まあ、ルネの顔を見ているよりも、イストの顔を見ていた方が幸せだから、有り難いと思うよ

うにしよう。

ゆっくりと馬車が走り出す。予想通り、馬車は、王都テアーマの街の方ではなく、郊外の方に向かっているようだ。

「イスト様。今日は、どちらへ行かれるんですか？」

「それは内緒だよ。ルネも知らないくらいだから」

「お前が口を割らないからな。お前がどうしてもって言うから、付き合っただけだぞ」  
むすっとした顔で、ルネが答える。

「ありがとう。ルネ」

笑みを崩さないイストに毒気を抜かれたらしく、ルネはふうと息をついた。

(というか、イスト様とルネ、いつの間にこんなに仲良くなったんだろう)

ルネの居候先を紹介したのは、イストだ。そのつながりからだろうか。

貴族の屋敷が建ち並ぶ通りを抜け、馬車は山の方へ向かっている。すっかり色づいた木々が遠くに見え始める。

「イスト様。もしかして、森へ向かっているんですか？」

思わずレーアはイストに尋ねる。イストはゆっくりとうなずいた。

「そうだよ。紅葉を見に行こうかな、って。綺麗だって話をこの前逢った人に聞いてね」

確かに、赤や黄色に色づいた葉は、いつもと違った趣がある。

「最近、紅葉を見物しに行くことが流行っているみたいだね」

確かに街外れへ向かっているというのに、何台か馬車の姿を見る。やはりその馬車たちも紅葉を見に森へでかけているのだろうか。

フォルセル家の庭には、常緑樹しかないけれど、近くにならイチョウ並木があり、レーアも時折歩くことがある。綺麗だなと思うことはあったけれど、改めて鑑賞しよう、となどは考えなかった。

(紅葉かあ。さすが、上流階級の人考えることは違うなあ)

「赤い葉……不吉だ」

ぼそりとルネが呟いた。

「お前。あれを見てなんとも思わないのか？」

レーアに囁いてくる。レーアは眉をひそめた。

「なんとも思わないって何をですか？ 紅葉は綺麗だなんて思いますけど」

「綺麗？ あれが？」

ルネが大きな声を出す。

「冗談じゃない！」

「どうしたんだい？ ルネ。声を荒げて」

イストが首をかしげる。

「もしかして、お前たち、あの赤い葉の元へ行くのか？」

「そうだよ」

「バカか？ とにかく、馬車をとめてくれ！」

ルネが全身の力を使って叫んだ。椅子から腰を半分浮かせている。

「無茶だよ。ルネ」

穏やかな声音で、イストがたしなめる。ルネは大きく首を振った。

「俺は絶対にあんなところにはいかない」

「……ルネ」

「とめないつもりならいい。俺は魔界の王子だぞ。すぐに帰ることくらいできる！ お前たちも、あんな不吉な場所に近づかない方がいい」

まるで捨て台詞のように言って、ルネはぱちりと指を鳴らした。

——ルネの姿が消えた。

「えっ？」

レーアは目を丸くする。

動いている馬車の中から消えるなんて信じられない。強い魔力の持ち主だということは知っていたけれど。

「……消えたね」

イストはあまり驚いていないようだ。

「えっと……」

戸惑うレーアが視線を彷徨わせると、イストと目が合った。

「イスト様は落ち着いてらっしゃいますね」

「半分、予想していたから。少なくとも彼がいやがることはね」

イストは静かに微笑む。

「どういうことですか？」

「ルネは、自分のことを魔界の王子だって主張しているでしょう？ でも、ルネは見る限り、普通の人間に見える。強大な魔力を持っているみたいだけれど、それだけじゃ、本当に魔界の人間だって断言することは出来ない」

「はあ」

「それで、本当に魔界の人間なら、紅葉に何か反応を示すんじゃないかなって思ってね」

不吉だ。そうルネは言っていた。その反応を、イストは狙っていたというのだろうか。

「魔界では、赤い葉は不吉な印として、忌み嫌われるらしい。あくまで、本で読んだ知識で、深い理由までは分からないけれど。でも、こっちにだって似たようなものはあるしね。赤い葉を好む魔物まで、忌み嫌われるようになる程度には、不吉らしいよ」

魔界にもそういう考えがあることに、レーアは驚きだった。魔界といえば、化け物ばかりが住んでいる場所。不吉もなにもあったものじゃない、というのがなんとなくのイメージだったから。

「それでわざわざルネを誘ったんですか？」

「そうだよ。個人的な興味、みたいなものかな。赤い葉に反応を示すってことは、彼はやっぱり魔界の人間なんだろうね」

「……」

「それで、このあと、どうするんですか？」

イストの目的が、ルネの反応を確かめることだったら、もうすでに目的は達せられてしまっ

いる。帰る、とか言われたらどうしよう。

「僕とレーアは、紅葉を楽しめばいいんじゃないかな。僕たちは、普通の人間なんだから」

「そうですね」

せっかくイストと二人きりなのだ。楽しまなくては損だ。

弾んだ声で、レーアは答えた。

テアーマの郊外にある森は、上流階級の男性が狩を楽しむ場として親しまれている。この秋は、期日を限定して狩を禁止にし、こうして紅葉を楽しむために解放されているのだという。

穏やかな秋の気候も手伝ったのか、森はレーアの予想以上の賑わいだった。イストもそれは同じだったらしい。もう少し静かだと思っていたんだけどな、と困ったように呟いていた。ほとんどが、格好から判断する限り、中流階級以上の人間だと思われる。

使用人の格好の自分は浮くのではないかと思ったレーアだが、上流階級の人間は、たいてい側に従者を置いている。使用人服のレーアも、悪目立ちはしていないようだった。

レーアは、イストのほんの少し後ろを歩く。使用人なんだから、並んで歩いてはいけないのだ。

広葉樹林。カエデが多いのだろうか。真っ赤に染まった葉は、少しずつ道にも落ち始めている。緑の森の中を進むのもいいけれど、こういうのもいいな、と思う。

ただ、森の中を散策する。それだけなのに楽しい。

そばに、イストがいるからだろうか。

ふと、イストが立ち止まった。レーアもそれに合わせて歩みを止める。

「綺麗だね」

「はいっ」

「さっきから、気になっているんだけど、どうして隣に来ないの？」

イストが悪戯っぽく尋ねてくる。レーアは慌てた。

「えっと、私は、使用人ですし」

着ている服だって、使用人そのものだ。いや、たとえレーアが私服を着ていたとしても、とてもイストと並んで歩けるようなものじゃなかったと思うけれど。質が違いすぎる。

イストは、軽く微笑んだだけで、それ以上、レーア的位置については何も言わなかった。

その代わりに、側にあった、真っ赤な葉をつけたカエデの木を見上げる。

「思ったよりも真っ赤に染まっているね。葉。特に、この木はすごい」

「はい。本当に」

遠くから見たときは、単純に綺麗だと思った。少し枯れかかった赤い色の葉。

でも、今、目の前にあるカエデの木は何かが違う。

赤い葉は不吉だ。ルネがそう言うのも、何となくわかる気がした。

真っ赤だ。まるで——血のように。

こんなにも、自然に葉が赤くなるのだろうか。

何となく心がざわめくのに、目が離せない。まるで、魅入られてしまったかのようだ。

——赤い葉を好む化け物がいる。

イストもレーアと同じようなことを思ったのかはわからない。赤い葉に視線が釘付けになっているレーアに「行こうか」と優しい声をかけてくる。

レーアはうなずいた。あの木が今は気になるけれど、きっと少し歩けば、忘れてしまうだろう。



異変を感じたのは、しばらくしてからだった。

「なんだか、人がいませんね」

きょろきょろと辺りを見回して、レーアは呟く。まったく人の気配がしないのだ。人混みで身動きが取れない、というほど人がいたわけではない。でも、歩けば、視界にかならずひと組は他の人間が入るくらいではあったはずだ。

それなのに。

「そうだね」

イストの答える声は、やや固い。

ざわり。ひときわ強い風が吹いて、森が鳴る。

赤い葉が、ひらひらと落ちる。

穏やかな気候だったはずなのに、うっすら寒さすら感じる。

——どうしてだろう。

嫌な、予感がする。

——お前。あれを見てなんとも思わないのか？

脳裏にこだまするルネの言葉。

(でも、ここは魔界じゃない)

ぎゅうと手を握る。足が止まる。さくり、と葉を踏みしめる音。

「レーア」

少し前を歩いていたイストが振り向く。レーアは意を決した。

「絶対、おかしいです」

道に迷ったのだろうか。いや、そんなはずはない。分かれ道などなかった。

周りのカエデは、あの不吉だと思った葉と同じ色をしている。赤。血のような赤。

胸がざわめく。

「どこかに、迷い込んでしまったのかもしれない」

「そうだね。僕も、そう思うよ。道は確かに一本道だったはずなのにね」

「私もそう思います。どうしたらいいんでしょう」

イストはゆっくりと首を振った。

「……それは僕もわからない。二人で考えようか」

考えよう。その言葉にレーアはうなずいたものの、どうしたらいいのか、さっぱり見当も付かない。

ざわざわ。レーアの不安をあおるように、風が真っ赤な葉を揺らす。

ふいに足音が聞こえた。

「誰？」

レーアの声はかすれている。

「人じゃないよ。狼？ なのかな」

イストの声には、戸惑いが含まれていた。

レーアの視界にも、その生き物は映る。

犬、というには確かに大きい。ただ、それは、普通の狼ではなかった。

真っ黒な毛並み。そして赤く光る瞳。そう、まるで赤い葉のような。

地に響くうなり声。口元からのぞく牙。

それは、ゆっくりとレーアたちに近づいてきた。

危険。頭の中に警鐘が鳴る。

「逃げよう。レーア」

ぐいっとイストはレーアの手をひくと、狼のような生き物に背を向けて走り出した。

「イスト様」

イストの早さにレーアはついて行くのが精一杯だ。

息が切れる。どこまでも永遠に続くように思われる森。赤い森は、どこまでも続く。

やはり、誰一人いない。声を上げたとして、誰か駆けつけてくれる人はいるのだろうか。いない、気がした。

ひたすらに走る。のどがひゅうひゅうとなり、からからになる口の中。

随分走った。

「無理です！ イスト様。逃げられません！」

後ろを振り向いて、レーアは叫んだ。

さっきより、あの化け物はこちらに近づいている。

元々、人間と狼（とは思えないが）とでは、足の速さが違う。追いつくのは容易だったはずだ。

「……」

イストも自分の目で確かめて、逃げるのが無駄だとわかったらしい。立ち止まった。つないでいた手が、離れる。

うなり声。道に落ちる葉を踏みしめる音。

言葉が通じるわけではないけれど、目の前の生き物が、レーアたちに友好的な態度ではないことくらいわかる。

レーアたちを狙っているようにしか思えない。

（どうしよう）

せめて、イストだけでも、この空間から逃がさなければならない。

それが、使用人としての務めだから。

レーアは決意した。

「イスト様。イスト様だけでも逃げてください」

「レーア？」

イストが目を見開く。

「私は——使用人ですから」

笑って見せた。うまく笑えたかどうかは分からないけれど。それでも。

「何を言って——」

「お願いします。イスト様」

しっかりとイストの目を見て、レーアは言った。

イストは難しい表情している。が、すぐに首を振った。

「ここで、僕が無茶をしないで、といっても、きっとレーアは動かないんだよね。わかったよ。僕は、助けを求めてくる」

きっぱりとイストは言い切った。

「助けを？」

「ルネに、かな」

「ルネに、ですか？」

「彼は、魔界の王子なんでしょう？」

「——たしかに」

どうやってこの森を抜け出すのか。そういう疑問は、あえて口に出さなかった。

「じゃあ、僕が戻るまで、絶対に頑張っているんだよ。レーア。ルネを呼んでくるから」

「はい」

イストが走り去ったのを確認して、レーアは化け物が向かってくる方を向いた。すぐ近くまで、それは迫っている。

正直、イストがルネを呼びに行けるとは思わない。まず、ここを抜けなければいけないのだ。レーアだって死にたくはない。魔法を使えば。せめて、時間を稼げるくらいの。

「魔の向こうにすみし者よ。この声を聞け」

レーアは呪文を唱え始める。

きっと駄目なんだろう。でも、何もしないで諦めたくはなかった。

それに、可能性はゼロではないはずだ。だって、レーアには魔法使いの素質があるはずなんだから。

「私の目の前に、見えない壁を作れ」

力の限りに叫ぶ。

何も手応えはない。やはり無理だったのだ。

どうして。レーアの魔法は、発動しないのだろう。

(やっぱり、私に魔法の才能はないの?)

こんなときくらい、魔法が発動してくれたっていうのに。火事場の馬鹿力すら、レーアにはないらしい。自分が情けなくてたまらなくなる。

まるで、レーアの失敗を待っていたかのように、狼のような生き物は、鋭い牙の生えた口をゆっくりと開けた。

思わず一步後ずさる。

赤い瞳がきらり、と光り、化け物は一步、大きく踏み出す。

飛びかかってくる。

(もう駄目!)

レーアはぎゅっと目をつむった。

絶対戻ってくる。イストとの約束は守れないかもしれない……。

(申し訳ありません。イスト様.....)

衝撃はこなかった。その代わりに、ばちり、と何かをはじき飛ばすような大きな音が聞こえた。たん、と地面を軽く踏みしめる音。

「だから、赤い葉は不吉だと言ったんだ」

——聞き慣れた声がある。ため息混じりの。少し呆れたような。

状況が理解できなくて、レーアは、ゆっくりと目を開ける。

こちらに飛びかかってこようとした狼が、はじき飛ばされていた。

そして、レーアの少し前には、よく知っている人間が立っていた。

「ルネ？ どう、して……」

イストが助けを求めたにしては、早すぎる。

「イスト様に話を聞いたの？」

「イスト？ いや。俺は姿を見ていないぞ」

どうやら、イストが助けを求めたのではないらしい。

確かなのは、ルネが、今、レーアの側にいる、ということ。

「だったら、どうしてここに？」

「俺は魔界の王子だ。こんな結界破るの、たやすいに決まっている」

「結界？」

何がなんだかさっぱりわからない。

はじき飛ばされた化け物は、それでもなんとか着地すると、身を丸くした。

風が吹く。赤い葉が、どんどん化け物の周りに集まり、はりつく。辺り一面の葉は、すべて狼の周りに集まり、あっという間に赤い山ができる。

そして——その山は、むくりむくりと徐々に体積を増し始めた。時折のぞく黒い影。

「大きくなってる！」

「これだから、コイツは嫌なんだ」

「どういうことですか？」

はあ、とルネは大きくため息をつく。

「これ——スプルというんだが——は、赤いものを養分にする。赤ければ何でもいいんだが、特に赤い葉と人間の血が好物だ。今は、この葉を養分に力を蓄えているわけだ。おそらく、俺を倒すために」

「え？ じゃあ」

「売られたケンカは買ってやる。下等生物ごときが、この俺に勝てると思うなよ」

ルネの体から、闘志でめらめらと燃える炎が見えるような気さえする。

「でも、どんどん大きくなっていますよっ」

すでにレーアの背丈は軽く越えている。そのうち、屋敷くらいの大きさになるのではないだろうか。見上げるのに首が痛くなりそうだ。

「お前、俺を誰だと思っている？」

ルネがレーアの顔を見て、にやりと笑った。

自信に満ちた笑み。

風が吹き、スプルを包んでいた赤い葉が竜巻のように吹き上げられる。葉はどこかにちり、消え、そしてスプルの大きな体が現れた。

小さな家くらいの大きさはありそうだ。

「お前、俺が誰だかわかっているのか！」

ルネはスプルに向かって叫ぶ。

「俺は、魔界の王子、ルネフォールト＝ベルテルデ・アンテロイネンだぞ」

(通じるわけないって！)

相手は獣。レーアはそう突っ込みたかったが、かろうじてこらえた。

そして気づく。殺気まで感じていたはずの恐怖感が、すべて綺麗に消し飛んでいることに。不思議だった。

ルネが来たから、だろうか。魔界の王子の真偽はさておき、彼の強い力をレーアは知っているから。

のっそりと大きな口を開けるスプル。鋭い牙が糸を引く。

赤い瞳は、ルネに向けられている。

「だから、お前のような下等生物は嫌いなんだ」

ルネは大きく息を吐き出した。

「無駄に凶体ばかりが大きくなって。大技は面倒くさいから、あまり使いたくないんだがなあ」

一歩、スプルが近づいてくる。

ルネは全く動じない。

ぶつぶつと何か呟いている。レーアには理解不明の言語だった。

大きく口を開けたスプルが、今にもかみつこうとルネのように頭を寄せた。

「ルネ！」

ルネは、レーアを見て、にやりと笑った。まるで、大丈夫だとでも言うように。

それも一瞬。

ルネは、左手を突き出す。

その手から、炎が生まれた。噴射、といってもいい。

炎はあっという間にスプルを包み込み、容赦なく燃やし尽くす。

耳をつんざくようなうめき声。しかし、それも徐々に弱々しいものになっていく。

やがて、炎がはぜる音しか聞こえなくなる。焼き尽くされた魔物は、すべて灰になり散っていた。

レーアは、ただ啞然とその様子を眺めていた。

「無駄な労力を使ったな」

ぷらぷらとルネは左手を振る。

強大すぎる力。たぶん、人間では持ち得ないほどの。

(ルネは、本当に魔界の王子なのかもしれない——)

ルネの横顔をじっと見つめていると、つん、と焦げ臭さがレーアの鼻をついた。

はっとさっきまでスプルがいたところを見ると、魔物を燃やし尽くしたあとも、炎が残り、ぱちぱちと辺りを飲み込もうとしている。

周りは枯れ葉と木。燃えやすいものばかりだ。

「ルネ！」

レーアは慌ててルネに駆け寄った。

「森が！ 森が燃えてます！」

「ああ。そうみたいだな」

まるでルネは人ごとのようだ。

「ちょっとルネ！ どうするんですか！」

炎は、徐々に範囲を広げている。ゆっくりではあるものの、そのうちレーアたちの元にも確実にやってくるだろう。

「それに、この森にはイスト様だっているんですよ！」

ルネがイストと逢っていないという以上、イストもこの森にいるのだろう。

今となっては、イストと別れたことを後悔している。けれど、まさかルネが現れるだなんて思っていなかったのだ。仕方ない。

イストは大丈夫だろうか。この火事に巻き込まれたりしていないだろうか。

「大丈夫だ」

面倒くさそうにルネは言う。でも、レーアは平静でなどいられない。

「でも、燃えてるんですよ。こっちに炎が来ますよ」

炎は徐々に森を包み込もうとしている。

「どうせ、ここはあの厄介な魔物が作った結界だ。いくら燃えようと現実には関係ない」

「でも、危険です！」

「ぎゃあぎゃあわめくな。ここから出る」

「イスト様も忘れないでくださいね！ この森の何処かにいるはずですから」

レーアは必死になって念を押す。はあ、とルネはため息をついた。

「まかせろ。俺を誰だと思っているんだ。そんなに俺は信用ならないか」

「そういうわけじゃないんですけど」

ぱちり、とルネが指を鳴らす。

ふっと世界が変わった、ような気がした。

喧噪が戻ってくる。

すべてスプルに吸収されたはずの葉は、まだ木々に残っている。もちろん、焦げ臭い臭いもしない。少しあたりを見渡せば、他の人間が見える。

あの不吉な感じがした木の側に、レーアたちは立っていた。

赤い葉。色は変わっていないはずなのに、今はもう毒々しい感じはせず、ただ美しいだけだ。周りの木たちだってそうだ。戻ってきたのだ。元の世界に。

「レーア！ 無事だったんだね」

名前を呼ばれて振り向くと、そこにはイストがいた。こちらに駆け寄ってくる。どうやら、ル

ネはきちんとイストも元の世界に連れてきてくれたらしい。レーアは安心する。

そして、いつの間にか現れていたルネに、イストは首をかしげる。

「ルネ。どうしてここに？ 僕も君を探していたんだけど」

「あの、イスト様。ルネが、助けてくれたんです」

「そうなの？ ルネは、どうしてレーアの居場所がわかったの？」

「レーアがぎゃあぎゃあうるさかったからな」

矢継ぎ早に質問するイストに、ルネは、ぶっきらぼうに言った。

うるさくなんかない、と反論したいところだが、レーアはぐっところえる。

「やっぱり赤い葉は不吉だから、俺は帰るぞ。こんなところ、少しだっていたくない」

ルネはそう言うと、すたすたと出口の方へ向かって歩き始めた。

レーアとルネは顔を合わせる。

紅葉は堪能した。それに、もう一度、あんな化け物に出逢うのはごめんだ。

「ルネ。待って」

「待ってください」

二人は揃って、ルネの後ろ姿を追い始めた。

——帰りの馬車の中、いろいろイストがルネを問い詰めた結果をまとめるとこうなる。

どうやら、レーアたちは、スプルに目をつけられ、いつの間にかスプルの結界に誘い込まれていたらしい。スプルは赤い葉の他に血を養分にする、とルネは言っていた。レーアたちを獲物として狙っていたのだろう。

「どういう理由だかはわからないが、スプルが人間界にやってきていたんだろう。スプルは血も好物だが、赤い葉も大好きなんだ。魔界では、赤い葉は不吉な印。そうそう見るができないからな。人間界には、このように赤い葉がたくさんあるから」

あのカエデの木のそばで、スプルはじっとえさになる人間を捜していたのだ。それに、レーアたちは引っかかってしまった。あの毒々しいまでの赤い葉に魅入られてしまったから。

一つ言えるのは、えさにされそうだったところをルネに救われた、ということ。

「とにかく、君が来てくれて助かったよ。ルネ。ありがとう」

イストにストレートに礼を言われて、ルネはそっぽをむいた。

「お前たちがスプルに食われたら、俺の生活がつまらないからな」

「私からも——ありがとう」

「ああいう魔物を人間界に野放しにしておくのは、魔界の王子としても遺憾だったんだ」

あからさまな照れ隠し。イストがくすくすと笑っている。レーアもつられて笑った。

案外、悪い奴ではないのかもしれない。

馬車の中。レーアは、隣に座るルネの顔を盗み見ながら思う。

でも、どうしてルネは、レーアの居場所がわかったんだろう。レーアがぎゃあぎゃあうるさかった、なんていうのは答えになっていない。

尋ねてみようかな、と思う。でも、帰ってくる答えは、なんとなく予想がついた。

そう。たぶん、ルネはこう言う。

——俺は、魔界の王子だからな。

今なら、少しだけ、その言葉を信じてあげてもいいかもしれない。

くるくる

水島朱音

## あらすじ・登場人物

---

### ○あらすじ

大学生の君島尚輝は、母校の高校を訪れた際に一冊の本を見つけた。その本の内容は、かつて自分が所属していた図書部のメンバーによって書かれたリレー小説と、全く同じものだった。未完に終わったはずのリレー小説がなぜ、こうして本の形になり存在しているのか。尚輝はそれを解き明かすため、久々に図書部の部員たちを呼び出した。

### ○登場人物

#### 君島尚輝

大学四年生。存在しないはずの本を見つけた本人。

#### 小山内美優

図書部の部員の一人だった少女。高校卒業を前にこの世を去った。

## 第二話 君島尚輝の話

外ですのような話でもないだろう、と思いながらも待ち合わせ場所を喫茶店に選んだのは、人の目があった方が冷静を保てるだろうと、心のどこかでわかっていたからかもしれない。

幸い、全員に連絡がついた。やはり明日花も千尋もとまどってはいたが、事情を話すと会うことを承諾してくれた。

千尋は地元に残っていたが、明日花と洸は高校を卒業すると同時に県外に引っ越していたので、四人全員に都合の良い日を決めて、二人に帰省してもらうことにした。そして、運良く四人の都合が合いそうな日が見つかったので、少し急ではあったがその日に会うことになった。

それが、数日前。

(たった、数日前)

まだ、心構えも出来ていない。会ったら、どんな顔をすればいいだろう。昔は、どんな顔をしていただろうか。

待ち合わせ場所を選んだ、駅前の喫茶店。学校からは数駅離れている。鞆の中には、あの白い表紙の本が入っている。これを見せたら、彼らは何を思うだろう。

待ち合わせまで、あと一時間近くあった。三人が来る前に心を落ち着けようと思い、早めに家を出たのだった。

一時間。

過去に思いを馳せるには、充分すぎるほど時間があった。

\*\*\*

体育祭が終わり、文化祭が終わり。学校生活の中でも特に慌ただしい時期が過ぎ去った。けれど、三年生にとっては、むしろ今からが本番というところで。

特にレベルの高い大学を目指す洸や美優は大変だな、などと人事のように思っていた。

最近では、部活の時間にも勉強をしていたり、予備校に通うため部活を欠席したりする部員もちらほらと出ている。

『卒業までに完成』を目標に掲げたあのリレー小説も、最近では少しペースが落ちている。そのことに微かな寂しさを覚えるが、仕方のないことだと理解もしている。

「卒業したら、一人暮らしするのか？」

「受かったら、の話だけだね」

図書室の隅、今日は二人だけの部活動。明日花は風邪、千尋はバイト、美優は予備校でそれぞれ欠席のため、男二人というなんとも華やかさに欠けるメンツになってしまった。

洸は参考書に目を落とし、尚輝はその正面に座って例のノートにシャーペンを走らせる。今は、尚輝がリレー小説のバトンを受け取っている状態だった。

場面は、主人公の男子高校生が喫茶店からの脱走を試みて失敗し、神の手によって紅葉の木の下に連れてこられ、ヒロインの女の子と再会するところだった。

(.....なんでこんな話になったんだっけ.....)

予想外のところに行き着くのがリレー小説の面白いところではあるのだが、最初は普通に学園ものとしてスタートしたはずの物語が、今やファンタジーやらミステリーやら何やらを交えてよくわからないところへ向かおうとしている。

これからどう収集をつけようと、芯を収めたシャーペンの先でノートの表面をなぞる。

「.....美優と明日花も県外だよな」

「らしいね。千尋は残るらしいけど」

「ああ、あいつは就職だしな」

千尋の家は母子家庭だということをちらりと聞いた。そのため彼女は進学することなく、親戚の伝で就職先をすでに決めたいらしい。

「そっかー.....離れ離れになるんだなあ」

まだ少し先のことではあるが、あまり実感がなかった。部が発足して以来、当たり前のように五人一緒にいたからだろうか。

なんとなく、シャーペンを置いて背もたれに体重を預け、物思いにふけるように天井を仰ぐ。

「告白、しないの？」

いつもと変わらない、あまりにも変わらない調子で洸がそう尋ねるものだから、反応が遅れた。

「.....は？」

顔を正面に戻すと、洸は参考書に落としていた視線をちらりと上げて、こちらを見た。しかし

それは一瞬のことで、すぐにまた何事もなかったように参考書に意識を戻す。

「……え？ おま、なん……？」

「あれ、違った？ 好きなのかと思ったけど」

こちらの動揺などまるきり無視して、涼しい顔で言っただけ。

「美優のこと」

完全に、固まってしまった。動きも、思考も。

その段階になって、ようやく洸が参考書から尚輝に視線を移す。口元に柔和な微笑さえ浮かべて。

「尚輝って、昔から好きな女の子のタイプ変わらないよね」

優しく控えめで、でも自己主張ははっきりする子が好きだよ。

洸がそう言ったところで、そういえば彼とは十年近い付き合いになるんだなあと、今更ながら思い知った。

「……あー……」

何も言い返せず、意味のない呻き声を発して再び天井を仰いだ。柔らかい蛍光灯の光が、なぜか目に痛い。

「いつから好きなの？」

こいつ、恋愛話とかにそこまで興味あるやつだったっけ。

そう思いながらも、まあいいや、とどこことなく投げやりな気持ちになっていた。

「んー……はっきりとはわかんね。一年の終わりとか、そんなんかなあ……」

何か大きなきっかけがあったというわけではない。徐々に、だったと思う。洸の言う通り、もともと好きなタイプに当てはまっていたのだろう。

けれど、あえて一つ理由をあげるなら。

「……あいつ、小説家になりたいってたんじゃん」

「うん」

「それ、すげえって思ったんだ」

部員たちそれぞれが自分の道を進む中、尚輝もまた、志望する大学があった。

しかしそこは、特にレベルの高い大学というわけでもなく、どうしても入りたいような学科があったからというわけでもなかった。

ちょうど自分の家から通える距離に、良さそうな学科があったから、そこを受験しようと思っただけのこと。自分の学力にも見合っていた。

しかも、どうやらここ数年は少子化の影響もあって、定員割れの状態が続いているようなのだ。成績や素行がよほど酷くない限りは、合格間違いないかと思われる。

そんな風に、なんとなく大学に入ってなんとなく社会人になるのだろうと、そう思っている尚輝にとって、はっきりとした夢を持っている美優の姿は、立派に見えたのだ。

それも、理由としては後付けに過ぎないのだろうけれど。好きになってから思い返せば、相手のどんな部分も魅力的に見えるものだ。

そう言うと、洸はなるほどね、と言って納得したように何度か頷いた。

「卒業前に、告白しなくていいの？」

そしてもう一度、同じ質問を繰り返した。

『離れ離れ』

その言葉が、嫌に重くのしかかる。これまで毎日のように顔をあわせてきたが、卒業すればそれもなくなる。

「……振られる可能性が、高いと思うんだけどな」

「どうして？」

「美優は……」

一旦、言葉を切る。

それから、背もたれに預けていた体を起こし、洗に顔を向けた。彼も、今は参考書から顔を上げて尚輝に視線を投じている。

「美優は、『みんな好き』って言うようなやつだろ」

誰かが特別だとか、そういうのじゃない。彼女はこの部が、図書部の部員全員が、好きなのだ。

「……ああ、うん。わかるような気がする」

「だろ？」

うんうん、と同意を示して洗が頷く。

(まあ、そういうところを好きになったんだらうけど)

けれど、彼女が尚輝に恋愛感情を持っているとは、思えない。

全く可能性がないかと言われれば、それも違うと思うけれど。もしかしたら、これから好きになってくれる可能性も、あるのかもしれないし。

「気持ちだけでも、伝えてみたら？」

洗のその言葉に、背中を押された。

卒業後も未消化な気持ちを持て余すのは嫌だったし。それに、やはり、僅かに期待する部分もあったから。

「ほい」

「わっ、もう書けたんだね！」

翌日。

一限が終わったあとの休憩時間の中に、尚輝は美優のクラスを訪れた。手渡したのは、一冊のノート。

「昼休みに読むね」

にっこりと笑った美優に頷き返ししながら、尚輝は心臓がせわしく脈打つのを感じていた。

(昼休み……なら、余裕で間に合うな)

明日の放課後までに、彼女が尚輝の「告白」に気づけば、なんの問題もない。

と、考えたところではたと気づく。

「お前、明日は予備校あんの？」

「えっ、明日？ ううん、ないよ。今日は予備校だけど、明日は部活に顔出す予定」

そっか、と気づかれないように安堵の息を吐き出す。

「じゃあ、俺戻るから」

「うん、またね！」

そそくさと、美優の前から去る。

(あとは、明日の放課後を待つだけだ)

リレー小説。

いつものように、話の続きを綴った、その最後に。

尚輝は、こっそりと美優に向けたメッセージを書いた。

『好きです』と。それから、ちゃんと話がしたいから、明日の放課後に校舎裏で待ってるという旨を。

今日でなく明日にしたのは、万が一、美優が放課後までにノートを見なかったら、という危惧があったからだが、彼女は今日の昼休みに読むと言った。メッセージが彼女に伝わらないという事態は避けられそうだ。

体中が、そわそわと落ち着かない。

明日の放課後が、待ち遠しいような。それでいて怖いような。

誰に向けてでもなく大声で叫びたいような、そんな気持ちを抑えるために、尚輝は教室まで駆けた。

その日の放課後。

部活に集まったメンバーは、尚輝と洸、それから明日花の三人だった。

「風邪、まだ治ってないのか？」

明日花の鼻と口を覆う白いマスク。それから、時折小さく咳き込む音に、そう声をかける。

「ちょっとだけね。うつさないから安心してよ」

休んでいる間に出された課題なのか、彼女は手元に広げた教科書とノートに視線を落としたまま返事した。

「ノート必要なところあったら言えよ。見せてやっから」

彼女の正面の椅子が空いていたので、そこに腰掛ける。

「……ありがとー、でも大丈夫。……友達に、貸してもらったから」

答えてから、また小さく咳き込んだ。明日花の指が、教科書のページをめくる。

(……?)

なぜだろう。違和感があった。少し元気がないように見えるのは、風邪のせいだろうと思っていたのだが。

視線が、合わない。

人懐こい性格の明日花は、いつだって相手の顔を見て、目を見て、話す子なのに。

洸は、違和感に気づいているのだろうか。そう思い、傍らに座る彼の方に問うような視線を投げた。しかし、洸は気づいていないのか、尚輝の視線に小さく首を傾げただけだった。

何か、しただろうか。

思い当たるふしはまるでない。特に怒っているだとか、そういうわけでもなさそうだった。

(……まあ、いいや)

無視されているわけでもないのだし。はっきりしないのは嫌だが、問い詰めるほどの違和感でもないだろう。

さて、何をしようか。

明日花は課題をやっているし、洸は受験勉強をしている。自分もいい加減に勉強に本腰を入れるべきだろうか。それとも、気になる本でも読んでいようか。図書部らしく。リレー小説のノートは、今は手元にないわけだし。

そう考えを巡らせたところで、ふと思い出した。

「そういや、お前」

「え？」

呼びかけると、ようやく明日花の視線がこちらを向いた。

「あれ、なんであんな展開になっちゃったわけ？」

「？ ……ああ、リレー小説の話？」

「そう。いや、面白いから良いと思うんだけどさ」

明日花は、教科書をパタンと閉じてしまうと、一瞬何かを考え込むように視線を落として沈黙した。そして、顔を上げてそのまま窓の外を見やる。

「今ねえ、紅葉がキレイなの」

「へ？」

そういえば、主人公とヒロインは紅葉の木の下で再会したのだったか。

「……え、それだけの理由？」

「だって、あのジンクスをネタにするのは今の時期しかないじゃない？」

「ジンクス？」

なんだろう。上手く噛みあっていない気がする。

尚輝が瞬きを繰り返すと、こちらに視線を向けた明日花も同じように大きな目をパチパチとさせた。

「……この学校に伝わるジンクスの一つだね。校舎裏にある紅葉の木の下で告白して、成功すれば二人はやがて結婚するっていう」

会話を聞いていた洸が、横からそう説明を入れてくれた。

「へえ、そんなのあったんだ」

いかにも女子が好みそうな話である。

「……尚輝、知らなかったの？」

「お？ ああ、初耳だ」

明日花がやたら驚いているので、この学校の生徒なら誰でも知っているというぐらい有名な話なのかもしれない。洸も知っていたわけだし。

(……ん？ 校舎裏の紅葉の木？)

そういえば、と思い出す。

明日の放課後。美優に指定した場所も校舎裏だ。

もしも美優がこのジンクスを知っていたら。尚輝がそれを信じて、校舎裏を指定したと勘違いしてしまうのだろうか。

洸に「ロマンチスト」と言われた尚輝でも、さすがにそこまで少女的な思考を持ちあわせてはいないのだが。

「でも、なんで紅葉なんだろうな？ 普通はなんか、桜とか、そういうのじゃね？」

「単に人目につかない場所に植えられてるから、って理由じゃないかな。いかにも告白とかの定番になりそうな場所だからね」

洸の言葉に、心を読まれたのかと内心びくりとした。確かに、人目につかない場所だ。だから尚輝も校舎裏を指定した。

紅葉の木は、特別授業でしか使わない一番南の棟の、裏側にある。

「二人とも、夢がないなあ」

明日花がマスクの下から、少し呆れたような、不満げな声を出した。

「じゃあ、お前はなんで紅葉だと思うんだ？」

夢がある答えとやらを、聞かせてもらおうか。

挑発的に尚輝がそう問うと、明日花は再び視線を窓の外に走らせた。

「……紅葉の花言葉の一つにね、『大切な思い出』ってのがあるの」

大切な思い出。

その言葉を、尚輝と洸は口を揃えて繰り返した。

「告白の場所ってのは、大切な思い出の場所になるじゃない？ 大人になって、結婚してからもずっと」

だから紅葉なんじゃないかなあ、と明日花は窓の外に向けた目を細めた。

なるほど。

(夢のある答えだ)

明日花の推測が当たっているかどうかはわからない。しかし、ジンクスというからにはそれくらい夢があった方がいいだろう。

そのときの尚輝は、そう思ったのだ。

けれどその翌日。

尚輝は紅葉の花言葉を、皮肉に思う。

(『大切な思い出』、か……)

紅葉は、明日花の言う通り綺麗に色づいていた。見上げると、頭上に赤が広がる。その向こうに見える空も、赤く色づき始めている。もうすぐ、陽が落ちる。

美優は、来なかった。

尚輝が指定した場所に。校舎裏に。

(さすがにこれは、予想してなかった、なあ……)

木の幹に、背中を預ける。他人の気配は、ない。一人きりだ。

振られる覚悟はしていた。希望を抱いていなかったわけではないけれど、振られる可能性の方が高いだろうと、そう思っていた。

けれど、美優が呼び出しに応じないという可能性は、考えていなかったのだ。

(まだノートを見てない……？ いや、でも昨日の昼休みに読むつつってたしなあ……)

何らかの都合で予定が狂ってしまったのだとしても、尚輝はそのために一日の余裕を持たせたのだ。すでに目は通しているはず。

(……これは)

振られた、と考えるのが妥当だろうか。

(なんか、すっきりしねえなあ)

どうせ振られるなら、もっとちゃんと、彼女の言葉で聞かせて欲しかった。こんな、はっきりとしない形ではなく。

これは、『大切な思い出』にするには、苦すぎる。

ふう、と息を吐いて目を閉じる。風が冷たくなってきた。夜の気配は近い。

一枚の葉が、舞い落ちてきた。それは尚輝の肩に触れて、重みも残さないままに、地面に落ちた。

翌日。

もやもやとした気持ちを持って余したまま登校した尚輝は、もやもやとしたまま授業を受け、もやもやとしたまま昼休みを迎えた。

「……元気ないね」

いつも通り、昼食を持って訪れた尚輝を一目見て、洸はそう見抜いた。

「何かあった？ って、聞いていいのかな？」

洸になら、話してもいいだろう。もともと、告白するようにと背中を押してくれたのは、彼だ。

結果は、こんな中途半端な形に終わってしまったけれど、きっと気持ちを伝えられただけでも、良かったのだろう。

そう思って、口を開きかけた。その時。

「洸くん」

聞き慣れた声に、肩が跳ねる。

振り返った洸にワンテンポ遅れて、尚輝も声のした方を向いた。

「美優」

教室の裏側の扉から入ってきた彼女が、洸の席に近づく。いつもと、何ら変わらない様子で。

その手には、一冊のノートが。

「はい、これ」

「あ、書けた？ 相変わらず早いね」

洸に手渡されたそれは、紛れもなくあのノートで。

それが洸に渡るということは、つまり。

(美優は、確実にあのノートを見たということだ)

けれど、美優は来なかった。あの場所に。

(てことは、やっぱり……)

そういうことなのだろう。

現に彼女は、今も尚輝に対して何も言ってこない。洸の前だからか、いつもと全く同じ様子で振舞っている。

「じゃあ二人とも、また放課後にね」

社交辞令のようにそう告げて、美優は行ってしまった。

「……尚輝？ どうかした？」

「え？」

「顔、こわばってる」

眉を顰めた洸が、心配の色を声に滲ませて問いかける。しかし彼は、尚輝が何か言う前に、答えにたどり着いたようだった。

「……もしかして……」

ゆっくりと、目を見開く様子に、不思議と気持ちが緩んでいった。口元に微笑を浮かべられる

ほどの余裕が出てくる。

ただし、その笑みは自虐の類だったけれど。

「……ダメだった」

昼休みでざわつく教室内。誰も、尚輝と洸の会話を気にかける者はいない。

小さく呟いたその言葉は、洸にだけ届いたようだった。

「……そっか……」

それだけ言って、彼は俯いた。視線が、例のノートに落ちる。なんとなく、申し訳なさそうな表情をしているような気がした。

尚輝の背中を押したこと。悪いことをしたとでも思っているのだろうか。

「……後悔は、してねえよ」

普通は失恋した人間が慰められる側なんじゃないかなあ、と思いながらも、洸が気負わなくていいようにそう声をかけた。

そう、後悔をしているわけではないのだ。

ただ、消化不良なのが、気持ち悪い。

(……もっかい、ちゃんと話してみた方がいいかなあ……)

しかしどうにも気まずい。どのように接すればいいのだろう。

(……ヘタレだなあ……)

自分で自分が情けなくなるが、どうしようもない。そう簡単に自分の感情をどうこうできるのなら、苦勞はしない。

「……洸」

「ん？」

「俺、今日は部活休むわ」

洸は何かを言いかけて口を開いた。しかし結局、何も言葉を発しないまま、こくりと頷いただけだった。

今はまだ、美優と普通に顔を合わせられる自信がない。変な態度をとってしまいそうだ。

だから、少しの間。ちゃんと気持ちが落ち着いて、いつも通りに彼女と接することができるようになった、その時に。

もう一度、ちゃんと話をしよう。

その選択が誤りだったことに気付いたのは、一週間ほど経ってからのことだった。

彼女と顔を合わさないようにするということは、部活に顔を出さなくなるということだ。一週間も続けて部活を休んでいれば、顔を出しにくくなるのは当然だった。

洸とは昼休みなどで毎日普通に話している。そろそろ出てきたら？ と言われることはあるけれど、彼は部活の参加を強制したりはしなかった。

明日花も、全く顔を合わせていない。これまでは何かと洸のクラスに遊びに来ることも多かったのに、それもない。

千尋はもともと、部活以外で顔を合わせる事がほとんどなかった。そのため、自然と疎遠になる。

いい加減、なんとかしようとは思うのだ。けれど、事情を知らない明日花や千尋に、部活に顔を出さなかった理由を、なんと説明したらいいのだろう。

その日も最後の授業が終わりに近づき、放課後が訪れようとしていた。頭の中では考えがまとまらない。

けれど、いい加減に顔を出さなくては。

(リレー小説のこともあるし)

そう、尚輝一人の個人的な事情で、部員全員に迷惑をかけるわけにはいかないのだ。

チャイムの音が鳴り響き、自分を奮い立たせるように拳を握りしめた。

教師が出て行くと、生徒たちが席を立つ音で一斉に教室内が騒がしくなる。その喧騒に交じり、尚輝も席を立った。

今日こそは、部活に。そう思って、体を翻した。その目が。教室の中へ小走りに入ってきた、一人の少女の姿に釘付けになった。

体が、金縛りにあったかのように、硬直する。

「……良かった。尚輝くん、いた……」

尚輝の前で足を止めた彼女の長い髪は、少し乱れていた。チャイムが鳴ってから、五分も経っていない。授業が終わってすぐ、やってきたのだろう。

「……すぐ帰っちゃってるのかと思ってた」

そう言って美優は安心したような、それでいてどこか尚輝の顔色を伺っているような、そんな微妙な表情を浮かべた。

「あ……ああ」

声は出たものの、それは意味をなさない返事だった。

身構えていたほど動揺していないのが、自分でも意外だった。

「……あの……最近、部活来ないよね……」

美優は少し目を伏せた。

部活に顔を出さない尚輝を誘いに来たと、そういうことだろうか。しかし、「美優と顔を合わせづらかったから」などと、馬鹿正直に答えられるわけもない。

そもそも、彼女本人が誘いに来たのも、予想外といえれば予想外だった。美優の方は、尚輝に対して顔が合わせづらいだとか、そういったことは全くないのだろうか。

そう考えると、なんだかイラッとした。自分勝手なのはわかっているが。

「受験とかで忙しいのはわかってるけど、一週間も続けて顔を出さないことって、今までなかったから。でも学校には来てるみたいだし……何か、あったのかなって」

何か？

(何か、ならあったじゃないか)

それとも、彼女は尚輝が部活に来ない理由が、他にあるとでも思っているのだろうか。その程度、だったということか。美優にとって、尚輝のあの告白は。

なんだか急に、馬鹿らしく思えてしまった。

あんなに悩んでいたことが。

「……顔、出すよ。アレ、完成させなきゃいけないし」

美優の顔は、答えになってない、と訴えている。けれど、答える気にもならなかった。

彼女が尚輝を部活に誘いに来たのなら、これで目的は果たしたことになるはずだ。

「それでいいんだろ」

意図せず、突き放すような言い方になった。

美優が少し驚いたような表情を浮かべるのを視界の隅に捉えたが、彼女に背を向け、一人で教室を出た。

(馬鹿みたいだ)

美優の答えに少しでも期待していたことが。一人でぐるぐる悩んでいたことが。今、こうして彼女に子供みたいな態度をとっていることが。

全部全部、虚しいほどに馬鹿らしかった。

その後、美優に宣言した通り図書室に向かった。珍しいことに部員全員が揃っていて、洗などはようやく尚輝が立ち直ったと思ったのだろう、ほっとしたような表情を浮かべていたが。

やがて、少し遅れてやってきた美優と、尚輝は視線を合わせようとはしなかった。彼女が何か言いたげに、何度かちらちらと見遣ってくるのには気づいていた。

いつも通りに。美優は尚輝のことを、友達以上には思っていないのだから。いつも通りに友達として接すればいい。

そう理解はしていても、尚輝の本質的な部分は、とても臆病だった。避けるような、突き放すような態度や言動しかとれない。

そうして。

美優との間に流れるぎこちない空気を修復することができないまま、数日が過ぎた。

「話があるから、部活が終わったら時間ちょうだい」

放課後、部活の時間。本棚と本棚の間、他の部員に見えないようにこっそりとそう告げてきたのは、意外な人物だった。

とっさのことに尚輝は返事をする事が出来なかったが、相手はそれを肯定と受け取ったのか、もしくは否定は許さないという意味なのか。返事を受け取らないまま、すぐに本棚の向こう側へと姿を消してしまう。

借りて帰る本を選んでいた尚輝だったが、突然の呼び出しに自分がしていたことを忘れ、何も手に取らないまま席に戻ると、部員の一人にそのことを突っ込まれてしまった。

部活動の終了を告げるチャイムが鳴り、部員たちが次々に席を立つ。

「今日は尚輝の番だったね」

報告書、と言いながら洸が、カウンターの端に備え付けた小さな本棚から、バインダーを取り出した。

図書部の活動を始めて間もない頃に設置したその本棚は、部員たちが自分のおすすめの本を貸し出したり、毎日使う報告書の用紙をまとめて置いておくのに使ったりしている。

「おー、そういやそうだった」

「じゃあ、鍵も渡しとくね」

そう言って、報告書の用紙とともに図書室の鍵が尚輝の目の前に置かれる。これはもう定例化していることで、報告書を書く部員が鍵をかけて、顧問である坂本にまとめて提出することになっている。

よろしく、と言って鞆を手にした洸が軽く手を上げてドアに向かう。美優は今日、予備校で欠席だ。

続いて席を立った明日花が、棚の方に向かう千尋に気付いて声をかけた。

「あれ、千尋帰んないの？」

「ちょっと、本借りてから帰る」

ふーん、とさして気にした様子もなく、明日花もドアに向かっていった。

もちろん、千尋のそれが口実でしかないことに、尚輝は気づいている。尚輝と話をするために、彼女は二人きりになれる状況を作ったのだ。

報告書にシャーペンを走らせる。最初に記入者である自分の氏名。それから欠席者のところに、小山内美優と記す。

『最近読んだ本についての意見交換。卒業制作の進行。変わったことは』

変わったことは。

『特になし』

シャーペンをペンケースにしまったところで、背後から声がかかった。

「終わった？」

振り返るまでもない。今、図書室の中には二人しかいない。

「ああ」

尚輝がペンケースを鞆の中に入れていて、彼女が机に寄ってくる。けれど椅子には座らず、すぐ傍の大きな窓に寄りかかった。

千尋が立ち、尚輝が座っているからだろうか。腕を組んでこちらを見下ろす彼女は、睨んでいるというわけでもないのに、妙に威圧感があった。

「話して……」

どう切り出したらいいものかわからず、結局単刀直入に聞くことにした。千尋の顔色は変わらない。

「美優が、悲しんでたから」

やはり、と思った。話があると言われた時点でなんとなくわかっていた。

千尋と美優は、中学からの付き合いだと言っていた。千尋がこのタイミングで尚輝に話があるというなら、友人である美優に関する事だとしか思えない。

「……悲しんでた？」

「避けられてるって」

悲しんでいる。美優が。

露骨な態度をとる尚輝に、腹を立てるのではなく、悲しんでいる。なんとなく、彼女らしいと思った。

「どうして？」

彼女を避けている理由だろう。

千尋がそれを聞くということは、美優は彼女に何も話していないのか。

(それとも、美優自身が本当に理由をわかっていないのか)

そんな馬鹿な。彼女はそこまで鈍感ではないはずだ。

尚輝のためを思って、千尋に話さずにいるのだろうか。

(それはそれで、余計にみじめな気分になるな……)

ぐっと、手のひらを握り締める。

「別に……」

他の理由を考えようかとも思ったが、機転がきく方ではない。結局、下手なごまかし方になってしまう。

千尋は微動だにしないまま、何かを見透かすようにじっと尚輝を見ていたが、やがて窓に寄りかからせていた身を起こした。

「言いたくないなら、いいけど」

深く追求されなかったことに安堵したのも束の間。

千尋は机を挟んだ向かい側、尚輝の正面に立った。その見下ろしてくる視線は、先程のものとは違う。

明らかな、敵意を含んでいた。

「美優は、あんたと顔を合わせるのが辛いって言ってた」

部活が終わり、下校する生徒たちの声が窓の外から聞こえてくる。それに比べ、二人だけの図書室の中は静まり返っている。初冬の冷えた空気の、しんとした音すら聞こえてきそうだった。

「まあ、当然と言えば当然だよね。自分を避けるような相手に、顔を合わせたくないと思うのは」

千尋の口調は、明らかに尚輝を責めていた。

けれど、仲直りしろという風にも聞こえない。

「……何が、言いたいんだ」

それなら、なぜ千尋は尚輝を呼び出した。ただ責めるだけが目的ではないだろう。

彼女はすぐには答えなかった。ためらうというよりは焦らすように、ゆっくりと薄い唇を開く

。

「美優から、離れてほしいんだ」

離れる。

その言葉を、頭の中でゆっくりと噛み砕き、意味を理解する。

「……つまり、顔を合わせるなってことか？」

美優に近づくなと、千尋はそう言いたいのだろうか。

「……まあ、言ってしまえば、そうだね」

彼女はそっと視線を逸らした。

「……美優はさ」

千尋の声が、柔らかく、それでいて切ないものに変化した。それは些細な変化だったけれど、尚輝にははっきりとわかった。

「大切な友人なんだ。だから、あの子が傷つくことは、どんなことでも遠ざけたい」

どんなことでも。それがたとえ、ずっと部活動を共にしてきた尚輝であっても。それほどの想いで、千尋は美優を大切にしている。

中学時代からの友人。尚輝が知っている情報はそれだけで、二人の間にどんな絆があるのかは知らないけれど。

かなわない、と思った。

おかしな話だ。美優に、たとえば彼氏だとか、好きな相手だとかがいたのなら、そう思っても仕方なかっただろう。

けれど、友人である千尋によって、それを思い知らされるなんて。

(……その程度だったってことかな)

尚輝の、美優に対する気持ちは。

「……わかったよ」

零れた言葉に、千尋の視線がこちらに戻る。

「美優に近づかないようにする」

千尋の忠言を受け入れたというのに、彼女は表情をわずかに曇らせた。罪悪感でも感じているかのように。

「……けど、ひとつ頼みがある」

「……頼み？」

そう返ってくるとは予想していなかったのだろう。意外そうに千尋は瞬きを繰り返した。

「リレー小説の順番を、代わってくれ」

今、リレー小説のバトンは尚輝から美優に渡す順番になっている。けれど、美優に関わるなどということは、その受け渡しが出来ないということになる。

尚輝の個人的な理由で、卒業制作を台無しにするわけにはいかなかった。続けるためには、順番を変更するしかない。

千尋はすぐに、尚輝の言いたいことを理解したようだった。そして、無言で頷いた。

部の雰囲気は、あっという間におかしくなった。

洸にはりレー小説の順番の変更を告げなければならなかったし、そうなれば当然理由を聞かれる。千尋とのやり取りは話さず、ただ「美優と話しづらいから」ということで納得してもらった。

明日花は何も聞いてこなかったが、少し前から尚輝と美優の間に距離が出来ていることには気づいていたようだ。よく、二人に視線を走らせては居心地が悪そうにしている。

千尋とは、あれ以来まともに会話をしていない。そして当然、美優とも。

尚輝を中心として広がった波紋が、部員たちそれぞれの間には確かな距離を作ってしまった。

そのことに、途方も無い罪悪感を覚えていた。

(……言わなきゃよかった)

後悔はしてないと、以前洸に告げたが。今になって、その言葉を撤回する。

こんな風になるなら、想いを告げるべきではなかった。ただの友達として過ごすべきだった。けれど、どんなに後悔しても時は戻らない。

一人、静かな図書室の中でノートにシャーペンを走らせる。今日は、他の部員は全員欠席だった。

物語はクライマックスを迎えている。紅葉の木の下で想いを通じ合わせた主人公とヒロイン。彼らは走っている。見失った星を探して。

二人が探しものを見つけて、ハッピーエンドを迎える。おそらくそれが、部員たち全員の思い描いているこの物語の結末だ。

見つけられるだろうか。

物語の話ではない。尚輝は、尚輝たちは、ハッピーエンドを迎えるための鍵を、手に入れることができるだろうか。

とても単純なきっかけで、複雑に広がってしまった距離を、埋めることができるだろうか。

卒業式は、もう三ヶ月後にまで迫っていた。

「尚輝ー！ お疲れー！」

週明けの朝一番。教室内に足を踏み入れた尚輝に、親しい友人たちから声がかかる。

「どうよ、手応えの方は？」

「んー……余裕じゃね？」

「うっわ、ムカツク！」

自分の席に向かいながら、そんな会話を交わす。

昨日は、尚輝が志望する大学の入試試験だった。多くの同級生が受験勉強に励む中、彼らほど必死に勉強したわけではなかったが、尚輝は言葉通り余裕を感じていた。

自分の席につき、鞆を机の横にかけた。一限目はなんだったか、と考えたところで、ふっと目の前に影が落ちた。

顔を上げると、一人の少女が厳しい顔つきで立っていた。

「あ……」

こうして正面から顔を見るのは、久しぶりだ。最近では、部活に行く日すら彼女と被らないように気をつけていた。

「尚輝くん……今日、部活のあと、時間ある？」

美優は、いつかの千尋と同じようなことを言ってきた。

けれど、尚輝は答えられない。近づかないと宣言してあったし、最初から今日は部活に顔を出さずにそのまま帰るつもりでいたのだ。今日は美優の予備校がない日、つまり彼女が部活に来るであろうことが予測できたから。

美優は始めから、尚輝の返事を期待していなかったのか、答えを待たないまま再度口を開く。

「ちゃんと、話がしたいの。……図書室で、待ってるから」

尚輝が部活に出ないつもりでいることも、ある程度予測していたようだ。

一方的に告げると、やはり尚輝の返事を聞かないまま、彼女はすぐに踵を返して教室を出て行ってしまった。

終始、険しい表情をしていた。

『ちゃんと、話がしたい』

話というのは、なんだろう。何についてのことだろう。

最初の告白のことか、その後に彼女を避けたことか、リレー小説の順番を千尋に変わってもらったことか、ぎくしゃくとした部員たちのことか。

美優が、何について話そうとしているのだとしても。

『美優に近づかないようにする』

そう、約束したのだ。千尋に。

呼び出しに応じるべきなのか、そうしないべきなのか。答えが出ないまま、時間だけが過ぎていく。

授業も頭に入らず、冴とともに昼食をとっているときも「ぼーっとしてるね」と言われる有様だった。

もし、呼び出しに応じなかったとしたら。尚輝は、あの日の美優と同じ行動をとることになる。

あの日から、よじれてしまった。

尚輝がここで美優とちゃんと話をしなければ、さらによじれていくのではないだろうか。そう危惧する思いもある。

けれど、やはり頭の隅に引っかかるのは千尋のことだ。

美優を傷つけるものから遠ざけたいと、千尋は言った。尚輝が今日、美優と何らかの話し合いをしたとして、彼女を全く傷つけない自信があるとは、言い切れなかった。

呼び出しに応じなかったことを、今更ながら詰ってしまうかもしれない。不用意な言葉で、彼女を傷つけてしまうかもしれない。

そう考えると、やはりここは千尋との約束を守るべきではないかと思ってしまうのだ。

呼び出しに応じなかったとして、彼女は腹を立てるかもしれない。けれど、卒業まで残り三ヶ月。しかもやがて訪れる冬休みに加え、一月末の定期試験が終わってしまえば、卒業式まではもう学校に来る必要がない。

今までの通り距離を置いて、そして卒業してしまえば、このぎくしゃくとした関係からは解放される。

そうして、遠い未来にもしかしたら、そんなこともあったねと、笑って会えるようになる日が来るかもしれない。

そんな日が来るかはわからない。願望だ。卒業して、それきりかもしれない。それなら、それでも仕方ないと思える。

一日の授業の終わりを告げるチャイムが鳴る。

尚輝はしばらく席に座っていたが、やがて教室から人気がなくなった頃に、ようやく腰を上げた。

部活のあと、と美優は言った。まだ二時間以上ある。

けれど尚輝の足は、そのまま昇降口に向かった。家路につくために。

(ごめんな、美優……)

あの日、紅葉の木の下で待ちぼうけだった自分を思い出すと、やはり胸が痛んだ。同じ状況に彼女を置き去りにすることに。

けれど、それが一番良い選択に思えたのだ。

その時は、確かに。

翌朝。

いつものように、学校に行く準備をしていたところに、いつもとは違う知らせが飛び込んできた。

歯を磨いて顔を洗い、制服に着替えているときに、机の上に置いていた携帯電話が着信を示した。

(.....こんな朝っばらから?)

しかも、メールではなく着信。何か、緊急の用事だろうか。上着を羽織ると、二つ折りの携帯電話を開いた。

液晶画面に表示されていた名前は。

「.....千尋？」

美優に近づかないと宣言をしたあの日以来、彼女とも会話らしい会話などした覚えがないのだが。

頭が疑問符で埋め尽くされたまま、通話ボタンを押した。

「.....もしもし？」

掠れたような呼吸が二、三度聞こえてきた後、ようやく千尋の声が返ってきた。

『.....もしもし.....』

その声から、尋常でないものを悟る。

彼女の声は、聞いたことがないほど掠れていた。その声も、ようやく搾り出した、というようなものだった。

「ちょっ、何があったんだよお前...っ？」

何か、何かあったのだ。彼女が再び口を開くのを、根気よく待つ。

やがて。

『.....今朝、美優のおばさん、から.....電話、あったんだ.....』

千尋がつかえながらも、ようやく話し出した。

嫌な予感に、頭の奥の方が、急速に冷える。

『美優が.....死んだって.....』

\*\*\*

瞼を開くと、長い夢から覚めたように、ぼんやりと現実がやってくる。

駅前の喫茶店。落ち着いた音楽と、コーヒーの香り。大きなガラス窓を歩き交う人々。その中に、見知った姿はまだ見当たらない。

頼んだコーヒーからは、未だに湯気が立ち上っている。眠っていたかとも思ったが、どうやら過去を思い返すのに、そこまで時間はかかっていないようだった。

あの日。

まさか、教室で顔を合わせたのが最後になるなんて、思いもしなかった。美優は、下校途中に

交通事故に遭い、そのまま命を落とした。

下校したのは、いつもよりも遅い時間だったという。心配してメールした家族に、「今から帰る」と返信して、それきりだったそうだ。

彼女の帰りが遅かったのは、間違いなく尚輝が原因だ。待っていたのだ。ずっと。一向に訪れる気配のない尚輝を、それでも。

それを示すかのように、その日の報告書の記入者は美優になっていた。図書室の鍵を手にして、いた彼女は、学校が閉まるその時間まで待つことができた。

もしも、尚輝が彼女の呼び出しに応じていたら。美優は、もっと早く帰ることができた。送って行ってやることだってできた。そうすれば、事故にだって遭わなかったかもしれない。守ってやれたかもしれない。

それは、ずっとずっと尚輝につきまとう後悔だった。忘れたくても、忘れられない。忘れてはいけないことだった。

それでも、その後悔に苛まれる苦しみから逃れるように、なるべく過去を思い返さないようにして、ここまで生きてきて。

そして今、久々に高校時代を振り返ることになった。鞆の中に入った一冊の本。内容は、あ那时的自分たちによって綴られた物語。

部員たちに確認してもらったところで、本当にこの本の存在の謎が解けるのかはわからない。だが、全員が見るべきだと思ったのだ。

「……尚輝」

意識を鞆に向けていたせいで、名前を呼ばれるまで、その存在に気づけなかった。

振り返ると、記憶の中よりも少し大人びたように見える、一人の人物の姿があった。

「……明日花……」

名前を呼ぶと、明日花はなんとも言えない、ぎこちない微笑を返した。

「……久しぶりだね」

そう言って彼女は、目の前の席に腰を下ろした。

ちらりと時計を確認すると、待ち合わせまでまだ三十分近くある。

「……早いな」

「そっちこそ」

すぐに水を持ってきた店員に、明日花は温かいミルクティーを注文した。

そのまま、明日花は頬杖をついて窓の外を眺め始めた。漂う沈黙に重苦しさを感じながらも、彼女のその姿が、かつて紅葉の花言葉を語ったときのそれに重なり、目を細める。

「……ここに来るまでね」

あの頃より幾分か落ち着いた調子で、明日花が口を開いた。

「二時間くらいかなあ、それくらいかかるの。電車でね」

「……そんなに遠かったっけ」

「うん」

明日花は、どこの大学に行っていたのだったか。今更になって思う。この街を出たことしか、

知らなかった。

そんなことしか、知らなかったのだ。

「……電車の中って、暇だから。色々、思い出してたの」

「……色々？」

「そう、色々」

お待たせしました、という控えめな女性店員の声とともに、ミルクティーが運ばれてきた。

机の上に置かれたそれが、柔らかい色で波紋を作る。

「昔のこと」

審判部な面々

諸星崇

## あらすじ・登場人物

---

### ○あらすじ

日下部公平は、全国大会出場経験もある元エースピッチャー。しかし、肩の故障で野球をあきらめざるを得なくなった。進学先で公平は、「審判部」を率いる風間凜と出会う。あらゆる競技の審判を務める部活で、公平はスポーツをはじめ、さまざまな競技や種目に、審判として関わることとなった。

### ○登場人物

#### 日下部公平（くさかべ こうへい）

審判部の部員。元野球少年で、スポーツ全般が得意。大好きな野球に、審判として関わる道を選ぶ。

#### 風真凜（かざま りん）

審判部の部長。判断力に優れ、つねに威風堂々としている強気な女性。致命的な「ルール音痴」。

## 第二話 キミが見るもの

## 1 美術に判定を

午後三時。

重苦しい沈黙を守っていた教室の空気は、鐘の音を合図に一気に弛緩する。

「起立、礼」

堅物のクラス委員長の号令も、心なしか張りがあるように聞こえる。無理もない。ここから先は、学生たちが机とイスと教科書の呪縛から解放される、つかの間の自由時間。

放課後の始まりだ。

「あ、あの、日下部（くさかべ）くん。ちょっといい？」

「ん？」

開放感とざわめきの中、公平（こうへい）はか細い声に呼び止められた。

ノート類をかばんに突っ込む手を止めて振り返る。肩の高さに、小さな顔があった。

「水沢（みずさわ）？ なに？」

めずらしい相手だと思った。クラスメイトの水沢瞳（ひとみ）。長くてつやのある黒髪をなびかせた、細身で色白の少女だ。

けっこうかわいいと、男子の間では評判なのだが、本人が極度の引っ込み思案で、自分から誰かに話しかけることが非常に少ない。

女子にはまだ、親しい友人がいる。しかし、男子でまともに会話ができる者はクラスにもいないはずだ。

公平も、部活も帰る方向もちがう。おそらく、瞳のほうから話しかけられたのは初めてだ。緊張しているのか、瞳の肩は見るからにこわばっている。

「あの、日下部くん、たしか審判部だったよね」

「そうだよ」

他の友人と接するときと同じように、公平はつとめて気楽に答えた。もちろん、自分が所属するクラブの名前を聞きとがめるようなこともなかった。

審判部。

他の学校なら耳慣れない言葉だろうが、この東雲学園（しののめがくえん）高等部の生徒は普通に口にする名前だ。あらゆる競技、勝負において、進んで審判を務めるという、風変わりな部活動である。

公平もその一員で、今日も昼休みに友人同士の弁当の早食い対決で判定を下した。週末には剣道部とバドミントン部の試合の審判を頼まれている。

これでも審判をさせれば学園随一と、少しは名の知られた団体なのだ。腕前も信頼されている。

入部から二ヶ月ほど経つと、公平もその審判部の新たな部員として、まわりに認知されるよう

になっていた。

「その、審判部さんに、ちょっとお願いしたいことがあって」

「？ 水沢って、運動部だっけ」

線も細ければ、声も細い。うかつに肩も叩けそうにない瞳が体育会系のクラブ活動をしているとは、公平にはちょっと思えなかった。

問い返すと、瞳は首を横に振る。

「ううん。わたし、美術部」

「美術部？」

公平の頭の中に、瞳をはじめとした生徒たちがイーゼルとキャンバスをならべて、美術室で絵を描いている情景が浮かんだ。

瞳がその中にいると、それこそ絵になる。もの静かに絵筆を動かす姿は、あまりにもぴったりだ。

誰かと競い合い、そこに第三者による判定を求めるような場ではないだろう。およそ、審判部とは関係のなさそうなクラブだが、瞳が冗談を言っているようには見えない。そもそも、そんな性格ではない。

「まあいいや。ちょうど今から部活行こうと思ってたから、部室で聞くよ。先輩もいるだろうし」

審判部は、とにかくなんでも判定するという、活動範囲の広い部活だ。家庭科部や放送部に入りすることもある。公平の知らないところで、美術部に関わる活動もしているかもしれない。

そういうことなら、一年生の公平より、先輩に話したほうがいいだろう。瞳をつれて、公平はクラブ棟の一室に向かった。

ノブのついたシンプルなドア。その上に、「審判部」と堂々と掲げられたプレートがある。最初は見るたびに不思議な気分になった公平だが、今は自分の部屋と同じ感覚でノブをひねることができた。

「やあ、来たか」

こざっぱりとした部屋の中央に、大きなテーブルが鎮座している。そこにかけた長い黒髪の女子生徒が、手にしていた文庫本を閉じた。

「ちわっす、凜（りん）さん」

「こんにちとはと、きちんと言え。来客か、日下部？」

すらりと立ち上がった姿は、公平より拳ひとつほど背が低い。しかし、堂々と胸を張っていて、身長差をほとんど感じさせなかった。制服のラインの色は、公平より一つ上の学年を表している。

凜はそのまま、公平と瞳のほうへ歩いてきた。さっそうとした歩調が、さわやかな風を生む。黒髪が、きれいになびいた。

「風真（かざま）凜だ。審判部の部長を務めている。よろしく頼む」

はっきりとした声が、心地よく耳に響く。その名のとおり、凜とした声音だった。瞳が緊張気味の声で答える。

「あ、あの、水沢瞳です。日下部くんとは、同じクラスで」

「そうか。うちの部員が、いつも世話になっている」

そう言うと、凜はすっとしなやかな手を差し出した。吸い寄せられるように、瞳がその手を取る。細い手を軽くにぎって、凜はふっと微笑んだ。

「水沢は、たしか美術部だったな。なるほど、繊細できれいな手だ」

「いえ、そんな……」

瞳が熱にうかされたように、ぽーっと凜を見つめた。それを見つめ返す凜の姿は、そのへんの男優より、よほど絵になっている。

なんだか公平のほうが、その場にいるのがいたたまれなくなってしまった。

「水沢のこと、知ってるんですか、凜さん？」

「高等部生徒の所属先なら、すべて記憶している。たまに、だまって部外者を試合に連れてくる不届き者がいるからな。不正の予防だ」

公平の問いに、凜はさも当然のように答えた。なんでもないことと受け止めかけた公平だったが、すぐに思い直す。

東雲学園は有数のマンモス校だ。高等部だけでも、生徒は合わせて一万人に達する。その全員の名前と所属先を記憶しているなど、並大抵のことではない。

けた外れの判断力と感覚の鋭さを持ち、部長として審判部の名前を知らしめている凜だが、それ以外にも底知れない部分を持っている。公平はひさしぶりに、その一端を垣間見た気がした。

「それで、日下部。彼女の用件は聞いたのか？」

まだ少し、心ここにあらずといった感の瞳を座らせて、凜が言う。公平は三人分のお茶を用意してテーブルに戻った。

「そうでした。水沢。うちになんか頼みがあるって言ってたけど」

それぞれの前にマグカップを置き、公平もテーブルにつく。そこで改めて、疑問を口にした。

「けど、美術部で審判がやることなんて、なんかあるの？」

「べつにめずらしいことではない。私も出向いたことがあるぞ」

横から凜が答える。公平が視線で問いかけると、歯切れのいい言葉が返ってきた。

「絵画や音楽、演劇なども判定の対象になる。週末ともなれば、どこかで何かのコンクールが開かれているだろう。芸術系の分野は『審査』と言われるがな。審判部はそれもあつまっている」

いまいち理解しきれない公平に、凜はこう続けた。

「キミの場合は、フィギュアスケートや新体操をイメージすればわかりやすい」

「あ、そっか。審判が芸術点を出しますね」

中学時代、公平はシニアリーグに所属する野球少年だった。それ以外にも、スポーツ全般に親しんできたため、審判部では主にスポーツ競技の審判をしている。

なので、審判と言われると、どうしても運動系の種目が頭に浮かぶのだ。

だが、たしかに凜の言うとおりの、芸術性を競うスポーツの種目もある。技術や正確さだけではなく、美しさという特殊な観点から点数、優劣がつけられる競技だ。その判定は、もちろん審判の仕事である。

「文化祭では、美術部が絵画や彫刻のコンテストを開催する。その審査役を頼まれるのも毎年の

恒例だ」

「そういや、麗華（れいか）さんがそんな話、してましたね」

公平の背中を一筋、冷や汗が流れた。

公平がスポーツにくわしいように、審判部には芸術系の分野に精通している部員がいる。花園（はなぞの）麗華とって、凜の同級生だ。彼女は吹奏楽部や演劇部から採点を頼まれることがある。

ただ、今は家の用事とかで、ローマだかパリだか、あのあたりにいるはずだ。

「あいつのことはいい。今はいないのだし」

「あ」

むすっとした凜の顔を見て、公平はもう一つ、失態に気づいた。麗華の名前を出すと、凜の機嫌が悪くなるのだ。

それ以上、凜を刺激しないよう、公平はそそくさと瞳に話の先をうながした。

「実は今度、部員の子とわたしで、絵のできを比べることになったんです」

マグカップを両手で包んで、瞳がぼつぼつと語り出す。

美術部は総勢十人あまり。大所帯ではないが、そのぶん、美術が好きな人ばかりが集まっている。

瞳も絵を描くことが好きで、美術部の門を叩いた。決して自慢ではないが、彼女はこれまで、いくつか賞を取ったこともある。

ただ、瞳自身は、それを言われることはあまり好きではないらしい。

「わたしはただ、好きで絵を描きたいだけなんです。それが評価されるのはうれしいけど、されないならべつにいいんです。でも、中には、そういうのが気にさわっちゃう人がいるみたいで」

入選や佳作を取ったことがあるということで、瞳は美術部の先輩たちによくその話をされた。先輩に悪気があったわけではないだろう。ただ、瞳の力量をたたえていただけだ。

だが、それが瞳と同じ一年生を刺激してしまった。先輩が瞳をひいきしているように思われてしまったのだ。

そして、一人がとうとう、どちらの絵がすぐれているか、瞳に勝負を挑んできた。

瞳は断りたかったのだが、相手はおさまらない。先輩たちも、原因の一端が自分たちにあるため、強く出られない。結局、困った先輩たちから瞳に、その勝負を受けてくれという話が出てきてしまった。

先輩にまで頼まれてしまうと、瞳の性格では断りきれない。こうして、瞳は勝負を受けることになったのである。

「つまり、その勝負の審判をやってくれってこと？」

公平が聞くと、瞳はなんとも複雑な表情に変わった。ためらいがちに小さくうなずき、そして口を開く。

「うん。そうなんだけど、それだけじゃなくて……。そのとき、わたしが負けることにしてほしいの」

思いがけない言葉に、公平は思わず目を見開いた。

凜を見ると、こちらも形のいい眉をひそめている。瞳は公平たちの返事を待たずに、続きを話

した。

「これ以上、みんなとぎすぎすした関係になりたくないし、それで丸くおさまるならいいんです。わたし、勝ち負けには興味ないから。野上（のがみ）さん、その相手の子なんですけど、彼女の気が済むなら、それでいいですから」

これは、公平が審判部に入って以来、はじめてのケースだった。

いろいろなところで審判をする審判部だが、それらはすべて、公正な審判として出向くものだ。あらかじめ結果を決めた、いわゆるできレースを仕切るようなことはない。

さすがにこれには、公平も困惑した。

「とりあえず、オレはそういう芸術系の審査なんてやったことないんだけど」

そう言って、凜のほうを見る。審判部の部長だけあって、凜はどんな分野であろうと審判を務めることができる。それだけの知識や経験はあるからだ。

実はわけあって、スポーツの審判はさせられないのだが、絵のできばえを比べるのなら問題はない。凜なら的確なジャッジを下してくれるだろう。

だが、当の凜は渋い顔をしていた。

「すまないが、私は不正には手を貸せない」

きっぱりと言い切られる。なんとなく、公平はこの答えを予想していた。公正を旨とする凜が、瞳の話を受け入れるとは思わなかったのだ。

「部内のことなんだし、どうにかなりませんか？」

「ダメだ。審判は公正な立場でいなければならない」

一応、聞いてみるが、凜の答えは変わらなかった。

「そう、ですか……」

瞳が肩を落としてうつむいた。悄然とした姿は、見ていて痛々しい。どう考えても、瞳は他人と争うことなど苦手な性格だ。悩み抜いた末に、今回のことを公平に頼みに来たのだろう。真つ当な頼みではないことぐらい、瞳が一番よくわかっているはずだ。

これがスポーツの判定なら、公平はほとんどの競技のルールを知っているし、その取りあつかいも心得ている。凜に頼まなくても、なんとかなるかもしれない。

だが、芸術系の分野は、公平にはとんと縁がない。知識も何もないのだ。絵の良し悪しを判定しろと言われても、どこをどう見て判断すればいいか、見当すらつかない。

(けどなあ……)

目の前では、瞳がこれ以上ないほど落ち込んでしまっている。今にも泣き出しそうだ。ここで凜と同じように、ダメだと突き放すことは、公平にはできなかった。

男のさがとして、女の子の涙には、どうしても勝てないところがあるのだ。

「わかった。オレがやるよ、審判」

気がつくのと、公平の口からは、その言葉がこぼれ出ていた。

「日下部！」

「いや、だって、放っておくわけにもいかないじゃないですか」

声を荒らげる凜に、公平は腰を引きながらも抗弁する。

「私だって、放っておけとは言わないが……」

「ですよ？ だったら一回だけ。一回だけ見逃してください。凜さんに迷惑はかけませんから。お願いします！」

少しだけ凜が引いたところを、かさにかかってとにかく頼み倒す。苦りきった顔をした凜が、なおもダメだとくり返す。

「私のことはどうでもいい。その一回がいけないのだ」

「なんとかなりますって。水沢を負けさせるだけなんですから」

「手段の話ではない」

根比べになった。凜が正論なのは、公平もわかっている。しかし、ここで瞳を見捨てることはできない。どうにか凜に折れてもらうしかないのだ。

と、そのとき、か細い声が公平の耳に飛び込んだ。

「いいの、日下部くん？」

すがるような目で、瞳が公平を見ている。公平はとっさに返事ができなかった。瞳の目は、まるで公平以外に頼る人がいないとでも言うかのようだ。

その横では、凜が燃えるような目で公平のほうを見ている。

眉根を寄せ、我ながら情けない顔をしていることを自覚しながら、公平は目を閉じて答えた。

「いいよ」

「日下部！」

とうとうイスを蹴立てて立ち上がった凜に、公平はおがむように両手を合わせた。もうとにかく平身低頭して、許してもらうしかない。

ところがその手を、すっとのびてきた細い手が、すっぽりと包み込んだ。

「ありがとう！ ありがとう、日下部くん！」

「えええっ!？」

感激に目をうるませた瞳が、公平の手を取って、身を乗り出してきたのだ。

あわてて振りほどこうとしたが、瞳は意外なほど強い力で公平の手をにぎっていて、離してくれない。そして、涙を浮かべた目で公平のことを一心に見つめてくる。

「あ、いや、その、たはは……」

公平は思わず、かわいた笑い声をもらした。振りほどこうとした手から力が抜ける。瞳は手を離さない。むしろ、胸元に引き寄せて、祈るように額を当ててきた。

指に伝わる瞳の体温に、公平の心臓がはね上がる。が、次の瞬間、公平の背筋に猛烈な悪寒が走った。

振り返ると、凜がまなじりをつり上げて、ものすごい目でこちらをにらんでいた。

「……わかった。ならば、もう言わん。好きにしろ。ただし、どうなっても私は知らないからなっ！」

そう言って、どかっとイスに腰を下ろす。それっきり、凜はほおをぱんぱんにふくらませてそっぽを向き、一言も口を聞いてくれなかった。

瞳はずっとお礼を言っている。だが、公平はなんだか、無性に泣きたくなった。

## 2 うそつきは騒動のはじまり

美術室の片隅から飛んでくる視線が、どうしようもなく痛い。

普段より三割増しで険しくなった凜の目が、公平のことをじーっと見つめている。もともと切れ長できれいな目をしているため、そうやって強く見つめられると非常に怖い。公平は思わず、視線をそらした。

「日下部くん、ごめんね。よろしくね」

「うん、まあ、なんとかする」

心底申し訳なさそうな瞳に、公平は引きつるほおを無理やりゆるめて笑ってみせた。

公平はある意味、瞳の助っ人なのだ。不安にさせるわけにはいかない。それに、その瞳のことを、やはり美術室の中でじっとにらみつめている姿がある。

今回の瞳との勝負を挑んだという、美術部員の野上かな子だ。公平とも学年は同じだが、クラスがちがうので話したことはない。勝ち気そうな目は、瞳をとらえたまま離さなかった。

美術室には、他の部員たちも集まっている。だが、かな子の放つとげとげしい空気にあてられて、瞳にもかな子にも近づかない。

かな子からの視線は瞳も感じているようで、ときおり、ちらちらと不安そうにかな子のほうをうかがっている。

ただでさえプレッシャーを感じている瞳に、公平が追い討ちをかけるようなまねをするわけにはいかなかった。

「じゃあ、そろそろ始めます」

公平が開始を宣言すると、室内の雰囲気ぴしっと引きしまった。瞳とかな子が、それぞれ緊張した面持ちでならんでいる。公平はそっと深呼吸をした。

「まずは、水沢さんの作品です」

瞳の絵は、東雲学園の校舎とグラウンドを描いた風景画だった。

夕暮れどきのかたむいた日の光の中で、生徒たちが思い思いの場所に立っている。サッカー部が練習をし、陸上部がランニングをする。演劇部が大道具をこしらえ、天文部が天体観測の用意をしている。そして、家路に就く者もいる。

今日も窓の外で当たり前のように行われている、放課後の光景だ。今にもキャンバスの中から、グラウンドの喧騒が聞こえてきそうだった。

(すげえな)

単純に、公平は感心した。絵心など皆無に等しい公平からすれば、瞳の絵は雲の上のレベルだ。そっくりそのまままねをしても、こんなふうには描けそうもない。

この上、受賞歴があるのなら、美術部の先輩たちが話題にする気持ちもよくわかる気がした。

「続いて、野上さんの作品です」

公平に言われ、今度はかな子が前に出て、イーゼルの上にキャンバスを置いた。こちらは花瓶に活けられた、バラの花束の絵だった。

あざやかな赤い花卉が目まぶしい。瞳の作品は美術室の中に溶け込むような印象だったが、かな子のそれは対照的に、はっきりと存在感を主張しているように感じる。

(これはこれで、充分すごいんじゃないのか?)

公平の目には、瞳もかな子も、どちらも上手く描けているように見えた。勝敗をつけろと言われても、これは困る。

瞳の絵に、空を飛んでいる人がいたり、かな子の絵に根が描かれていたりすれば、まだ判断の基準になるかもしれない。だが、当然だが、そんな明らかなミスは見られない。

結果は、かな子の勝ちだ。ただ、それは事前に公平がそう決めているからだ。理由を問われたとき、公平は明確に答える自信はない。

(やばい……)

背中に冷たい汗がにじむ。いまさらながら、判定に根拠を持ってないことに、公平はあせりを感じた。

野球できわどいプレーがあったとき、公平の目にもプレーの全容がよく見えないときがある。だが、そのときでも公平は、アウトなりセーフなりの判定を下すことができる。一連のプレーを見て理解したという確信が、自分の中で判断を支えてくれるからだ。

ところが、今はそれが無い。公平は、かな子の作品が瞳の作品より勝っていることを理解できない。判断を支える柱が造れないのだ。

その上で判定を下すことが、公平にとてつもないプレッシャーとしておそいかかった。

「日下部くん？」

「どうしたの？ 早く判定してよ」

瞳とかな子が公平を見る。美術部の部員たちも、公平に注目する。当然だ。公平はこの場を取り仕切る審判。公平の言動で、この勝負は決するのだから。

口の中が、からからに渴く。のどがひりついて、声が出ない。あせりが加速する。

と、そのとき、美術室の入り口が高く張りのある声とともに開いた。

「ごきげんよう、みなさん。おじゃまいたしますわね」

目をみはるようなブロンドの髪をなびかせて、二年生の女子生徒が入ってくる。他の女子と同じデザインの制服を着ているのに、華やかさは倍増していた。香り立つように堂々とした姿は、まるで大輪のバラのようだ。

手には大振りの羽扇子まで持っている。

「麗華。帰ってきたのか」

「え、麗華さん？」

「ごきげんよう、凜、公平。美術部のみなさまも。公平がこちらで審美の判定を下すとうかがいましたので」

麗華と呼ばれた女子生徒は、全員の前で優雅におじぎをしてみせた。そのしぐさもまた、華々しく目を引きつける。ていねいな物言いだが、凜とはまたちがう自信と威厳が満ちていて、女王然とした雰囲気を感じさせた。

それもそのはず。彼女は花園グループという、傘下に複数の多国籍複合企業体、いわゆるコン

グロマリットを抱える超大富豪・花園家の直系のお嬢様なのだ。

それがなぜか、凜にライバル意識を燃やしており、審判部という変わった団体に所属している。今回はグループの海外視察とかで不在だったのだが、帰国していたらしい。

「まったく。水くさいですわ、公平。こういうことならわたくしに任せておきなさい」

麗華が羽扇子を広げて、自分の顔を軽くあおいだ。華やかな香水の香りが広がる。凜のほうに軽く流し目を送って、麗華はこれ見よがしに胸をそらせた。

「審美眼でしたら、凜にもおくれを取ったりはいたしませんわよ」

ぴくりと眉をはねさせた凜だが、反論しない。麗華の言葉が事実だと認めているからだ。

審判部の部員たちは、それぞれに得意としている担当分野がある。凜はなんでもこなしてしまうが、公平は基本的にスポーツ以外ではあまり表に出ない。

そして、麗華が得意としているのが芸術系の種目での判定だ。家柄や育ってきた環境のためか、麗華は芸術に関する造詣がすさまじく深い。

当然、絵画に関してもくわしい。

「こちらの作品かしら。あら、なかなかみごとな腕前ですわね」

瞳の絵に目をとめた麗華は、そのまま有無を言わず画面に見入った。

「いい風が吹いていますわ。光との調和もよく取れていますわね。……少し甘酸っぱいかしら。けれど、それも味のうちですわ」

あれこれと見る角度を変えながら、麗華が感想をつぶやく。そこには、公平にはさっぱり理解できない言葉がならんでいた。

公平からすると、瞳の絵には、上手い、きれいなどという表現しか出てこない。だが、麗華の口からは、明らかに絵を見るだけではわからないはずの感想が出てきている。

「香りはあまり強くないようですわね。そこは今後の課題でしょう。あら、ここはなめらか。…なるほど、これはおもしろい工夫ですわ。ずいぶんつやが出ますのね」

離れて見たり、近づいて見たり。手をかざし、首をかしげ、ときにはまぶたを伏せて、麗華は瞳の絵を評価した。

公平は口をはさむ間を失う。公平とは根本的に、絵の見かたからしてちがった。

「もう一枚はこちら……」

そう言い、かな子の作品に目を移しかけたところで、麗華が凍りついたように固まった。

「？ 麗華さん？」

公平の呼びかけにも、返事はない。ただ、麗華の視線は、瞳の作品を見ていたときとはちがって、やけに冷たかった。一言も感想を口にしないし、表情も能面のようにになっている。

なんだか様子がおかしい。麗華はじっとかな子の作品を見つめたまま、公平に向かって言った。

「公平。この二枚を比較しますの？」

「はい。さっきのが水沢。こっちが野上の絵です」

「そう。でしたら比べるまでもありませんわ。水沢さんの勝ちです」

あまりにあっさりと言われて、公平は最初、何を言われたかわからなかった。

が、次の瞬間、公平、瞳、かな子がそろって顔色を失った。麗華は涼しい顔のまま、淡々と続

ける。

「雲泥の差ですわ。一目瞭然ではありませんこと。横にならべられて恥ずかしいと思わないのなら、野上さんはどうかしていますわね」

かな子の表情が、音がしそうなほどこわばった。公平はあわてて割って入る。

「ちょ、ちょっと麗華さん！ ダメですって！」

「何がダメですか？ 公平、あなたの目は節穴ですか。よくご覧なさい」

「いや、そうじゃなくて……」

ここは水沢が負けることになっているんです。などと、こんな場で言えるわけがなかった。

明確な言葉が出て来ずに、公平はうろうろと両手をさまよわせる。それはまるで、言いたいことがあるくせに、必死に言葉をにごそうとしているように見えた。

事実、そのとおりだったのだが、麗華はそれをまったくべつの意味にとらえた。

「ははあ、さてはわたくしの目に狂いがあると、そうおっしゃりたいのかしら？」

ざらりと、麗華の目が光る。公平の脳裏をいやな予感がかすめた。

麗華は人一倍、プライドが高い。自分の判定には絶対の自信を持っている。けちをつけられて黙っているような人ではない。ましてや、後輩にそうされて、平常心でいられるわけがない。

公平が止める間もなく、麗華は羽扇子をバツと広げて声を張り上げた。

「よろしいでしょう！ 説明してさしあげますわ。野上さんでしたわね。あなた。どなたかに敵意を向けるような絵が、人の心をとらえるとでもお思いですか!？」

ずばりと言い切った麗華の声が、美術室の壁をふるわせる。かな子が息を呑んだ。麗華はかな子の絵に羽扇子を向けて、きびしい口調で言った。

「色はにごっていますし、とげとげしくて前に立っていただけませんわ。バラの芳醇な香りなどまったくありません。どこを取っても辛みと苦味ばかり。不快感を押し込めることがテーマだったのかしら？ でしたら取り繕おうなどとせず、堂々と押し出さなさい！ それができないのなら、奇抜な手など使うのはおよしなさい！ 真っ当な技術と精神をみがくほうがよほど先ですわ！」

言いたい放題もいいところ。歯に衣着せぬ言葉が、麗華の口から矢継ぎ早にまき散らされる。

公平にはよくわからないが、瞳とかな子の作品には決定的な差があるらしい。そして、それが麗華の逆鱗にふれたようだ。

怒涛の勢いは、矛先を公平にも向ける。

「公平も公平です。こんなこともわからないとは嘆かわしい。門外漢であるにしても、少しは勉強なさい！ 美術にふれたことがないからと言って、いい加減な判定は許しませんことよ！」

その一言に、かな子が反応した。

「美術にふれたことがないって、どういうこと？」

公平と瞳の顔が、一瞬のうちに凍りついた。言うだけ言ってすっきりしたのか、麗華がさらりと答える。

「どうもこうも、そのままの意味ですわ。公平は審美に関しては門外漢。審判部といえど、この分野に関しては素人同然です」

今度はかな子の顔色が変わった。見開いた目で、公平のほうをぎっとにらみつける。

「それじゃ、あんた、何も知らないくせに判定しようとしたの!？」

公平には返す言葉がなかった。

かな子は顔を真っ赤にして、ぶるぶると肩をふるわせている。かみしめられた歯が、彼女の爆発しそうな感情を如実に伝えてきた。瞳はその横で蒼白になっている。

本来なら、公平がかな子の勝利を宣言して、丸くおさめているはずだった。なのに、今はまったく逆の状況だ。

「ふざけないでよ。水沢さん！」

「は、はいっ！」

かな子が大声を上げ、瞳が直立不動の体勢をとった。真っ赤な顔のまま、かみつくような目でかな子は瞳に向かって叫ぶ。

「再戦を要求するわ！　こんなの納得できない！」

「っ！」

どなりつけられた瞳が身をすくめる。かな子は止まらない。両腕を広げて、部屋中に声を響かせる。

「ここまで言いたい放題に言われて引き下がれるわけないわ！　今回はアタシがダメだったかもしれないけど、次は負けないから！」

そして、最後にかな子は麗華のほうを見た。

「審判部の人にも、今度は好き勝手言わせないから！」

それに対して、麗華は不敵な笑みを浮かべて答える。

「よくぞおっしゃいましたわ！　いいでしょう。いつでも受けて立ってさしあげましてよ！」

「って、なんで麗華さんが返事してるんですか！」

公平が声を上げたときには、もう遅かった。かな子は肩を怒らせたまま、荒々しく扉を開けて美術室を出ていった。

バアンッ！　と音を立てて扉が閉まる。室内には、重苦しい沈黙が訪れた。

窓際で凧が小さく鼻を鳴らす。公平は、がっくりとうなだれた。

暗雲を背負って突っ伏す公平の上に、凜の冷たい声が降ってくる。

「だから言っただろう」

審判部の部室。定位置の窓際に腰を下ろした凜が、麗華の淹れた紅茶を口に含む。公平の前にも一杯、置いてくれたが、とても手をつけられる気分ではなかった。

「キミは審判の大原則を曲げたのだ。日下部。今回のことは自業自得だぞ」

凜の言葉が、公平の心に重く重くのしかかった。

審判は判定に私情を持ち込んではいならない。つねに公正に、誰に有利不利を与えるのでもなく、事実を事実として判定しなければならない。

そうでなければ、審判の介入するすべての競技は成り立たなくなる。試合や勝負を左右する権限があるからこそ、審判はそれを私物化してはならないのだ。もちろん、買収されるなど、もつてのほかである。

凜が瞳の頼みを引き受けなかったのは、このためだった。事情がどうであれ、はじめから結果を決めた判定を下すのは、審判のすることではないからだ。

そして、審判の権限を逸脱すれば、相応の報いがある。凜が言外に教えていたことを、公平は身をもって思い知ったのだった。

「それと、麗華は自分の心にうそをつかなかっただけだ。審美を判断する者にとって、それは必要不可欠なことだ。姿勢は正しい。大人げないとは思ったがな」

その麗華は凜のとなりで、優雅にカップをかたむけている。しかし、公平のどろんとした視線に気づくと、急に動きがぎこちなくなった。

「な、なんですか。わたくし、うそは申しておりませんわよ」

つんとすました顔をしつつも、麗華にいつもの歯切れのよさはない。責任の一端はあると思っ  
てくれているのかもしれない。

公平は恨みがましく口を開く。

「うそも方便っていう言葉も……」

「私のきれいな言葉の一つだな。それと、人のせいにする男も好かん」

しかし、公平の繰り言はぱっさりと凜に切って捨てられた。

「麗華のことより、キミには大いに反省すべきところがある。きちんと振り返れ」

凜の言うとおりであった。

公平はふたたび、がっくりと首を落とす。いいわけをする気力すら、断ち切られた気分だ。

「まったく。デレデレと鼻の下を伸ばしているから、こういうことになるのだ」

鼻を鳴らした凜が小声でつけ加えたところを、麗華が聞きとがめる。

「なんですか、鼻の下って？」

「な、なんでもないっ。麗華には関係のないことだ」

「まあ、なんですか、その言い方は。釈然といたしませんわ。お言いなさい」

「いやだ。誰が言うものか。ふん」

「ちょっと、こちらを向きなさいな、凜」

凜が左右にぶんぶん首を振り、そのたびに麗華が正面に回り込む。先輩二人の子どもじみた追いかけてっこを横目に、公平はテーブルの上に撃沈していた。

もはや、ぐうの音も出ない。完全に公平が招いた失態だと、改めて認識した。脳裏に、美術室から出る瞳の顔がよみがえる。

「わたしが考え足らずだったの。日下部くんは気にしないで。ごめんね、本当に」

そう言ってくれたが、瞳のうしろ姿は、そのまま消えてしまうのではないかと思うほど弱々しかった。

思い出すたびに、公平の心は「責任」の二文字にずしんと沈んだ。

「少しは反省したか、日下部」

「たしかに、あまりほめられたことではありませんでしたわね」

「はい……」

追いかけてっこに満足したのか、凜と麗華が声をかけてくる。公平は、うめくように言葉をしばらく出した。

「水沢に悪いことをしました……。野上にも」

『う』

凜と麗華が、そろって絶句した。

公平がどんよりと視線を送ると、二人とも、今度はそろって目をそらす。どちらも、なんともばつが悪そうな顔をしていた。

公平には言わないが、凜も麗華も、今回の事態を招いたことに責任を感じているのだ。

「ま、まあ、わたくしが少々、事態をややこしくしたことは認めますわ。わたくしは凜とちがって、反省の心を持ち合わせておりますから」

麗華のよけいな一言に、凜のこめかみに青筋が浮かんだ。

「なにが私とちがって、だ。麗華がずうずうしく、しゃしゃり出なければよかったことだ」

今度は麗華のほおがひきつった。

「ではあなたは、公平があのまま不公正な判定をすることを見逃したほうがよかったとおっしゃるのかしら？」

「結果的に止めたというだけだろう。後輩の前で変にかっこうをつけようとして」

「その後輩の過ちを正さないで痛い目を見させ、反省させるなど、いじわるが過ぎるのではありませんこと？ いやですわ、小姑でもあるまいし」

「なんだと！」

「なんですの！」

反省の色もどこへやら、やいのやいのと、凜と麗華がまた言い合いをはじめた。

この二人、おたがい妙なところでプライドが高く、顔を合わせればいつも意地の張り合いになった。そして、公平はその間にはさまれることがとても多い。

一人ずつで公平に接するときは、どちらも年上らしくて頼りになる。なのに、二人そろうといつもこの調子なのだ。

だが、今はこの口げんかもありがたかった。気がつけば、公平の中の暗い気分は薄らいでいる

。 やってしまったことはもう、しかたがない。この先をどうにかしようと、公平は前向きになることができた。

「もういいですよ。すいません、オレが悪かったです。軽率でした。けど、これじゃホントに水沢に悪いですし、野上にも納得してもらえません。だから二人とも、なんとか力を貸してください。お願いします」

素直に頭を下げて助言を乞う。と、凜も麗華も、ぴたりと口をつぐんだ。

「そうだな。なんにしても、日下部が審美を判断するには、やはり経験が足りなさすぎる」

「ですわね。今回だって、水沢さんと野上さんの絵のちがいはよくわからなかったでしょう」

一転してまじめな顔になった二人から、的確な指摘がなされる。凶星を突かれた公平は、ぽりぽりとほおをかいた。

「まあ、構図とか、色合いとか、いろいろ単語は聞きますけど、どういうことなのかはちょっと……」

「そんなことはどうでもいいのだぞ」

「頭でっかちな言葉だけ吹き込まれてきたのがよくわかりますわね。忘れておしまいなさい」

言いよどむ公平に、二人はあっさりと言ってのけた。

「必要なのは、キミがきちんと見ること。それだけだ。よけいなことは考えなくていい」

凜がいつもの、さわやかな風のような微笑みを浮かべる。自信に満ちた表情に、公平は背中をそっと押されたような、不思議な感覚に包まれた。

自分がついているから、遠慮なくやってこい。そう言ってもらえたようで安心する。

思えば、今回、凜がこういう表情を見せてくれたのは初めてだった。

「よし。やはり、実地で知ることだな。麗華」

「心得ましたわ」

麗華が立ち上がり、どこかに電話をかける。凜もまた、イスから腰を上げた。

「では行くぞ、日下部」

「どこにですか？」

「キミにはこの言い方のほうが伝わるだろうな」

黒く澄んだ凜の目に、いたずらっぽい光が宿る。口唇から吹いた風が、公平の耳をそっとゆらした。

「特訓だ」

## 3 まちがった風景

瞳とかな子の再戦は一週間後だ。それまでに、公平は少なくとも、絵についての判定を下せるようにならなければならない。

しかし、いまさら美術論だのなんだのを身につけるよゆうはない。日程的にもそうだし、なにより公平がそれを受け止められる自信がない。

小学・中学時代の公平は、ひまさえあればバットを振り、ボールを投げてきた筋金入りの野球少年だ。外で走り回る時間のほうが、教科書を開く時間より圧倒的に多かった。身体に叩き込まれることは得意だが、座って頭を使うのは苦手中の苦手だ、

そんな公平に凜と麗華が用意したのは、花園グループが所有する美術館を、丸ごと一つだった。

「まずは絵に接することから始めなさい、公平。ご心配なく。美術館は今日一日、借り切ってさしあげましたから」

むかえのベンツから下りた公平と凜に、麗華はあっさりと言う。この美術館は一般開放されているのだが、今は人の気配はない。麗華が電話一本で、みんな帰ってしまったのだ。

「わたくしは館長にごあいさつをさせていただきます。入り口は開いているそうですから、好きにお入りなさい。では、後ほど」

そう言って、麗華は公平と凜を残し、ベンツでどこかへ行ってしまった。

改めて、公平はそびえ立つガラス張りの建物を見上げる。通い慣れた学園の校舎の倍ぐらいありそうだ。

これが電話一本で押さえてしまえるというのは、庶民の公平の想像の域を軽く超えてしまう。

「す、すごいですね、麗華さん」

「口やかましいが、やはりこういうところでは頼りになるな」

凜は慣れているのか、平気な顔で入り口に向かって歩き出す。公平はあわててその後を追った。

「それで、凜さん。ここで何するんですか？」

「麗華も言っていただろう。まずは絵にふれることだ。見て回ればいい。麗華も私も、最初はこちらから始まった」

入り口の職員は公平たちに軽く頭を下げただけで、そのまま素通りさせてくれる。館内は物音一つしない、静謐な空気に包まれていた。となりを歩く凜の声が、冗談のように大きく聞こえる。

「麗華は審美眼にかけては、まちがいなく秀でたものを持っている。彼女の感性の広さ、鋭さは、私など到底およばない。なにしろ、一枚の絵や一つの楽曲から、においや味、肌ざわりまでつかんでみせるのだからな」

それは公平もおどろいたことだ。

美術室で瞳の絵を見たとき、麗華は風が吹いているとか、甘酸っぱいとか、目では感じ取れな

いはずの感覚を次々に口に出した。

もちろん、公平にはそんな感覚は得られなかった。だが、麗華は本当にそうしたものを感じ取っているのだという。

「たとえば、フィギュアスケートの技術点を、キミは正しく判定できるだろう。規定の技ができているかいないか、ルールに基づいて事実をひとつに限定するのは、キミの得意とするところだからな」

公平はうなずいた。

スポーツの判定の多くは、ルールというものさしに照らし合わせて行われるものだ。一番最初にゴールテープを切ったのは誰か、ボールがラインを割っていたか、竹刀が正しい場所に打ち込まれたか、など、それぞれに明確な基準がある。

審判は、それに合致するかどうかを判定する。ルールが審判によって変わることはない。

「だが、芸術点はそうはいかない。演技から感じ取ったものを咀嚼して、それを判定という形に昇華するのだから、ルールという絶対的なものさしはない。評価する審判が、ものさしも用意しなければならない」

公平も、フィギュアスケートをテレビで見ることがある。冬季オリンピックでは目玉種目の一つだ。

だが、実はいまいち、楽しみきれない。ジャンプやスピンの技術はすごいと思うし、トップクラスの選手の演技を見て感動を覚えることもあるが、明確なミス以外で、一位と二位の差をはっきりと言えることは少ないからだ。

一位の選手のほうが感動したと思っても、どこをどう感動して、どれほど差がついたのかを明言することは、公平にはできない。なので、同じスケートでは、どうしてもスピードスケートのほうにチャンネルを合わせてしまう。

麗華はその、公平が見抜けない部分を、ずばりと判定してしまうのだ。

「麗華の感性は本当に豊かだ。ひとつのことがらからたくさんを感じ取る。そして、それらをすべて受け止めて判断できる。芸術性の評価に正解も不正解もないのだろうが、それでも私は麗華の判定が正しいと思える。それだけの説得力を判断に与えるものを、彼女は持っている」

公平からすれば、凧も充分、芸術的な観点での判断力を持ち合わせている。フィギュアスケートだろうが彫刻展だろうが、凧なら問題なくさばいてしまうだろう。

その凧をしてここまで言わしめるのだから、麗華の実力は本物だと思ってい。い。

「ホントにすごいんですね、麗華さんって」

「口やかましいし、なにかと突っかかってきてうるさいし、本当に大人げのないヤツだがなっ」

公平が感心した途端、凧の評価が百八十度入れ替わった。ほおがふくれ、口がへの字に曲がる。

自分があれだけ評価していたのに、公平が麗華をほめると、それは気に入らないらしい。

「凧さん。麗華さんと仲いいんですか、悪いんですか？」

「……………悪いわけじゃない。あっちがからんでくるんだ」

あきれ半分に聞いてみると、凧はすねた子どものようにそっぽを向いた。麗華がらみになると

、凜は普段しないような表情を見せることが多い。

(ケンカするほどってヤツかな)

言ったらどちらも怒り出しそうだが、凜も麗華もいい友達なのだろう。たがいに認め合っているところは、いろいろと見受けられる。

ただ、後輩の公平としては、それはそれでもう少しわかりやすく仲良くなってもらいたいものだと思う。

「そうだ、日下部。中に入る前に言うておくことがある」

展示室の前で凜が足を止めた。改まった口調に、公平は少し緊張する。

「なんですか？」

「ここにはたくさん作品があるが、すべてを見ようとしてはいけない」

言っている意味がわからなくて、公平は眉間にしわを寄せた。

凜は続ける。

「興味の向いた作品だけ見ておけばいい。目を引かれなかったら、そこは素通りすること。いいな」

公平は目をしばたかせた。どういう意味か聞いてみるが、凜は答えてくれなかった。

「では、私は先に行く。キミのじゃまをしてはいけないからな。ゆっくり見てくるといい」

それだけ言うと、さっときびすを返して行ってしまう。

取り残された形の公平だったが、いつまでも突っ立っているわけにはいかない。おっかなびっくり、足を踏み入れた。

展示室はがらんとして広い。壁にいくつもの作品がかけられており、中央には休憩用のイスと、解説のパンフレットが置かれている。

作品は大きさも色合いもバラバラだ。公平が美術の授業で使った画板と同じくらいのものであれば、はがきほどの小さなものもあるし、五メートル四方もありそうな巨大なものもある。

描かれているのも人物であったり動物であったり、風景であったり静物であったり、さまざまだ。中にはまったく判別できない抽象画もある。

公平はとりあえず、凜に言われたとおり、目を引くものだけを見してみることにした。

「うわ、なんだこりゃ」

最初に目についたのは、歌舞伎の役者を描いた作品だった。公平一人では持ち上げられない大きな絵なのに、やたらと輪郭がぼんやりしている。不思議に思って近づいてみて、公平は思わず声を上げた。

その絵は、チューブから搾り出した絵の具をそのままキャンバスに塗りつけて、役者の姿を描き出していたのだ。

「こんなのあるのか」

絵といえば、筆できちんと描くもの。それくらいの認識しかなかった公平にとって、これは斬新だった。

間近で見ると、絵の具をめちゃくちゃに塗りたくっているようにしか見えない。しかし、離れてみればちゃんと一つの絵に仕上がっているのだ。

「へえー……」

公平が美術館に足を運んだのは、小学校の社会見学以来だ。そのときも作品などそっちのけで走り回り、ロビーで正座させられたことくらいしか覚えていない。

しかし、こうして目の前で、ちゃんと向き合って作品を見てみると、それまで気づかなかった発見があって、なかなかおもしろかった。

たとえば、遠目にはビル群を描いたように見える絵がある。が、近づいてみると、それはすべて正方形で構成されていた。無数の大きさのちがう正方形が集まった結果、ビルの群れになっているのだ。

キャンバスの上下左右に、はりつくように街が描かれていた。よく見たら、キャンバスの端が水面になぞらえてある。そして、水は空と、キャンバスの中央で混ざり合っていた。

いろいろと凝らされた工夫に気づくことが、新鮮で楽しい。そして、最初は突飛な技法を凝らした絵に目を奪われがちだったところが、進んでいくうちに、なんの変哲もない人物像や果物かごの絵にも目を凝らすようになっていった。

そうしていくつかの展示室を通過して、公平は凜を見つけた。

一枚の風景画の前で足を止め、じっとそれを見つめている。じゃまをしては悪いかと、公平は足を止めたが、凜のほうが公平の気配に気づいたようで、すっと振り返った。

視線で、来てもいいと言われ、公平は凜のとなりにならぶ。

「凜さん、この絵、好きなんですか？」

「ああ」

タイトルは『紅葉』。どこかの公園だろうか。池の周りに植えられた並木の、みごとな紅葉を描いた絵だ。

橙色に染め抜かれたキャンバスが、包み込むような広がりを感じさせる。その中に一ヶ所だけ、淡い山吹色の花が何本か開いていた。

「どうだ？」

「ええっと……」

感想を求められ、公平は口元に指を当てた。思ったまま、口に出してみる。

「きれいで、いい風景だと思います。紅葉の名所なんですかね。テレビとかで出てくる有名どころじゃなくて、地元の人だけ知ってる穴場みたいな場所。昼寝したら気持ちよさそうです」

「昼寝か。それはいい感想だな。キミらしい」

凜がおかしそうに笑った。的はずれなことは言わずにすんだようで、公平はほっと胸をなで下ろす。

凜は絵のほうに視線を戻し、静かに口を開いた。

「この絵はな、本当はまちがっているんだ」

公平はもう一度、紅葉に目を凝らしてみた。

本当にいい風景だと思う。麗華のまねではないが、公平ですら風やにおいを感じ取ることができそうだ。特に違和感を覚えるようなところはない。

「どこかおかしいんですか？」

「池のほとりに花が咲いているだろう。その花は、春先にしか咲かない。紅葉とその花がいっしょに見られることはないんだ」

凜に言われて、公平は花に焦点を合わせた。山吹色が、おだやかに風に揺れている。公平には、その花の種類はわからない。咲く季節も同じだ。

「そういうのって、やっぱり評価のマイナスになるんですか？」

公平が聞くと、凜は答えないまま、ゆっくりと絵に近づいた。しなやかな手が伸びて、花卉をそっとかくす。

「今度はどうだ？ どう見える？」

逆に問いかけられて、公平は視線を戻す。と、橙色が目の前に大きく広がってきた。

本当に包み込むように、紅葉が際限なく視界をおおう。さきほどまでは、ほどよいところで広がりやが止まったように感じたのに、今はそれがない。

奇妙な感覚にとらわれながら、公平はそれを凜に伝えた。

「なんか、やりすぎっていうか、ホントに紅葉だけになったっていうか……。すみません。それぐらいしか言えないんですけど」

「昼寝はできそうか？」

「うーん、ちょっと落ち着かない気がします」

「そうか。それだけ言葉にできるなら、たいしたものだ」

公平の言葉足らずの答えにも、凜は満足そうにうなずいた。

「昔は私も、キミと同じだった。美術、芸術の判定などまったくできなかつたんだ。この絵を見たときも、最初は季節はずれの花を見とがめて得意になったものだ。だが、すぐに思い知らされた。芸術にルールはない、とな」

なつかしそうな目で、凜は紅葉を見上げた。

はじめてこの絵を見たとき、凜は季節感を損なう花の存在を見つけ、まちがった絵だと判断したという。四角四面に常識をあてはめ、絵そのものに目を向けなかった。

だが、偶然、前を通った人の陰に、今と同じように花がかくれた瞬間、凜は自分のほうがまちがっていることを理解したのだそうだ。

「絵画は見た瞬間に、なにかを伝えてくる。文章や音楽は、最後まで読み解いたり聞いたりして、それがなされるが、絵画は一瞬だ。そこには絵画のかもしれない特有の空間が広がる。絵画から目を離せなくなるときを、『空間を支配される瞬間』と表現した人がいるが、上手い言い方だな。あのときの私がそうだった」

広がった橙色の風景に飲み込まれ、凜は言葉を失った。

それは一瞬のことだ。次の瞬間には、花はふたたびそこに咲き、紅葉は調和を取り戻した。

だが、その一瞬の変化に、凜の心は釘づけになったのだ。

「芸術にルールはない。私はこの絵に教えてもらった。それに気づいたとき、私のいた空間は、この絵に支配されたのだと思う。ありえないこの花が咲いているからこそ、この紅葉はありえる。これは、そういう絵だ」

凜にとって、特別な一枚。原点とも言うべき風景。それがこの、矛盾をはらんだ『紅葉』だった。それ以来、凜は芸術を見ることを、また一から学び直したという。

公平には、そういった経験はまだない。凜に比べれば、公平が美術品に接する機会も熱意も、

まったく足りていない。

もちろん、回数で決まるものではないだろうが、きっかけをつかむ一枚には、まだ出会えないのかもしれない。

ただ、今、目の前にある風景は、公平の記憶に強く焼きついた。

「でも今は、凜さんが絵の中にいるみたいできれいですよ」

なんの意識もなく、言葉が口をつく。凜が大きな目をぱちくりとしばたいた。

片手をかかげて、紅葉の中にたたずむ凜。キャンバスを飛び越えた姿が、公平には一枚の絵のように見えた。それがあまりにも自然で、思わず言ってしまったのだ。

言ってから、公平は自分が何をしたのか気がついた。

「な、なな、なにをいきなり言い出しているんだ、キミは！」

「す、すみません！」

真っ赤になって大声を上げる凜に、公平もあわてて頭を下げる。気恥ずかしさにほおが熱くなるのがわかった。

「バカなことを言っていないで、他の絵を見て来い！ 私は先に行くからな！」

上ずった声で一方向的に言うと、凜は逃げ出すように去っていった。足音が遠ざかるのを待って、公平は顔を上げる。麗華がここを貸し切りにしてくれたことに、心から感謝した。

見上げれば、みごとな紅葉が広がっている。しかし、凜の姿はない。

一瞬、物足りなさを感じた後、公平もそそくさと、紅葉の前から立ち去った。

館内をひとめぐりして外に出ると、喫茶室から麗華が呼んでいた。

「いかがでした、公平？」

となりには凜が座っている。公平のカップも用意されている。凜は公平と目が合いそうになると、カップを持ち上げて顔をかくした。

少しだけのぞいた上目づかいの視線を意識しないようにして、公平は麗華に答えた。

「意外なほどおもしろかったです。ただ、半分ぐらい、適当に流しちゃいましたけど」

「ふふ。ちゃんと凜の言いつけを守りましたわね。感心ですわ」

麗華が微笑む。そういえば、凜が最初に言っていたのはなんだったのだろう。公平がたずねてみると、麗華は口元に指を当てて、目を細めた。

「公平は、美術の授業が苦手だったでしょう」

あっさりと言い当てられて、公平は思わず顔をなでてしまった。何も書いていないぞ、と凜に言われる。これも麗華の眼力かと、公平は感心してしまった。

「わかりますか？」

「ええ、わたくしほどの者ともなれば。と言いたいところですが、残念。ほとんどの方は今の質問にうなずくのです」

そう言う麗華の表情は、どこかさびしそうにかげっていた。

「美術の授業を受けて、美術に興味を持ったという人は、ほんのひとにぎりですわ。公平は、社会見学などで美術館を訪れたことはありますか？ それとも、それも忘れてるかしら」

「は、はい。よくわかりますね」

「この質問は、スポーツ少年のほとんどがうなずきますわ」

くすくすと上品に笑う麗華の後を、凜が続ける。

「どこの授業も変わらないな。絵に興味を持ちきれていないのに、課題ばかり押しつけられる。それではいやな思い出が重なるだけだ。誰も美術を好きになどならない」

「芸術系の分野にふれることに慣れていない人は、あれもこれも一度に見ようとして、そのことが次第に苦痛になっていくのです。そして、美術や芸術そのものをきらいになってしまうのですわ。それでは意味がありません」

二人の話を聞いて、ようやく公平は理解できた。

「だから、作品を全部は見るなって言ったんですか」

凜と麗華は、同時にうなずいた。

美術館にはたくさんの作品があった。すべてを鑑賞しようとしたら、丸一日あっても足りない。公平はその一枚一枚を凝視し、何がよくて何が悪いのかを、わからないのに考え続けて、時間をすごしただろう。

そのとき、公平は、あの絵の具で描かれた歌舞伎役者のことを覚えていただろうか。

正方形で造られたビル群を、キャンバスの端が水面になった街を、なんの変哲もない人物像や果物かごを心にとめただろうか。

凜の立っていた紅葉の風景に、公平の目は奪われただろうか。

そうはならなかったと思う。

「今の公平は、自分から美術にふれようとしていますわ。その気持ちが一番大切なのです。人から押しつけられて絵を見たところで、何も感じ取ることはできません。できるとすれば、『この絵のせいで』という暗い感情だけですわ。それが、この先も絵について知ろうという気持ちにつながりますかしら」

「私たちはキミの気持ちの火を消さないように機会を用意しただけだ。今日、ここでキミが感じたことは、すべてキミの中から生まれてきたことだ。自信を持て。そして、大切にしてくれ」

二人の先輩の言葉が、公平の胸に沁みた。

美術、芸術にまったく縁がなく、この先もふれることはないだろうと思っていた公平に、凜と麗華は、一番よい形でそれにふれ合える場所を作ってくれたのだ。

公平の中に、作品を見てきたときとはちがう感動が広がる。なんだかんだと言っても、この二人は公平のことを助けてくれる、頼りになる先輩たちだった。

「さて、どうする？ 帰るか？ 見てこなかった絵は、もういいか？」

凜の問いかけは、どこかいじわるな響きを帯びていた。麗華はだまってカップをかたむける。けれど、その目は同じように公平に問いかけていた。

公平は、口元がほころぶのを感じた。

「凜さんと麗華さんは、ここにある絵にはくわしいんですね？」

「麗華がよく知っている。私はたしなみていどだ」

「けれど、凜の意見は独特で、なかなか聞きごたえがありますわよ」

示し合わせたように、凜と麗華はおたがいを持ち上げる。こんなとき、二人の息はぴったりだ。どうせ公平がなんと言うか、わかっているのだろう。

「それじゃ、もう一回、見て回ってもいいですか？ できたら解説つきだとありがたいんですけど」

公平の言葉に、凜と麗華はならんで微笑んだ。

「しかたがないな」

「かわいい後輩の頼みですからね」

立ち上がった二人は、口ではそう言いながら、楽しそうな顔をしていた。公平はその間にはさまれるようにして、もう一度、美術館の入り口をくぐった。

ちなみにこの後、一枚ごとに激論を戦わせる凜と麗華の間で、公平が板ばさみになり続けたのは、またべつの話である。

## 4 絵は叫ぶ

一週間後の美術室では、以前のように、瞳とかな子、二人の作品がならべられた。

公平がその間に立って、二枚を見比べる。室内には、これまた以前と同じ面々が顔をそろえていた。

いどみかかるような目で公平を見ているかな子と、沈んだ表情でうつむいている瞳。部屋の後方には美術部の部員が集まっている。

そして、窓際には凜と麗華が立って、なりゆきを見守っていた。

かな子は当初、麗華に判定を求めたが、凜と麗華はそれを断った。

今回の騒動は、公平が招いたことだ。だから、公平に汚名をそそぐ機会を与えてほしい。もし、また納得できない結果になったのなら、公平にはそれ相応の責任を取らせる。そういう条件で、かな子も渋々引き下がったのだ。

逆に言えば、公平は凜たちから、きっちりと判定しなければ許さん、と釘を刺されたわけである。

瞳の作品は、卒業式の絵だった。桜の花が舞う中で、卒業証書の入った筒を持った学生たちが入り乱れ、思い思いに別れを惜しんでいる。写真を撮ったり、握手を交わしたり、抱き合ったり。門出の日を描いた風景画だ。

一方のかな子は、一輪挿しの花を描いていた。彼女が好きなのか、赤いバラの花だ。白いキャンバスの中で、その存在を誇らしげに主張している。

無言のまま、公平は二枚の絵をじっと見続けた。今の公平がつかみ取れるものを、一つ残らず見つけるまで、目を離さなかった。

時計の長針が、半回転以上動いたところで、公平は顔を上げる。かな子が口唇を引き結び、瞳がかすかに視線をそらした。

落ち着いた声で、公平は結果を口にする。

「野上の勝ちです」

かな子が小さく息を呑む。美術部の部員たちの間からは、ざわめきが起こった。

瞳はなにも言わない。結果は、以前に彼女が望んだものになった。その口から、不服の言葉は出てこない。

「理由を聞いてもいいか、日下部？」

かわって口を開いたのは凜だった。黒く澄んだ目が、まっすぐに公平のほうに向けられている。麗華も、かな子も、同じように公平に視線を向けていた。

公平は一つ深呼吸をして、瞳のほうに向き直った。

「水沢。言いたくないけど……わざと下手に描こうとしたところ、あるんじゃないか？」

はじかれたように、瞳が顔をはね上げる。見開かれた目には、明らかな動揺があった。

「やっぱりな」

かな子の勝利を宣言したとき、瞳の表情が、ほんの少しだけ変化した。痛みをこらえるように

、細い眉が一瞬だけしかめられたのだ。それを公平は見逃さなかった。

瞳の顔に現れたのは、罪悪感だった。

「手を抜いたっていの!?!」

「落ち着いてくれ、野上。水沢は、自分の気持ちをちゃんと絵に込められなかったんだと思う。野上の言う『手抜き』とはちがうはずだ」

興奮するかな子を手で制し、公平は務めて落ち着いた声で言う。凜も麗華も、なにも言わない。この場を取りしきることができるのは、公平だけだ。

公平は一つ、口唇をしめらせた。

「水沢は、この勝負で負けることを望んでいた。前にオレが審判をしたのは、その話を聞いたからなんだ。あのときは、絵のできがどうであれ、野上の勝ちにするつもりだった」

「なに、それ……。まさか、今日も！」

「ちがう。今日は本当に野上の勝ちだ。なんなら、凜さんや麗華さんに見てもらってもいい。野上の絵からは、この花を描こうという一途さが伝わってきてすごく引き込まれた。けど、水沢の絵は、見ても印象に残らない。なんだか、汚れたガラスを通して見ているようだった」

かな子が食ってかかる。それに対して、公平は強い声で言い返した。

かな子の描いたバラは、公平の目を強く引いた。きれいなバラだと、直感的に思った。部屋の中に同じ一輪挿しのバラがあれば、公平は思わずそこを見てしまうのではないかと、そんなふうに感じられた。

だが、瞳の描いた卒業式は、キャンバスに乗せられた線と色だった。

「この日がつらい別れの日か、明るい旅立ちの日か、そのどちらも含んでいるのか。どれともわからないんだ。ごちゃまぜになっているのは、水沢が気持ちの整理をつけられなかったからじゃないかな」

瞳は顔面蒼白になり、細かくふるえている。つるし上げているようで、公平の心はざわめいた。

けれど、公平にはまだ、言わなければいけないことがある。

「水沢がもし腕をケガしていたら、野上も手を抜いたとは言わないだろ？ それが心だったって話だ。野上に勝ちたくない。これ以上、野上と会うことがつらくなりたくない。でも、絵は本当に描きたい。絵にうそをつきたくない。そういった思いがごちゃまぜになって、水沢の手をにぶらせた。だから絵も、バラバラになってる」

かな子が瞳の絵を手を取った。複雑な表情で、画面を見つめる。できレースをしかけられたという怒り以外の感情が、その横顔に現れていた。

公平はそっと目を伏せた。

「オレ、水沢の絵から、悲鳴が聞こえた気がしたんだ」

瞳が、かな子が、美術部の部員たちが、公平に視線を集める。公平は、無意識に右肩をつかんだ。小さなうずきを感じながら、口を開く。

「オレは、絵に興味を持ったのはついこの間だし、いつそれをなくしてしまうかわからない。でも、水沢や野上はちがうと思う。やめるとかやめないとか、考えもしない。本当に好きなこと

って、そういうものだと思う。だからこそ、できなくなったときって、つらい」

公平の肩は、一年前、壊れてしまった。試合で白球を投じることは、もうできない。一年前までは、やめるなどと考えもしなかった野球を、公平は今、やめてしまっている。

それでも思いが断ち切れなくて、公平は審判部に入った。審判という立場で、大好きな野球の近くにいられる。今はそうして吹っ切ることができた。

けれど、それまでの時間は、ずっと鉛色の曇り空が続くような、重苦しい日々だった。

「野上。それでも水沢が絵を描こうとしたことは、認めてあげてくれないか。思うようにできなくても描いたのは、たった一つだけど、水沢の本当の気持ちだと思う。それだけを比べるなら、この勝負は引き分けだ」

すすり泣きの声が、美術室にこだました。瞳が立ち尽くしたまま、双眸から涙を落とす。床にいくつもの斑点が生まれ、美術部の部員たちがとまどった顔を見合わせた。

しゃくりあげながら、瞳は途切れ途切れに訴える。

「わたし……絵を、描いていたい。それだけです……。ダメですか、野上さん？」

か細くて、消えそうで、しかし切実な、瞳の叫び声だった。

かな子は黙り込む。見守る部員たちは、固唾を呑んで彼女の言葉を待っている。

公平に言えることは、すべて言った。凜も麗華も、口をはさまない。

どれほどの時間が経っただろうか。かな子が、瞳の作品を机に戻した。

「……ダメよ、こんなの描くんじゃ」

瞳の表情が凍りつき、一気に血の気を失う。公平は思わず身がまえ、かな子に向かって声を上げようとした。

「日下部！」

が、それを凜が止めた。まっすぐで強い視線が、公平の身体を射抜き止める。

かな子がゆっくりと、瞳に近づいた。気が気でなく、公平はかな子のほうを見る。そして、目をみはった。

かな子の口元には、おだやかな笑みが浮かんでいたのだ。

「こんな絵じゃダメ。だから、今度は本気で描いて、水沢さん。そして、審判部の人たちに判定してもらおう。何度でも。……ごめんね」

つき物が落ちたような晴れやかな顔で、かな子は笑った。そのまま瞳の手を取る。

「絵の悲鳴か。日下部くん、いいこと言うね。アタシにまで聞こえちゃったよ。アタシも、水沢さんにこの絵を描かせちゃった一人だね。反省する」

呆然とされるがままになっていた瞳の顔が、くしゃっとくずれた。大粒の涙がいくつもこぼれ落ちる。そして、とうとう声を上げて泣き出した。

美術部の部員たちが、瞳とかな子の周りにはかけ寄る。二年生、三年生が口々に「ごめんね」と、二人に呼びかけた。

その様子を見ながら、公平は大きく息をついた。

こわばっていた身体の力がようやく抜ける。思わず、その場に座り込みそうになった。と、肩を軽く叩かれる。

凜と麗華が、満足そうに笑っていた。

「よくやった」

「みごとな審判でしたわ」

簡潔なねぎらいに、公平も表情をほころばせる。

「凜さんと麗華さんのおかげです。ありがとうございました」

ようやく、丸くおさめることができた。それもこれも、しっかりと鍛えてくれた二人のおかげだ。公平は改めて、凜と麗華に頭を下げた。

美術部の全員が、公平に礼を言う。瞳は目を真っ赤にしていたが、笑顔を向けてくれた。かな子もすっきりとした顔で、瞳の横に立っている。

騒動を大きくしたことをわびて、公平は美術室を後にした。

審判部への帰り道で、公平は先輩たちに話しかけた。

「あの、凜さん。美術部って、文化祭でコンテストをやるんですよね。そのときは、オレがまた判定させてもらっていいですか？」

「無論だ」

「うれしい言葉ですわね。歓迎いたしますわ」

凜も麗華も、笑顔で公平の言葉を受け入れてくれる。

が、続いて始まった話に、公平は己のうかつさを悟った。

「そうと決まれば、また特訓だな。駅前でちょうどおもしろい展覧会がやっている。行ってみよう」

「あら、お待ちなさい。審美を鍛えるのならわたくしの出番ですわ。凜は引っ込んでいなさい」

公平をはさんで、凜と麗華の間に火花が飛び散る。まずいと思ったときには、もう遅かった。

どちらが公平を指導するかで、二人はたがいにゆずらなくなってしまったのだ。

「引っ込んでいろとはなんだ。私は部長だぞ。部員の教育も仕事のうちだ」

「長ならば、公平一人にかまっているのはよろしくないのではなくて？ きちんと部全体に気を配っていただきたいものですわ」

「ではその部長の責任として、日下部の健全な成長を考えなければならないなっ！」

「あら～、それはいったいどういう意味ですかしらねっ！」

ぐずぐずしている間に、二人の口調がどんどん激しくなっていく。そして、公平の恐れていた言葉が飛び出した。

「いいだろう。では日下部に決めてもらうぞ！」

「よろしいでしょう。望むところですよ！」

バツと音のしそうな勢いで、凜と麗華の髪がひるがえる。かみつくような形相で、二人は公平のほうを振り向いた。

「というわけで、日下部——あ、こら、どこへ行く！」

「ちょっと、なにを逃げておられますの、公平！」

その一瞬前に、公平は危険を察知して、一足早く逃げ出していた。

「待て、日下部！」

「止まりなさい、公平！」

「勘弁してくださいよ！」

『廊下を走るな!』という貼り紙の前を、公平は全速力でかけ抜ける。そのすぐ後を、審判部の  
二大美女がすごい勢いで追いかけていった。

芸術は、一筋縄ではいかない。

公平はそのことを、あまり芸術とは関係のないところで知ることになったのだった。

(了)

ここでは本誌掲載六作のそれぞれについて解説する。第二号である今回のテーマは「紅葉」ということで、前回の序章的展開に続いていよいよ話を広げていく流れながら、一方でこのテーマには物事が終わっていくような雰囲気もある。そこを各作家がどのように折り合いをつけたか、を楽しんでほしい。

### 『きみの花飾り』入江棗

「事情がある少女とそこに付け込む形の少年」というシチュエーションは前回と共通しつつ、三姉妹の次女に主役を移した二話目。このような共通のシチュエーションを利用するのは難しいのだが、うまくいっているようだ。三話もこのスタイルなのか、大きく変えてくるのか？ なかなか楽しみだ。

### 『人形姫と泥棒悪魔』貴水玲

感情のない少女と感情豊かな少年という組み合わせは古来様々な物語に登場するパターンだが、それをどう料理するかは書き手の腕次第。この作品はファンタジックな雰囲気を漂わせつつ、うまく「二人の心の交流」と「ゆっくりと変わっていく少女」を描き上げている。ここからどう、さらなる変化を見せるのか——変わるというのはいいことばかりではないはずだが——楽しみ。

### 『世話焼き魔—メイド』番棚葵

記憶喪失の魔界の王子(?)とメイドで人魚の少女の物語。二人の掛け合い、迫る危機、その中での心の交流——安定感がありつつもきちんと読者を驚かせ、物語に引き込んでくれるのはまさにベテランの技。今回もその技がしっかりと発揮され、楽しませてくれる。

### 『王子と私とご主人様』広野未沙

魔法の使えない少女と、魔界の王子と、少女の仕えるご主人様。今回の三人は紅葉を見に行くことになって——というお話。ドキドキとワクワクが入り混じりつつの、キャラクター同士の掛け合いを純粹に楽しんでもらいたい作品。あまり肩に力を入れず、少女の気持ちに心を重ねるつもりでどうぞ。

### 『くるくる』水島朱音

今回は完全に導入で、いよいよ話が動き出した、という感がある。高校時代をともにした図書部の面々はなぜ別れなければなかったのか？ 「彼女」の死はそこにどうかかわっていたのか——という謎に対するとりあえずの答えと、そして新たな謎。それらが提示されつつ、青春時代特有のすれ違いを繰り返す心の動きがしっかり描かれているのがうれしい。

『審判部な面々』 諸星崇

野球の試合という正統派の「審判」だった前回に続き、今回は変化球——というか、むしろこちらの需要のほうが大きそうだ、という芸術系の「審判」が題材。審判は私情を入れてはいけなものだが、芸術にはどうしても主観が付きまとう。さあどうするのか……というのがテーマになる。今後もどんな個性的な審判部の面々が出てくるのか、またどんな「審判」が題材になるのが楽しみ。

## 奥付

---

2010年10月30日 発行

著 者 入江棗／貴水玲／番棚葵／広野美沙／水島朱音／諸星崇

企画・監修 榎本秋

発 行 所 株式会社榎本事務所  
〒179-0076  
東京都練馬区土支田1-29-12 ファミール光が丘102  
電話 03-6750-6341

表 紙 新月竜（AMG出版工房）

イラスト ヒトエ、Snow、伊藤由希、神内みさと、雛咲瑠遮（すべてAMG出版工房）

協 力 脇功一、三浦奈緒  
（アミューズメントメディア総合学院大阪校キャラクターデザイン学科）

本マガジンは、榎本事務所HPで配布しているPDFファイルを改変しないことを条件に配布、複製は自由とする。ただし、有償での配布は印刷も含めて不許可とする。